
第2弾ごちゃまぜ逃走中～アイドル誘拐監禁事件～

リリカルショーバイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第2弾ごちゃまぜ逃走中〜アイドル誘拐監禁事件〜

【Nコード】

N0685U

【作者名】

リリカルシヨバイ

【あらすじ】

舞台は深夜営業のとあるショッピングモール。

ここでは本日、ある売り出し中の人気アイドルによるイベントが行われようとしていた。しかし、その裏ではとんでもない事件が発生していた・・・この事件に纏わる様々な出来事に20人の逃走者が巻きこまれていく！

果たして、ハンターから150分間逃げ切り、賞金を獲得する逃走者は現れるのか！？

逃走者紹介（前書き）

皆さん、大変お待たせしました！

第4弾逃走中スタートです！

まずは逃走者の紹介です。

今回のゲームに参戦する20人の逃走者を明かします。

それではどうぞ！

逃走者紹介

初参戦の方々

大乱闘スマッシュブラザーズDX

> i 2 5 6 2 7 — 2 0 9 6 <

前回の裏切り者・マリオの未来の姿

医者の仕事に専念してはいるが、体力の衰えを全く感じさせない
そのずば抜けた洞察力で逃げ切りを狙う

> i 2 5 6 2 9 — 2 0 9 6 <

第1回逃走中に参戦したリンクの子供の姿

軽い身の熟しこなと積極性が武器

兄貴分であるリンクを超える事を目標としている

> i 2 5 6 3 0 — 2 0 9 6 <

第1回逃走中に参戦したマルスやアイクとは同士

脚力が強く、ミッションへの参加意欲も高い

気持ちで負けないをモットーに逃げ切りを誓う

マリオシリーズ

> i 2 5 6 3 1 — 2 0 9 6 <

ルイージのライバルであり、ワリオの相棒

体力にはかなりの自信を持つが、ミッションには消極的
ワリオ同様金にかなりがめつい

> i 2 5 6 3 2 — 2 0 9 6 <

自称ピーチ及びゼルダのライバル

姫Ⅱ消極的というイメージを払拭^{はらいつく}すべく活躍を誓う

しかし、目標金額の50万円に達したらずぐ自首するつもり

魔法少女リリカルなのはシリーズ

> i 2 5 6 3 3 — 2 0 9 6 <

ヴォルケンリッターの将であるが為に、責任感がとても強い

故に運動能力も高く、積極的でもある

前回頑張っていたフェイト・はやて・エリオの為に、逃走成功に
闘志を燃やす

> i 2 5 6 3 4 — 2 0 9 6 <

誰よりも負けん気が強い

心身ともに若い為、足には自信が無い

しかし、前回頑張っていたのは・はやて・ティアナの為に逃げ
切りを狙う

> i 2 5 6 3 5 — 2 0 9 6 <

足はかなり遅く、少々ドジなところもある

それでも、人を思いやる気持ちは強い

前回頑張っていたのはやての為に、逃げ切る自信を持ち続ける

再参戦の方々

> i 2 5 6 3 6 — 2 0 9 6 <

前は、自前の脚力を生かせず2人目で確保された
今回こそは見せ場を作りたいと思っている
しかし、運に見放されやすいのが玉に瑕きず

> i 2 5 6 3 7 — 2 0 9 6 <

前は、自首出来ずに残り36分で確保された
思い立った事がすぐ行動に現れるほど行動力がある
金に貪欲どんよくな性格であり、自首も念頭に入れているらしい

> i 2 5 6 3 8 — 2 0 9 6 <

前は、ボースゲーム残り僅か2分で確保された
その悔しさをばねにして逃げ切る事を誓う
今回も近かれ遠かれ、ミッションには必ず参加する

> i 2 5 6 3 9 — 2 0 9 6 <

前は、最後のミッションに貢献するも残り8分で確保された
人生で培つちかった経験を生かながら、常に作戦を考えている
今回も基本は隠れるという事を忘れない

> i 2 5 6 4 0 — 2 0 9 6 <

前は、大量のハンターに囲まれるという悲惨な形で13人目に確保された

ビビりな性格は全く変わっていない

しかし、多くの人から輦蹙ひんしゅくを買った兄のマリオの為にも、逃走成功を狙う

> i 2 5 6 4 1 — 2 0 9 6 <

前は、かなりの活躍が見られたが残り16分で確保された
怖がりだが、かなり行動力がある

意地でも今回は逃げ切りたいと思っている

前回からの引き継ぎ

> i 2 5 6 4 2 — 2 0 9 6 <

前は、踏ん張りも甲斐無く残り3分で確保された

今回も前回同様、ミッションは必ず成し遂げようとする

初代主人公の名に賭けて、逃走中制覇に闘志を燃やす

> i 2 5 6 4 3 — 2 0 9 6 <

前回は、通報・確保・復活・再確保といった多くの出来事を経験している

前回よりは多く活躍する事を目標とする
運を味方に付けて、初の逃走成功を狙う

> i 2 5 6 4 4 — 2 0 9 6 <

前は、全てのミッションで貢献するも残り7分で確保された
今回も前回同様、ミッションには絶対に参加するつもり

「夏木りん」だけでなく「北条 響」を新たな目標とし、活躍を誓う

> i 2 5 6 4 5 — 2 0 9 6 <

前は、逃走中初の強制失格という屈辱を味わった
足には自信が無く、臆病でもある

しかし、積極性がありミッションへは出来るだけ参加するつもり

> i 2 5 6 4 6 — 2 0 9 6 <

前は、裏切り者・マリオの通報によって3人目に確保された

3 度目の正直とばかりに、今回は気合いの入りが違う
しかし、やはりハンターにはビビりまくり

> i 2 5 6 4 7 — 2 0 9 6 <

前回は、裏切り者・マリオの通報によって6人目に確保された

3 度目の正直とばかりに、気合は十分

今回こそ長く生き残り、ヒーローになりたいと思っている

逃走者紹介（後書き）

次回から3回に分けて、事前番組風にいろいろと紹介していきます。

楽しみに♪

事前内容？ 逃走中のルール（前書き）

今回の逃走中で適用されるルールを確認せよ！

事前内容？ 逃走中のルール

ルール？ ハンター

今回の逃走中ではこれまでと異なり、スタートハンターは3体。

ハンターは神出鬼没。逃走者を見つけ次第、驚異のスピードと実力で確保へと向かう。

逃げ切るのは容易な事では無い。

ルール？ 賞金

今回もこれまでの逃走中同様、賞金は1秒100円ずつ上昇。

150分間のゲームを逃げ切った逃走者は、賞金90万円を獲得出来る。

但し、ハンターに捕まれば即失格。賞金は0円となり、ゲームから排除される。

ルール？ エリア

今回の逃走中の舞台となるのは、多くの客で賑わう深夜のショッピングモール。

多くのテナントやアミューズメント施設が立ち並び、広大な駐車場も完備されている。

1階

> i 2 5 4 1 0 — 2 0 9 6 <

2階

> i 2 5 4 1 1 — 2 0 9 6 <

3階・4階・5階・屋上

> i 2 5 4 1 2 — 2 0 9 6 <

延床面積は東京ドーム^{のへゆか}およそ3個分。

このエリアの中を、20人の逃走者達が逃げ回る。

ルール？ 自首

逃走者達は、1階の宝くじ売り場付近及び2階の100円ショップ付近に設置された自首用電話から自首を申告すれば、その時点の賞金を獲得し、ゲームからリタイアする事が出来る。

但し、自首用電話にはダイヤルキーが付けられており、番号を合わ

せて解錠しなければ中の電話を取り出す事は出来ない。

ルール？ ミッション

ゲーム中に突然発動し、逃走者達を掻き回し続けるミッション。

ミッションをクリアしなければ、逃走者は時に圧倒的不利な状況に追い込まれ、逃げ切る事は困難となる。

このショッピングモールでは、今回あるアイドルのイベントが行われる事もあり、通常以上に厳重な警備が敷かれている。これが逃走者に大きな影響を及ぼす事になる。

今回は一体どんなミッションが待ち受けているのか！？

ルール？ オープニングゲーム

過去の逃走中では、色付きの鎖を用いたロシアンルーレット風のオープンニングゲームが採用されていた。

しかし今回は、本家でも採用されなかったオリジナルのオープンニングゲームの採用を決定。

新たに使用するの……1つのボタン！？これが意味するものは！？

全ては本編で明らかとなるだろう！

事前内容？ 逃走中のルール（後書き）

次回は、ゲームとリンクして進行するドラマのあらすじを紹介します！

事前内容？ ショートドラマのあらすじ（前書き）

ゲームと同時進行するドラマの展開を予習せよ！

事前内容？ ショートドラマのあらすじ

今回の逃走中の舞台となる、深夜のとあるショッピングモール。

ここでは、今最も注目を集めているアイドルのイベントが行われる予定なのである。

そのアイドルの名は、伊東和葉^{いとうかずは}・・・現役大学生の19歳である。

今年に入り、バラエティやグラビアなどで数多くの活躍を見せ、最近ではドラマや声優などをも熟^{こな}すまでに成長。

そして今回は、伊東が初の歌手デビューを果たし、そのCD発売日に合わせたミニライブ兼トークイベントである。

しかし、そのイベントが開催される裏で、逃走中のゲームにも影響する事件が起ころうとしていた・・・

イベントが行われる約5時間前・・・

イベントの待合室にいる伊東。初めての公演で少々緊張している様だ。

その時、ドアをノックする音が・・・

伊東

「どうぞ・・・」

マネージャーが関係者だと思い、中に迎え入れる伊東。しかし・・・

伊東

「・・・！？だ・・・誰ですか、あなた・・・！うつ・・・！」

見ず知らずの人物を前に抵抗する間もなく、スタンガンで気絶させられてしまう・・・

それから暫くして・・・

マネージャー

「和葉・・・入るぞ・・・」

マネージャーが伊東を呼びに来た。しかし、待合室は蛻もぬけの殻・・・しかも、1通の置手紙が・・・

マネージャー

「『伊東和葉は預かった。妙な真似をせずにこっちの指示に従ってくれば、彼女は無傷で返してやろう。警察に通報したら彼女の命は無いと思え！ クロノス』・・・！？こ・・・これって・・・！」

その置手紙は、クロノスと名乗る犯人が伊東を誘拐した事を記した脅迫状だった。

イベント開始前に起こった未曾有の事件・・・誘拐された伊東の運命は！？

そして、伊東を誘拐した犯人は一体誰なのか！？

その後、この事件はショッピングモールの至る所に設置されているテレビで速報で流された。

更に、そのショッピングモールで不審な人物を見たという情報も出ていた。

証言者の男

「顔はよく見えなかったんですけど・・・腕に『逃走中』って書かれた物が見えて・・・あつ、あと頭に『FULL90』って書かれた黒いヘッドギアを付けていたのは覚えてます・・・そいつが、人がすっぽり入るくらいの大きな袋に何かを入れてた感じで走り去って行ったんです・・・」

このショッピングモールで、その様な格好をしているのは20人の逃走者のみ・・・

もしか、逃走者が伊東を誘拐した犯人とでも言うのだろうか！？

更に・・・

イベント関係者

「『伊東和葉を返してほしくば3億円を用意しろ！』・・・？」

伊東を救うべく用意された3億円・・・これが逃走者にどのような

影響を及ぼすのか！？

そして、ショッピングモールに近づくワゴン車の目的とは！？

更に、今回のミッションも前回同様に、プリキュアオールスターズの逃走中で現れた謎の存在が大きく関わってくる。

本家の様な、ハンターの実験でもエンターテイメントゲームとしての確立でもない目的で逃走者達を掻き回し続けるこの人物の真の目的とは！？

全ては本編で明かされるであろう！

事前内容？ ショートドラマのあらすじ（後書き）

次回は、逃走中に参戦する20人の逃走者にインタビューします！

事前内容？ 逃走者達の意気込み（前書き）

20人の逃走者達のインタビューを聴取せよ！

事前内容？ 逃走者達の意気込み

今回のショッピングモールでの逃走中には、総勢20人の逃走者が参戦する。

彼等のゲームに対する意気込みを聞いてみる事にしよう。

任天堂からは、10人の逃走者が参戦する。

その中から、まずは初参戦となる5人の逃走者から聞いていこう。

任天堂の顔として知られるマリオの未来の姿で、医者として活動するドクターマリオ。

ドクター

「まあね・・・医者と鬼ごっこって言うのは、世間的に相反する事なんでしょうけど・・・そういう事が出来る人が、どんどん新しい風を吹き込んでいくんでね・・・現に『歌って踊れる住職』って言うのが出てきて、すごい注目されているぐらいなんで、ここはビシツと『鬼ごっこを制する医者』って言うのを見せていければなと思います・・・」

続いて、フェレ家の公子として知られているロイ。

ロイ

「当然逃げ切りしか考えてないな・・・自首なんかしたり捕まったりしたら、それだけでフェレ家一代の顔に泥を塗る事になるからさ・

・いくら子供の遊びに賞金制度を乗せたゲームだとは言え、絶対に負けたらダメだからな・・・兎に角逃げ切って、マルスもアイクも達成出来なかった偉業を成し遂げてやろうと・・・」

ハイラルの剣士として知られ、リンクの子供の姿であるヤングリンク。

ヤング

「何て言うかな・・・逃走中では、子供は絶対に逃げ切れないっていう噂が巷で絶えないみたいなんですけど・・・今回は、その噂は嘘だつて言う事を証明する為にも、そしてハイラルの人達に恥ずかしい姿を見せない為にも・・・逃げ切って90万円獲って帰りたいと思います・・・！頑張ります・・・！」

サラサ・ランドの姫として、昔からその名を知られているデイジー。

デイジー

「まあ・・・この前のピーチよりは長く生き残れると確信はしてます・・・ライバルに負ける訳にはいきませんから・・・目標としては・・・最低でも50万円は持ち帰りたいなと思ってます・・・そこに行くまでに、少しでもミッションとかに貢献出来れば、姫に対する世間の悪いイメージを取り払う事が出来ると思います・・・」

そして、マリオのライバルのワリオの相棒である、スポーツ系悪役のワルイージ。

ワルイージ

「今回はな・・・ライバルのルイージがいるからな・・・絶対あいっただけには負けたくねえ・・・！ここで逃走成功を果たして、俺様はお前みたいな永遠の2番手とか影が薄いとか悲劇のヒーローとか

言われてる奴とは格が全然違えんだって所をまざまざと見せつけてやりてえな……！俺様が強いんだって事を証明してやるぜ……！」

任天堂の新星達は、ハンターとの対決に勝利出来るのか！？

ここで、再参戦となる残りの5人の意気込みも要チェック。

マリオを兄に持つ、永遠の2番手の異名を持つルイージ。

ルイージ

「あの……前回兄さんが裏切り者になった事で、ものすごい^{つとまへ}響盛を買ってるんですよ……。なので、兄さんの汚名返上の為にも、ここはボクが頑張って……ミッションにも行って……それで逃げ切ってやりたいなと思いますね……。このままだと、ボクも任天堂から追放され兼ねないんで……。頑張りたいですね……！」

超能力を扱う少年として有名なネスとリュカ。

ネス

「今回、リュカと一緒に出るという事もあって……。ここはやっぱMOTHERの大先輩として、カッコ悪いところは見せられないですよ……。ここで逃げ切って90万円獲って、一流級の野球セツトを……。天然の木から作られたバットなんか買って、今度の野球の試合でいい結果を残したいなと思います……。！」

リュカ

「そうですね……。今回が3回目なんですけど、過去2回とも全然

活躍してないんでね・・・尚且つ、ネスが来てる事もあつて余計緊張してます・・・でも、今日こそは彼の前でいい所を見せて・・・少しでも長く残って、逃走中の歴史にボクの名前を刻み付けていきたいですね・・・！今回は3度目の正直として、絶対に逃げ切ります・・・！」

ポケモントレーナーとして、その名を馳せるレッド。

レッド

「2回出てね、対策も考えて来たんで・・・自信はあります・・・！というか、自信しか無いです・・・！今日こそ賞金獲得して、世話をしているポケモン達を養っていける様に、いい食べ物やいい薬なんかをいっぱい買いたいと思います・・・！絶対負けないぞ・・・！」

最後は、CIAや秘匿工員としての活躍をしてきたスネーク。

スネーク

「自分のこれまでの経験を生かして逃げようと考えてはいるな・・・基本的には隠れて、状況に応じてミッションを遂行しに行ったり潜伏場所を変えたりしながら、150分間耐え抜いて・・・最終的には報酬をもらうと・・・このプランで、今日はハンターを凌いでいくと・・・」

彼等に勝利の女神は微笑むのか！？

続いて紹介するのは、機動六課に所属する5人の逃走者。

先ずは初参戦となる、ヴォルケンリッターの3人。

シグナム

「逃走中については、主はやてからいろいろ聞かされてるんで……ただ、あたしが所属するライトニング分隊の連中の成績があまり芳かんばしくなかったらしくて、前回……これは我々の名誉に関わる事だなと感じたんで……ここは逃げ切って、名誉挽回の為に……いい土産を持ち帰れたらなと思ってます……」

ヴィータ

「前回、なのはもフェイトもはやても後輩の4人に負けたらしいんだよな……それ聞かされて、『こいつらマジで大丈夫か!?』って思ったからさ……今日はな、あたし等ヴォルケンリッターが、スバルやキャロに本当の先輩の実力って言うのを見せてやるよ……！絶対負けねえからな……！お前等覚悟しとけ……！」

シャマル

「あの……逃走中って体力も勿論大事なんでしょうけど、1番は運が最後まで自分に付いてくれるかどうかだと思うんですよ……その運は、恐らく行動に表れてくる筈なんで……運に見放されない様に動いて、150分という長丁場を乗り越えたいと思います……機動六課の皆さんの為にも、90万円持って帰ります……！」

そして、前回からの引き継ぎでの再参戦となるスバル・ナカジマとキャロ・ル・ルシエ。

スバル

「前回出させてもらって、『夏木りん』に加えて、新たに『北条響』を目標に頑張ります……！ミッシェンも全部参加して、何回もハンターを振り切る気持ちで挑みたいと思います……！前回、

あと8分って所で涙を呑んだんで・・・その悔しさをバネに、今回は是非とも逃げ切って、それを機にさらに飛躍したいと思います・・・！」

キャロ

「私、今回出る人達の中で最年少・・・じゃないか・・・でも事実上最年少なんで、何処まで行けるのか分からなくて不安ですけど・・・折角出させてもらってる訳なんですから、メンバーに恥を掻かせない様に・・・自分の持てる力を全て出し切るつもりで逃げて、90万円獲得したいと思います・・・！お願いします・・・！」

彼女達は逃走中という任務を果たし、無事帰還する事が出来るのか！？

続いて紹介するのは、3人のプリキュア達。

ピンクチーム所属のキュアブルームこと日向 咲。

咲

「やっぱりね、自信はありますよ・・・！ソフトボールではエースだし、クラス対抗のリレーなんかでは常にアンカーを務めてますし・・・この脚力を存分に生かせれば、150分もそう長くは感じないまま逃げ切れそうな気がします・・・！逃げ切って90万円獲って、親孝行して、妹のみに何か買ってあげたいです・・・！」

ブルーチーム所属のキュアマリンこと来海えりか。

えりか

「作戦としては・・・この小さい身体を利用して、何処かに隠れながら逃げようと思います・・・それで、家族4人で温泉旅行なんか行きたいですね・・・その為に50万円ぐらい稼いで、そこまで行ったら欲は出さずにそのまま自首しようと思ってます・・・もも姉も両親も大変なんでね・・・疲れを癒してあげよう・・・」

イエローチーム所属のキュアパインこと山吹祈里。

祈里

「逃走中では、ハンターに怖がってたらダメなんですよ・・・怖がらずに自分出来る事は全部やって、途中で諦めるって事はせずに・・・それで最後まで逃げて90万円獲りたいと思います・・・！そのお金で、毎日頑張っている両親を連れて、海外旅行に行きたいと思います・・・！応援宜しくお願いします・・・！」

3人の戦士は、勝利を掴めるのか！？

最後は、ぷよを扱う2人の魔導師。

初代主人公のアルル・ナジャと2代目主人公のアミティ。

アルル

「前回出させてもらって、逃走中って言うゲームは生半可では行かないっていうのを身を持って知りましたからね・・・そこで、人生の中で培ってきた潜在能力を発揮していつて・・・『魔導物語』や『ぷよぷよ』で頑張ってきたボクを遺憾なく出していききたいですね・・・」

アミティ

「今回はね、前回からの引き継ぎって言う事もあって、かなりのプレッシャーがありますね・・・不甲斐無い結果なんか出したら、出れなかった皆に悪いですから・・・ここで主人公の意地を見せてね、『アミティって本当はすごいんだな』って言わせてやりたいですね・・・！絶対言わせてやりますよ・・・！」

2人は逃走成功を果たし、魔導師のレベルを上げられるのか！？

20人の逃走者達の活躍ぶりはいかなるものなのか！？

それは、本編で明らかになるだろう！

事前内容？ 逃走者達の意気込み（後書き）

次回、待望のゲームが始まる！

新オープニングゲームの正体は！？

7月5日の放送楽しみですね♪

本編は、この放送の後を予定しています。

新オープニングゲーム（1）（前書き）

逃走者に課せられた恐怖の新オープニングゲーム・・・

その全貌が今明かされる！

新オープニングゲーム（1）

目の前に表示されている4つの映像を見つめる謎の存在改めゲームマスター……

DINOSAUR PLANET
SHOPPING MALL
EDO ERA
FAIRYLAND

ゲームマスター
「……」

ゲームマスターは、その中の「SHOPPING MALL」をタッチした……

多くの客で賑わう深夜のショッピングモール……

その屋上駐車場に集められたのは、20人の逃走者達……

彼等の視線の先には、近未来的なボックスに収納された3体のハンターの姿が……

彼等はこれから、緊迫の新オープニングゲームに挑む・・・

そのオープニングゲームとは・・・

『ニムゲーム』だ・・・

ハンターまでは15m。逃走者は1人ずつ10m前に進み、そこに設置されたボタンを最低1回は押さなければならない。

ボタンは1度に連続で3回まで押す事ができ、ボタンが押された回数の合計が規定数に達するとハンターが放出され、150分間のゲームが始まる。

なお、回数のカウントはハンターボックスの上に設置されている7セグメントディスプレイが行う。

ロイ

「これだ！17番！」

祈里

「嘘・・・！2番・・・」

シグナム

「9番か・・・」

ヴィータ

「20番・・・回つて来ても絶対ハンター出す事は無え・・・！自信持って言える・・・！」

シャマル

「5番って・・・結構危険な順番じゃない・・・？」

ワルイージ

「だんっ！はああ！？ろ・・・6番・・・！？」

ボタンを押す順番は、くじ引きにより決まる。全ては運任せだ・・・

1人目は・・・リュカ

リュカ

「うわゝ、どうしよう・・・？1回押して出てきたらヤダな・・・」

「

ハンターが放出される為の規定数は、逃走者達は全く知らない。故に、何回もループしなければならなければ、たった1回押しただけでハンターが放出される可能性も、誰も否定出来ないのだ。

スネーク

「意を決していけ・・・！」

レッド

「早く押せ！」

リユカ

「じゃあ・・・押します！」

セーフか・・・？ ハンター放出か・・・？

リユカ

「行きます！」

ポチッ！ ポチッ！ ・・・

シーン・・・

リユカ セーフ

リユカ

「OK・・・！やっぱり1回とか2回とかでは出ないよね・・・」

押された回数は2回・・・合計カウント数——2

2人目は・・・山吹祈里

えりか

「まだ余裕だと思っからさ、3回押しちゃえば？」

祈里

「何回押すかは、自分で決めるよ」

ワルイージ

「もうさっさと出して捕まっちまえ！」

祈里

「酷い・・・！」

デイジー

「もうあんたでいいから、早い所ハンター出しちゃってよ！」

祈里

「絶対出さない・・・！私は絶対出さない・・・！」

セーフか・・・？

ハンター放出か・・・？

祈里

「押します！」

ポチッ！ ポチッ！ ポチッ！

シーン・・・

山吹祈里 セーフ

祈里

「やっぱり出ないよね・・・私、信じてた・・・!」

押された回数は3回・・・合計カウント数——5

3人目は・・・ドクターマリオ

昔からその名を知られる、未来のマリオ。その性分が試される・・・

ヤング

「7辺りで出てきそうな予感がするな・・・もしドクターが1回
だけしか押さなかったら・・・次は自分が・・・」

ルイージ

「3桁までは出て来ない気がする・・・100回目が高いと思う
な・・・ニムゲームって、『100を言ったら負け』って事で知
られてるから・・・」

ドクターの行動を尻目に、ハンターの出てくる回数を予想する2人。
果たして、その読みは当たるのか。

ドクター

「じゃあ・・・押すぞ!」

セーフか・・・? ハンター放出か・・・?

ドクター

「せーの・・・」

ポチッ！・・・

シーン・・・

ドクター マリオ セーフ

ドクター

「よしっ・・・！OKだ・・・！」

ヤング

「うわぁ・・・やっぱり読んでたよ、そこまで・・・！」

押された回数は1回・・・合計カウント数——6

4人目は・・・ヤングリンク

子供ながらも様々な活躍をするハイラルの剣士が、恐怖の戦場に向かう・・・

ヤング

「もうヤダ・・・多分7辺りで出てきそうだもんね・・・」

キャロ

「もう出す頃かな・・・？」

アミティ

「いや、まだ出ないでしょ……?」

スバル

「出るにはいくらなんでも早過ぎる……!」

アルル

「出て来ない、出て来ない……!」

ヤング

「もう捨て身で行くしかないな、これは……行くぞー!」

セーフか……? ハンター放出か……?

ヤング

「来るなら来い!」

ポチッ! ……

シーン……

ヤングリンク セーフ

ヤング

「おっ、おっ、おっ……!セーフだ……!良かった……!危

ねえ……！」

ロイ

「ええ……マジで！？俺、7で出てくるってずっと思ってたんだけど！」

ドクター

「まだまだ……」

咲

「ええ……？じゃあ、10回って事？」

えりか

「絶対切りのいい数字で出てくる筈だよ……」

押された回数は1回……合計カウント数——7

5人目は……シャル

ヴィータ

「もうお前でいい！もういい加減出して捕まれ！」

シャル

「な……何でそんな事……！」

スバル

「その言い方は無いでしょ……」

レッド

「いや、俺もあいつにはドジ踏んで捕まってほしいと思ってる……」

「！」

ネス

「レッドもそんな事言わないの・・・」

シャマル

「皆さん揃って酷いです・・・」

アルル

「いやいやいや・・・ボク何にも言っただけじゃん・・・」

祈里

「私も言っただけですよ・・・」

リュカ

「ちょっと被害妄想が過ぎやしない・・・？」

シャマル

「と・・・兎に角押しますよ・・・！」

セーフか・・・？

ハンター放出か・・・？

シャマル

「セーの・・・」

ポチッ！　ポチッ！　ポチッ！

シーン・・・

シャル セーフ

シャル

「あつ・・・！10回でも全然大丈夫・・・！」

ネス

「10回じゃない・・・！？」

シグナム

「そろそろ分からなくなってくる頃だな・・・だが規定数はまだ先だと踏んで、間違いは無さそうだ・・・」

押された回数は3回・・・合計カウント数——10

この後、6人目・ワルイージが2回押してセーフ。

7人目・日向 咲が3回押してセーフ。

8人目・スバル・ナカジマが3回押してセーフ。

9人目・シグナムが3回押してセーフ。

10人目・レッドが1回押してセーフ。

11人目・来海えりかが2回押してセーフ。

12人目・アミティが3回押してセーフ。

13人目・ネスが2回押してセーフ。

14人目・アルルが2回押してセーフ。

15人目・スネークが1回押してセーフ。

16人目・デイジーが1回押してセーフ。

17人目・ロイが2回押してセーフ。

18人目・ルイージが1回押してセーフ。

これで、ここまでの合計カウント数は37となった。

19人目は・・・キャロ・ル・ルシエ

キャロ

「結構押されているよね、37回って・・・」

アミティ

「これ下手したら、2巡目行くよね・・・？」

ロイ

「来るな、多分・・・」

スバル

「多分って言うか屹度^{きつと}・・・」

咲

「いや、絶対回るよ・・・」

キャロ

「押しますよ!」

セーフか・・・? ハンター放出か・・・?

キャロ

「押します!」

ポチッ! ポチッ! ・・・

シーン・・・

キャロ・ル・ルシエ セーフ

キャロ

「よしっ・・・!大丈夫だった・・・!」

ヴィータ

「ちくしょう・・・!あたしに回って来ちまったよ・・・!」

押された回数は2回・・・合計カウント数——39

20人目は・・・ヴィータ

ヴィータ

「予想では、あたしには回って来ない筈だったんだが・・・」

えりか

「来そうじゃない・・・？」

スネーク

「可能性は高いな・・・」

ルイージ

「もう2巡目はゴメンだよ・・・」

ヴィータ

「こうなった以上仕方ねえな・・・行くぞ!」

セーフか・・・？ ハンター放出か・・・？

ヴィータ

「おらあー!」

ポチッ! ポチッ! ポチッ!

シーン・・・

ヴィータ セーフ

ヴィータ

「おっしやー！耐えたぜー！」

リユカ

「ええー！？嘘ー！？」

咲

「こんな事あるの！？」

キャラ

「また最初から・・・」

デイジー

「もう耐えらんない・・・！」

アミティ

「嫌な予感がするよ・・・！」

押された回数は3回・・・合計カウント数——42

1巡目ではハンターが放出されなかった為、これより2巡目に入る。

この精神的にかなり堪える新オープニングゲーム・・・

終止符が打たれるのは、いつになるのか！？

新オープニングゲーム(1) (後書き)

次回、遂にゲームがスタート！

ハンターを放出させてしまう哀れな逃走者は誰だ！？

新オープニングゲーム(2)(前書き)

2 巡目に入る新オープニングゲーム

ハンターを放出させてしまうのは誰だ!?

新オープニングゲーム(2)

続く2巡目・・・

リュカが2回押してセーフ。

祈里が3回押してセーフ。

ドクターが3回押してセーフ。

ヤングが1回押してセーフ。

シャマルが2回押してセーフ。

ここまでの合計カウント数は53となった。

続いては・・・ワルイージ

ワルイージ

「結構な数だぞ、53つて・・・」

ルイージ

「罰当たりで出して捕まればいいのに・・・」

ワルイージ

「ああ！？今何か言ったか！？」

ルイージ

「な・・・何にも言っていないよ！」

キャロ

「もういい加減出してほしい・・・！」

ヴィータ

「お前でもいいから、さっさと出せよ・・・！」

ロイ

「早く出せ・・・！」

ワルイージ

「押すぞー！」

セーフか・・・？

ハンター放出か・・・？

ワルイージ

「行くぜ！」

ポチッ！・・・

シーン・・・

ワルイージ セーフ

ワルイージ

「ヘッヘッヘッヘッへ．．．！お前等、残念だったな．．．！」

デイジー

「嘘！これだけ押してまだ出ない！？」

ネス

「うわあ．．．耐えられないよ．．．」

押された回数は1回．．．合計カウント数——54

続いては．．．咲

咲

「もうヤダな．．．あと何回で出て来るんだろう．．．？」

えりか

「あと1回じゃない．．．？」

咲

「ちょ．．．それ私に捕まわって事．．．！？」

シグナム

「そういう事になるな．．．」

レッド

「出して捕まれ．．．！」

アミティ

「ハンター出してくれれば、もうそれでいいから……！」

ヤング

「頼む……！もう出してくれ……！」

咲

「皆酷過ぎる……！でも私は絶対出さないから……！」

スネーク

「嫌な予感がするな……」

咲

「よし！絶対出て来るな……！絶対出て来るな……！」

ヴィータ

「あいつ念を送ってやがる……」

セーフか……？ ハンター放出か……？

咲

「せーの……」

ポチッ！……

シーン・・・

日向 咲 セーフ

咲

「ほらやっぱり出て来ないじゃんか〜！」

ネス

「いや、そんなキレたみたいに大声出さなくても・・・」

祈里

「誰も責めないよ、咲ちゃんの事・・・」

レッド

「それにしても、55回でも出ねえなんて・・・」

シャマル

「まだ先って事がしら・・・？」

ドクター

「やはり3桁近くまで行かないと出ないのかもな・・・」

押された回数は1回・・・合計カウント数——55

続いては・・・スバル

スバル

「くそ・・・あんまり立ちたくないんだよ、この前には・・・」

ヴィータ

「もうお前でいい．．．！お前が出してくれればいいんだよ．．．」

スバル

「な．．．何て事言うんですか．．．！？」

ロイ

「酷いとは思っけど．．．もう終わらせてくれ．．．！」

ワルイージ

「そうだよ．．．！お前さえ捕まれば、全部が丸く収まるんだよ．．．」

スバル

「何処が丸く収まるんだよ．．．！？」

レッド

「早く出してくれ．．．！」

スバル

「こんな所で出してたまるか．．．！押します！」

セーフか．．．？ ハンター放出か．．．？

スバル

「はああー！」

ポチッ！ ポチッ！ ポチッ！

シーン・・・

スバル・ナカジマ セーフ

スバル

「よっしゃ耐えた・・・！もう絶対あたしには回って来ない・・・」

ルイージ

「ええゝ！？何でゝ！？」

リユカ

「これどうすんの、ちょっと・・・！」

押された回数は3回・・・合計カウント数——58

この後、シグナムが1回押してセーフ。

レッドが1回押してセーフ。

えりかが2回押してセーフ。

アミティが2回押してセーフ。

ネスが3回押してセーフ。

アルルが3回押してセーフ。

スネークが1回押してセーフ。

デイジーが2回押してセーフ。

ロイが1回押してセーフ。

ルイージが1回押してセーフ。

キャロが2回押してセーフ。

ウィータが1回押してセーフとなり、3巡目に入る。

デイジー

「もうヤダ・・・こんなに長いなんて・・・」

アルル

「耐えられないよ・・・」

スネーク

「この俺でさえ、とても堪え切れん・・・!」

祈里

「こんなに辛いゲーム初めて・・・」

心の内の言葉が、逃走者達の口から次々と零れる・・・

そして3巡目・・・

リュカが1回押してセーフ。

祈里が2回押してセーフ。

ドクターが2回押してセーフ。

ヤングが1回押してセーフ。

シャルが3回押してセーフ。

ワルイージが1回押してセーフ。

咲が1回押してセーフ。

ここまでの合計カウント数は89となった。

続いては・・・またしてもスバル

スバル

「何でだよ・・・？絶対あたしには回って来ないと思ってたのに
」

レッド

「まあ、そういう事もあるってこつた・・・」

アミティ

「もう90近くだよ・・・？出てもおかしくないよね・・・？」

ワルイージ

「今度こそ出すな、絶対に・・・」

ロイ

「否定出来ないな・・・」

えりか

「そろそろ出すでしょ・・・？」

スバル

「皆して何だよ・・・！でもあたしは絶対出さないから・・・！」

セーフか・・・？ ハンター放出か・・・？

スバル

「押します！」

ポチッ！ ポチッ！ ・ ・ ・

シーン・・・

スバル・ナカジマ セーフ

スバル

「OK・・・！出て来ない・・・！これで、今度こそあたしには回
つて来ない・・・！」

リュカ

「まだ出ないよ・・・！？90超えてるのに・・・！」

ルイージ

「もうきついよ・・・」

咲

「いつになったら出るんだよ、ハンター・・・！」

押された回数は2回・・・合計カウント数——91

続いては・・・シグナム

シグナム

「危険だな・・・」

ヤング

「早く出してくれよ・・・」

ロイ

「出さねえと始まんねえしさ・・・」

レッド

「そつだよ・・・さっさと出せよ・・・」

シグナム

「お前達・・・そんなにあたしに捕まってほしいのか・・・？」

ネス

「それは考え過ぎだと思っけど・・・」

シグナム

「ふん・・・！まあいい・・・精々吠えるがいい・・・すぐに黙らせてやる・・・」

セーフか・・・？ ハンター放出か・・・？

シグナム

「押すぞ！」

ポチッ！ ポチッ！ ...

シーン・・・

シグナム セーフ

シグナム

「お前達・・・不幸だな・・・」

ドクター

「ここまでやってまだなのか・・・」

ヤング

「やっぱり100回以上なのかな・・・？」

レッド

「くっそ〜！絶対俺までは来ないと思ってたのに〜！」

祈里

「そんな事もあるよ・・・」

押された回数は2回・・・合計カウント数——93

続いては・・・レッド

レッド

「くっそ〜・・・どうすりゃいいんだ・・・？」

シグナム

「次はお前が叩かれる番だな・・・」

レッド

「叩かれるって・・・言い方悪いな・・・」

アルル

「もう来そうだな・・・逃げる準備しといたほうがいいかも・・・」

えりか

「もう出しちゃってよ〜・・・！あたしまで回さないで〜・・・！」

レッド

「絶対出さねえ．．．！クリアして次に回してやる．．．行くぞ．．．！」

スネーク

「その言葉、多分裏切られるな．．．」

セーフか．．？ ハンター放出か．．？

レッド

「押すぜ！」

ポチッ！ プシュー！

逃走者全員

「わああー！」

> i 2 6 8 3 0 — 2 0 9 6 <

ハンターが放出され、ゲームが始まった．．

散り散りになって一目散に逃げる逃走者達。

その中で1人逃げ遅れたレッド。最早、逃走不可能・・・

レッド

「止めるー！」 ポンッ

> i 2 6 8 3 1 — 2 0 9 6 <

レッド

「ちよつと待てよ・・・！中途半端な数で出るってアリか・・・！？」

読みがはずれ、彼の目の前は真っ白だ・・・

プルルルル プルル♪

アルル

「あっ・・・メール来た・・・！」

確保情報は、全ての逃走者にメールで通達される。

ロイ

「『屋上駐車場にてレッド確保、残り19人』・・・！」

シャマル

「まあ、あの距離じゃ仕方ないわね・・・」

リユカ

「レッドったら・・・1回目と言い前回と言い今回と言い・・・ほん・・・ホント・・・ホントにさ・・・このゲームに一体何しに来

たの・・・！？」

ハンターから逃げた時間に応じて賞金を獲得出来る、それが・・・

run for money 逃走中

逃走劇の舞台となるのは、多くの客で賑にぎわいを見せる、とあるショッピングモール。多くのテナントやアミューズメント施設が立ち並び、3階より上は広大な駐車場となっている。延床面積は東京ドームおよそ3個分。また、今回は一部の店舗内には進入する事が出来る。このエリアを19人の逃走者が逃げ回る。

えりか

「うわぁー！ゲームセンターだ！」

スバル

「いろんなレストランが並んでる・・・ヤバい、メニューのレプリカ見たらお腹減ってきた・・・」

デイジー

「ブティックがいっぱいね・・・このゲームが終わったら、プライベートで買い物しちゃおうかな♪」

咲

「何処も人がいっぱいだよ・・・」

スネーク

「この食品館が電器館にいるのも手だな・・・かなり入り組んでいそうだしな・・・」

シグナム

「今、時間はどのくらい経ってるんだ・・・？まだ2分程度か・・・」

ネス

「それでも、もう1万円超えてるよ・・・！」

ワルイージ

「もう1万2千円超えてやがる・・・！こんない金稼ぎなかなか無えぞ・・・！」

賞金は1秒ごとに100円ずつ上昇。150分間逃げ切れれば90万円を獲得出来る。

更にこのゲームは自首も出来る。エリア内2ヶ所に設置された自首用電話から申告すれば、その時点の賞金を獲得しリタイアとなる。

但し、エリアには3体のハンター。捕まれば失格・・・賞金は0円・・・

彼等は、驚異のスピードと持久力で逃走者に迫る。

生き残るのは・・・誰だ・・・？

新オープニングゲーム(2) (後書き)

次回から本格的にスタート！

ドラマと並行して進むゲーム展開を見逃すな！

事件発生！（前書き）

アイドルのイベント開催の裏で、重大な事件が発生する！

そして、逃走者に与えられた驚愕のミッションとは！？

事件発生！

今回が逃走中初参戦となるドクターマリオ。

ドクター

「こういったゲームに参加させてもらってる事には、ホントに感謝感謝だな・・・全世界の医者を代表して、いい所を見せたい・・・！」

こちららも初参戦の、サラサ・ランドの姫 デイジー。

デイジー

「ゲームセンターにはいない方がいいかも・・・音で気配が分からなくなるし・・・」

隠れ場所を探している。

スネーク

「ここは潜むのに丁度いいな・・・」

電器館の冷蔵庫コーナーにやって来たスネーク。ハンターから逃れる為、大型冷蔵庫の陰に隠れる。

アミティ

「今日風強いな」

屋上駐車場に現れたアミティ。

アミティ

「こんな見晴らしのいい所にいていいのかな？ 隠れ場所無いもんね・・・一旦戻ろう」

すぐさま引き返す。

3階の駐車場にいるのは・・・

リュカ

「もうホントに怖いよ、このゲーム・・・！3回目の正直で頑張りたいと言ったものの・・・今から考えてみれば、何で3回も出ちやっただらうって思うよ・・・何回出たって慣れないよ・・・」

車の陰でハンターの恐怖に怯えるリュカだ・・・

その近くには・・・

ルイージ

「怖いよ・・・でも兄さんの為にも、意地でも逃げなきゃ・・・！」

同じく恐怖に駆られているルイージ・・・

アルル

「今回の逃走中が今までと違うのは、殆どが室内なんだよね・・・だから、室内の構造を上手く使っていく事が大事になってくる筈だね・・・」

独自の理論を展開する、魔導師の卵　アルル・ナジャ。

その近くにハンター・・・

アルル

「あっ・・・あれハンターだ・・・！」

逸早く発見し、その場を離れる。彼女の逃げる先には・・・

咲

「何処かのお店に隠れてる方がいいかもしれないな・・・」

キュアブルームこと日向 咲だ・・・

アルル

「ハンターこっち来てるよ・・・！」

咲

「嘘・・・！？」

アルルに釣られ、咲も逃げる。

ハンターは2人に気付いていない様だ。

咲

「地図見る限り・・・通りで見つかったら終わりじゃん・・・！撒く為の角があんまり無いし・・・どうしよう、これ・・・？」

スバル

「誰かいるな・・・」

前回の逃走中で多くの活躍を見せたスバル・ナカジマ。彼女の視線の先には・・・

祈里

「立体構造のエリアっていうのも、結構珍しいよね・・・」

キュアパインこと山吹祈里だ。

祈里

「あれ・・・？スバルさん・・・？」

スバル

「祈里・・・！」

2人が合流・・・

スバル

「聞いたんだけどさ、祈里ってすごいんだって・・・？」

祈里

「えっ・・・？な、何がですか・・・？」

スバル

「前回、全部ミッションやったって・・・」

祈里

「ああ・・・でも、あれは皆の為にやってるんで・・・そんなすごいなんて・・・」

スバル

「いや、でもいい事だよ・・・？あたしもミッションは全部やるうとしてるからさ、今回も・・・あたしからしたら、他人任せにする

人の気が知れないよ・・・！」

祈里

「そうですね・・・自分さえ良ければって人は、絶対幸せになれませんもんね・・・」

スバル

「だよね・・・？じゃあ、ミッション来たらお互い頑張ろうね・・・！」

祈里

「はい・・・！」

2人はミッションでの活躍を固く約束し別れる。

一方、この男もミッションでの活躍を誓う。

ネス

「今回は後輩のリユカが来てるからね・・・少しでも彼のお手本になれる様に・・・頑張ろう・・・！」

5階の駐車場の車の陰に隠れている、キュアマリンこと来海えりか。

えりか

「上手く隠れられれば、ハンターも絶対見逃す筈だよ・・・あっ・・・！早速ハンター来たよ・・・！」

ハンターを見つけた・・・

> i27197 — 2096 <

えりか

「うわわわわ・・・こっち来てるし・・・向こう行け、向こう行け・・・！」

ハンター急接近・・・

> i27198 — 2096 <

しかし、ハンターは別の道を通りえりかから遠ざかる・・・

上手くやり過ごせた様だ。

えりか

「はあ・・・危なかった・・・」

シャル

「1階の吹き抜けになってる所・・・やけに人が多いわね・・・」

ひとだか
人集りを見つけたシャル。

シャル

「すみません・・・」

客

「はい？」

シャル

ひとだか
「この人集りは何なんですか？」

客

「ああ・・・実は今日、伊東和葉っていうアイドルがここでチャリティーイベントを行うそうなんですよ」

シヤマル

「伊東・・・和葉・・・？誰ですか、それ・・・？」

客

「ええ！？知らないんですか！？今すごい注目されてるんですよ！」

シヤマル

「そ・・・そうなんですか・・・？」

シグナム

「『伊東和葉　チャリティーコンサート&トークイベント
本日開催！』・・・誰だ、伊東和葉って・・・？」

ロイ

「さあ・・・？俺も聞いた事無えな・・・」

シグナム

「だが、こんな盛大なイベントが行われるぐらいなんだ・・・かなりの認知度はあるんだろうな・・・」

ロイ

「だろうな・・・でも、何でそんな事が行われるこの場所が逃走エリアなんだ・・・？」

偶然一緒にいたシグナムとロイも疑問の声を上げる。

ヴィータ

「『チャリティーコンサート&トークイベント 本日開催！』・・・このポスター、いろんな所に貼ってあるよな・・・うぜえって思うぐらいに・・・」

ワルイージ

「すげえ騒がしいな、あの辺・・・」

1階ATM付近に身を隠しながら、周囲の様子を窺っているワルイージ。

> i27199 — 2096 <

そこへハンターが接近・・・

ワルイージ

「これ移動した方がいいのかもな・・・あんなにざわめいてたら、ハンターに気付けねえよ・・・離れるか・・・ってそこにハンターいたのかよー!?」

見つかった・・・

> i27200 — 2096 <

ワルイージ

「ヤベエ！ハンター速過ぎるだろー!」

一目散に逃げるワルイージ。しかし、ハンターとの距離が近過ぎる為撒き切れる訳が無い。最早、逃走不可能・・・

ワルイージ

「だあゝ！」 ポンッ

> i27201—2096<

ワルイージ

「嘘だろゝ！？背後から来るなんてありかよゝ！？」

ブルルルル プルルゝ

ヤング

「何だよ．．．！？メールか．．．？」

キヤロ

「『1階南口付近にてワルイージ確保、残り18人』．．．！早っ．．．！まだ10分も経ってないよ．．．！？」

今回の逃走中の舞台となる、深夜のショッピングモール．．．

本日ここでは、今最も注目を集めている人気アイドルのチャリティイベントが行われる．．．

そのアイドルの名は、伊東和葉^{いとうかずは}．．．静岡県出身の19歳、現役大學生でもある．．．

バラエティやグラビアなどでの活躍を見せ、最近ではドラマや声優などをも熟^{こな}すまでに成長し、多彩な能力を開花させ続ける人気沸騰中のアイドルだ．．．

そして今回は、伊東の歌手デビューに先駆け、そのCD発売日に合わせたミニライブ兼トークイベントである・・・

しかし、そのイベントが開催される裏で、とんでもない事件が起ころうとしていた・・・

イベントが行われる約5時間前・・・

イベントの待合室にいる伊東・・・

伊東

「はあ・・・まだ5時間もあるのに・・・何だろう、このドキドキ感・・・!」

初めての公演と言う事もあり、少々緊張している様だ・・・

その時、ドアをノックする音が・・・

伊東

「ん・・・?はい、どうぞ・・・」

マネージャーか関係者だと思い、中に迎え入れる伊東・・・しかし・・・

伊東

「・・・!?!?だ・・・誰ですか、あなた・・・!うつ・・・!」

見ず知らずの人物を前に抵抗する間もなく、スタンガンで気絶させられてしまう・・・

・ 謎の人物は、気絶した伊東を大きな袋に入れその場から立ち去る・・・

ゲームマスター「・・・」

伊東和葉の誘拐現場をモニター越しに見ていたゲームマスター・・・

突然、画面をスライドさせる・・・

するとそこには『REDUCTION THE AREA』の文字が・・・

ゲームマスターはそれをタッチする・・・

その瞬間、1階の4か所の出入口に謎の大袋が・・・

そして、各駐車場の中央口に「エリア縮小装置」が設置された・・・

ドクター

「緊張するな、このゲームは・・・！」

プルルルル プルル♪

ドクター

「おっ・・・何だ・・・？」

メールだ・・・

ネス

「来た〜・・・！ミッションだ〜・・・！」

アルル

「ミッション１・・・！『１階４か所の出入口に』・・・」

咲

「『ハンターマークが描かれた大袋が置かれている』・・・大袋・・・？」

キャロ

「『残り１３０分までに、大袋を各駐車場の中央口に設置された』・・・」

デイジー

「『エリア縮小装置に運ばなければ』・・・」

スネーク

「『駐車場は封鎖され、エリアが縮小される』・・・駐車場が封鎖されるだど・・・！？」

MISSION？ エリア縮小を阻止せよ！

１階の４か所の出入口に置かれているのは、ハンターマークが描かれた大袋。これを残り１３０分までに、各駐車場の中央口に設置さ

れたエリア縮小装置に運び、装置の機能を停止させなければ、ミッション終了と同時に大袋を運べなかった駐車場が封鎖されてしまう。勿論封鎖されたエリアに残っていれば、その逃走者は強制失格となる。

ヤング

「全部使えなくなったら、俺達滅茶苦茶不利じゃん！」

アミティ

「失敗したら、すごく狭くなるよ!？」

えりか

「ええ!？じゃあ、もしミッションがダメだったら・・・あたしここにいたら失格になるの!？」

リュカ

「嘘・・・!安心して隠れられないじゃん・・・!」

ルイージ

「不味過ぎるよ・・・!とんでもないミッションじゃん・・・!」

駐車場に隠れていた者も、焦りを隠せない。

エリア縮小を阻止する為に、ミッションへと動く逃走者達。

しかし、エリアには3体のハンター。動けば見つかる危険が高まる。

ミッション終了まで、およそ9分。

逃走者達の運命やいかに!？

事件発生！（後書き）

逃走者に与えられた驚愕のミッション

エリアを縮小せずに済むのか！？

今回の挿絵に使われている人形の絵は、あるサイトの方から許可を得て借りました

本当に感謝しています！

エリア縮小阻止へ！（前書き）

逃走者に迫る逃走成功の確率ダウンの危機

無事に乗り越えられるのか！？

エリア縮小阻止へ！

ゲーム残り130分までに、1階の4か所の出入口に置かれたハンターマークが描かれた大袋を、各駐車場の中央口に設置されたエリア縮小装置に運べなければ、ミッション終了後に大袋を運べなかった駐車場が封鎖され、そこに残っている逃走者全員が強制失格となってしまう。

ロイ

「ちよつと持てよ……！失敗したら1階と2階でしか逃げられねえのか……！？」

ドクター

「封鎖されたら、間違いなく誰も150分持たないな……」

全ての駐車場が封鎖されれば、エリアはおよそ3分の1にまで縮小され、逃走に圧倒的不利となる。

スバル

「行く、行く……！こんなに狭まったら、もう絶対無理……！」

ネス

「行くっきゃないね……！皆の為に、ここは阻止しなきゃ……！」

アルル

「行こう……！中央口の装置に袋を持っていけばいいんだよね？」

祈里

「このミッションは絶対にクリアしなきゃ・・・！」

ミッションに行くか行かないかは逃走者の自由。動けば見つかる危険が高まる。

シグナム

「いや・・・ここは誰かがやるのを期待しておこう・・・」

シャマル

「こういつ時こそ、後輩が役に立つのよね・・・」

ヴィータ

「ミッション・・・？ハハハハ・・・行く訳ねえじゃん・・・！」

ヴォルケンリッターの3人は人任せ・・・

デイジー

「私行かないから・・・！だって怖いもん・・・誰かやってよ・・・！」

咲

「絶対誰かやるでしょ・・・？誰か頼むよ・・・！」

この2人も、ミッションには興味が無い様だ・・・

電器館に潜んでいるスネーク。

スネーク

「西口や東口がすぐ近くにあるが・・・さっきハンターが1体そこを通ったからな・・・」

ハンターを目撃し、思う様に動けない。

5階駐車場にいるえりか。

えりか

「多分ミッシヨンの途中経過みたいなのが逐一届くと思うから・・・
時間ギリギリまでここにいて、間に合いそうになかったら移動しよう・・・」

危機的状況でも動く様子は全く無い・・・

一方、3階駐車場にいるこの2人は・・・

リュカ

「下に移動した方がいいとは思うけど、移動途中でハンターに見つかったら最悪だな・・・」

ルイージ

「もう誰か3階に大袋持って来て・・・!!」

恐怖に駆られ動けない・・・

ヤング

「この近くだな、南口は・・・」

南口の大袋を目指すヤングリンク。しかし・・・

ヤング

「あっ・・・!ハンターいた・・・!!」

遠くにハンターを発見。一先ず、近くの店舗に身を隠す。

ヤング

「早くいなくなれよ・・・！行けねえじゃん・・・！」

キャロ

「あのハンターの姿が消えたら、ゆっくり近付いて取ろう・・・！」

同じく南口の大袋を目指しているキャロ。エスカレータの陰から、ハンターの様子を窺う。

ロイ

「あつたぞ・・・！」

西口に置かれた大袋を見つけたロイ。駆け寄るや否や持ち上げようとする。ところが・・・

ロイ

「あ、あれ・・・！？何だこれ・・・！？重過ぎるといつか・・・持ち上がんねえぞ・・・！？」

折角発見した大袋が持ち上がらない。これは一体どういう事なのか。

ロイ

「何だこりゃ！？袋が床に固定されてるじゃねえか！まさかこれ・・・ダミーか！？いや、そんな筈は無え！ハンターマークも描いてあるし、誰かに協力を頼むしか・・・ん・・・？」

何かを発見した・・・

ロイ

「ハンターマークの脇に数字が書かれてるぞ？何だ、『5』って？」

大袋にはそれぞれ数字が書かれている。その数字と同じ階数の駐車場の中央口に運ばなければならない。但しエリアの分断を防ぐ為、数字の若い物から順に運ぶ必要がある。

その事に気付かなければ、大袋を持ち運ぶ事は出来ない。

ロイ

「ヤベエな・・・！ここで立ち往生したら絶対ハンターに見つかる・・・！一旦離れるか・・・」

大袋から遠ざかるフェレ家の公子。走り損だ・・・

ゲーム開始から全く動いていないヴィータ。

ヴィータ

「ミッションなんかやるもんじゃねえよ・・・！やろうと出ていくから、ハンターに見つかって捕まるんだよ・・・コアラと一緒に・・・！コアラも地上に降りるからデインゴとかに襲われんだよ・・・」

デインゴに襲われる為にミッションに行くコアラ達・・・

ヴィータ

「だから、ミッションに行く奴はさっさと捕まっちゃえばいいんだよ・・・！」

アミティ

「この近くだよね、西口って・・・あっ・・・！この道をまっすぐ行けばすぐだ・・・！」

西口に置かれた大袋を目指すアミティ。

> i 2 7 6 8 7 — 2 0 9 6 <

しかし、向かう先にハンター・・・

アミティ

「あともう少し・・・！もう少しで着くね・・・！」

ピーーーーーービビビッ

LOCK ON AMITIE

アミティ

「うわぁー！嘘っ！」

ハンターに見つかり、一目散に逃げるアミティ。しかし、ハンターとの距離は縮まっていくばかり。最早、逃走不可能・・・

アミティ

「いやぁー！」 ポンッ

> i 2 7 6 8 8 — 2 0 9 6 <

アミティ

「ちよつと待つてよー！あんな所から出て来るなんて狡いよー！絶対大袋取れないじゃーん！」

えりか

「『1階西口付近にてアミティ確保』・・・!」

アルル

「ええ〜!?!アミティ捕まるの早いよ〜!」

ヴィータ

「ほらな・・・!こういう事になるんだって・・・ホントにバカだよな、こいつ・・・!」

アミティ

「もう酷いよ・・・!」

ディンゴに襲われたコアラの気持ちがよく分かった様だ・・・

シャマル

「ちよつと待って・・・これさ、今のところ誰もミッションやってないって事・・・?」

デイジー

「考えられない・・・!というか、男の人達情けな過ぎるでしょ・・・!」

ロイ

「ちくしょう・・・あの地面に固定された袋どうすんだよ・・・?」

数字の意味が分からず狼狽^{うろた}える男。

スバル

「あれだ！」

電器館近くの東口の大袋を見つけたスバル。

スバル

「これだよね、大袋って・・・」

袋の書かれている数字は・・・3だ・・・

スバル

「あれ・・・？『3』って数字が書かれてる・・・3階に持って行って事かな・・・？」

数字の意味をすぐに読めたスバル。早速その袋を持ち上げる。

スバル

「重つ・・・！予想に反して結構重い・・・！1人で運べなくはないけど・・・重労働だよ・・・！ハンターに見つかったら、速攻で終わりだな・・・！」

祈里

「あつ、スバルさん・・・！」

そこへ祈里が合流。

スバル

「祈里・・・！」

祈里

「随分重そうですね・・・」

スバル

「滅茶苦茶重いよ．．．！あたし、これを3階に持って行くから．．
・『4』って数字が書かれた袋を見つけたら、4階に持ってつてく
れないかな．．．？」

祈里

「えっ．．．？どういう意味ですか．．．？」

スバル

「袋に数字が書かれてるんだよ．．．どうもそれが、その数字の階
に持って行けって事だと思っただよ、あたしは．．．」

祈里

「なるほど．．．分かりました．．．！有難う御座います．．．！
気を付けて下さい．．．！」

スバル

「OK．．．！」

2人は別れる。

スバル

「時間には余裕あるけど、あんまりゆっくりしてられないな．．．」

その大袋を運ぶスバルの姿を監視カメラが捉えた．．．更に、謎の
人物も陰からスバルを凝視する．．．

ヤング

「よしっ．．．！今がチャンス．．．！」

ハンターの姿が見えなくなったのを確認し、東口の大袋に近付くヤングリンク。

キヤ口も東口へと駆け寄っていく。

ヤング

「よしっ……さっさと持ってっ……！」

袋を持ち上げようとするヤング。しかし……

ヤング

「あ、あれ……！？ええ！？ど、どういう事だよ！？」

キヤ
口

「えっ、えっ、えっ？どうしました？」

ヤング

「おお、キヤ口か・・・何でか分かんねえけど、この袋ビクともしねえんだよ・・・!」

キヤ
口

「ええ！？嘘！？あ、あれ……？ハンターマークの所に何か書いてありますよ？」

ヤング

「はあ……？ ホントだ……」
「R……？ 何だよ、R だって……」
「……？」

キヤ
口

「これ若しかして、屋上用の袋じゃないですか・・・？」

ヤング

「屋上・・・？」

キヤロ

「私の予想だと、3階から5階の袋が逃走者の手に渡らないと持ち上げられない様にしてあるんじゃない？」

ヤング

「はああ！？おい、マジかよ！じゃあ、別の所探さなきゃいけないって事か！？」

キヤロ

「いやっ！3つの袋が持ち出されるのはそう遅くない筈です・・・！今はこの辺でハンターを見張って、持ち運べる様になったら2人で持って行きましょう・・・！」

ヤング

「そうだな・・・もう時間も思ってる以上に無いしな・・・」

> i 2 7 6 8 9 — 2 0 9 6 <

宝くじ売り場近くの東口にやって来た祈里。

祈里

「あつ・・・！この袋だ・・・！『4』って書いてある・・・！これを4階の装置まで持って行けばいいんだ・・・！」

早速持ち上げる。しかし・・・

祈里

「お・・・重い・・・！これを4階まで持つてくの・・・？」

彼女にとって、大袋を運ぶのはかなりの重労働の様だ。

そこへ・・・

アルル

「大袋運んでる・・・？なんか重そう・・・」

近くにアルルが現れた。

アルル

「祈里・・・！」

祈里

「アルルちゃん・・・！」

アルル

「重そうだね・・・手伝おうか？」

祈里

「うん・・・お願いするよ・・・これ、私1人じゃとても・・・」

2人は協力して大袋を運ぶ。

ネス

「あれかな、大袋って・・・」

先程ロイが放棄した大袋を見つけたネス。すぐさま駆け寄り、袋を持ち上げる。

ネス

「お・・・重い・・・！こんな時に超能力が使えるば・・・！」

超能力に頼る事は、ゲームの趣旨に反する。今は自力で運ぶしかない。

スバル

「やっと着いた・・・！」

>i27690<r u b y><r b>2096<

漸</r b><r p>(</r p><r t>ようや</r t><r p></r p></r u b y><3階中央口に辿り着いたスバル。

彼女は持っていた大袋をエリア縮小装置の上に乗せる。

すると、装置のランプが消えた。

>i27698—2096<

スバル

「よっしゃ・・・！ミッションクリア・・・！しかしきつい・・・！」

プルルルル プルル♪

ドクター

「メールか・・・」

スネーク

「『スバル・ナカジマの活躍により、3階の封鎖は免れた』・・・
！」

リユカ

「あつ・・・！『3階の封鎖は免れた』だって・・・！やった・・・！」

ルイージ

「良かった・・・これで強制失格にならなくて済む・・・！」

シグナム

「やはりあいつは使えるな・・・」

スバルの活躍により、3階の封鎖は阻止された。

残るは4階・5階・屋上の3ヶ所。

現在大袋を運んでいるのは祈里・アルル・ネスの3人。

エリア封鎖まで、残り3分半を切った。間に合うのか！？

エリア縮小阻止へ！（後書き）

残る3つの大袋を無事に運べるのか！？

そして次回、逃走者達にとんでもない危機が訪れる！？

ミッション1終了！　しかし・・・（前書き）

残るは4階・5階・屋上の3ヶ所

無事に大袋を運び、封鎖を免れるのか！？

そして、逃走者に降りかかる前代未聞の大事件とは！？

ミッション1終了！　しかし・・・

現在大袋を運んでいるのは、祈里・アルル・ネスの3人。残り130分までに、大袋を中央口のエリア封鎖装置に運ばなければエリアは狭まり、逃走成功の確率が格段に下がってしまう。

アルル

「重いね、この袋・・・！」

祈里

「ハンターに見つかったら、おいて逃げる他ないよ・・・！」

大袋の重さはおよそ17kg。ハンターに見つかれば、手放して逃げるしかない。

ネス

「ヒュ・・・重過ぎるよ・・・！無事に運べるのかな・・・？」

重さに耐え切れず、袋を引き摺りながら運ぶネス。彼が向かう目的地は・・・

えりか

「あと3分ちよつとしか無いじゃん・・・！早く持って来てよ・・・！」

えりかが潜伏する5階だ。

屋上駐車場に持って行く大袋の近くにいるヤングリンクとキャロ。

キヤロ

「もうそろそろ持てる頃じゃないですか？」

ヤング

「どうだろう？」

ヤングは大袋を持ち上げる。

ヤング

「うわっ、重っ！こりゃダメだ・・・！俺1人の力じゃ、とてもじゃないけど持って行けねえ・・・！キヤロ・・・頼む、手伝ってくれ・・・」

キヤロ

「そんなに重いんですか？」

ヤングに頼まれ、キヤロも大袋を持つ。

キヤロ

「うっ・・・！ホントだ・・・！これを屋上に・・・！？」

ヤング

「まあ、でも行くしかねえよ・・・」

2人は協力して屋上駐車場のエリア封鎖装置を目指す。

> i 2 7 8 5 8 — 2 0 9 6 <

デイジー

「あと3分か・・・ちゃんとやってるのかな・・・？」

咲

「でも、残り3分で1つしかクリアしてないって……ちょっと遅くない……？」

人任せなデイジーと咲。不安が思わず口から漏れる。

祈里

「やっとだ……」

アルル

「ここまでの道のりが長い……」

漸く4階の中央口に辿り着いたアルルと祈里。

2人は持つて来た大袋をエリア縮小装置の上に乗せる。

すると、装置のランプが消えた。

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

アルル

「OK……！」

祈里

「もうきつい……！」

プルルルル プルル♪

ヴィータ

「何だ？」

ルイージ

「『アルル・ナジャと山吹祈里の活躍により、4階の封鎖は免れた』
・・・！」

シャマル

「やっと2つ目ね・・・」

スバル

「よしっ・・・！これで大分楽にはなった・・・！流石祈里だ・・・
！」

シグナム

「何故だ・・・？何故こんなにも遅いんだ・・・？」

ミッシェンクリアの遅さに苛立ちを隠せない、ヴォルケンリッター
の将・シグナム。

シグナム

「ん？」

彼女の視線の先には・・・

ネス

「もう無理だよ・・・1フロア上がるのがやっとだよ・・・」

大袋を運んでいるネスだ。

シグナム

「あいつ・・・ネスか・・・？状況からしてかなり重そうだな・・・手伝ってやるか」

シグナム、初めてのミッション。

シグナム

「おい」

ネス

「ええっ！？あつ・・・シグナムか・・・吃驚した・・・」

シグナム

「随分と重そうな袋だな」

ネス

「そうなんだよ・・・もう今のボクのカじゃ引き摺^ずるのが関の山だよ・・・」

シグナム

「そうか・・・何なら、あたしが代わりに持って行くか？」

ネス

「えっ？やってくれるの？」

シグナム

「ああ・・・」

ネス

「ホント！？じゃあ、お願いするよー！」

ネスは持っていた大袋をシグナムに託した。

ネス

「お願いね！絶対捕まんないでよ！」

シグナム

「当然だ・・・お前こそ捕まるんじゃないぞ！」

シグナムはそう言い残し、5階のエリア封鎖装置を目指す。

ネス

「流石ヴォルケンリッターのリーダーだね・・・！オーラが違う・・・！」

ミッションを託したネス。

> i 2 7 8 6 1 — 2 0 9 6 <

その近くにハンター・・・

ネス

「これからどうしようかな・・・？もう大袋は、全部逃走者の手に渡ってる筈だからね・・・次のミッションまで安全な所に・・・ん・・・？あれハンターじゃん・・・！」

ハンターを見つけ、逃げ出すネス。

しかし、気付かれた・・・

ネス

「ヤバい！これ多分見つかった！」

入り組んだ道を利用し、ハンターの追跡をかわす。

> i 2 7 8 6 2 — 2 0 9 6 <

上手く撒いた様だ・・・

ネス

「危ない、危ない・・・！」

> i 2 7 8 5 9 — 2 0 9 6 <

キャロ

「あと2分だ・・・！急がないと・・・！」

ヤング

「そうだな・・・でも屋上ってこんなに遠かったか・・・？」

屋上駐車場のエリア封鎖装置を目指すヤングリンクとキャロ。

ヤング

「あつ・・・！ちょっと待て・・・！」

キャロ

「えっ・・・？何、何、何、何・・・？」

視線の先にハンター・・・

ヤング

「ハンターいるな・・・曲がってくれねえと動けねえぞ、これは・・・」

キャロ

「最悪の場合、見つかるかも・・・」

ハンターを目撃し、思う様に進めない。

ドクター

「もう残り1分半だ・・・」

リュカ

「まだ半分しかクリア出来てない・・・」

ロイ

「最悪屋上は封鎖される事は覚悟しておいた方がいいな・・・」

タイムリミットが迫り、諦めの声が漏れ始める・・・

スバル

「いやっ、ここは絶対クリアしてくれる人がいるよ・・・！皆、自分の首を絞める様な事は絶対しないもん・・・！」

祈里

「時間無いけど・・・残りの2つも絶対誰かがやってくれてるって・・・私、信じてる・・・！」

シグナム

「あの装置か・・・あれにこれを置けばいいんだな・・・？」

5階の中央口に辿り着いたシグナム。

彼女は持っている大袋をエリア縮小装置の上に乗せる。

すると、装置のランプが消えた。

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

シグナム

「これでいいのか・・・」

プルルルル プルル♪

スネーク

「メール来たぞ・・・」

ロイ

「えっと・・・『シグナムの活躍により、5階の封鎖は免れた』・・・！」

えりか

「あつ！『5階の封鎖は免れた』だって！やったー！これで安心して潜める！」

ヴィータ

「なかなかやるじゃねえか・・・！」

シャマル

「流石・・・！流石リーダー・・・！」

ヤング

「よしっ……！今なら行けるな……！」

ハンターが過ぎ去り、再び動き始めるヤングリンクとキャロ。

キャロ

「ちょっと急ごうよ……！もうあと1分だよ……？」

ヤング

「1分……！？ヤベエな……！」

エリア封鎖まで1分を切った。

2人が大袋を運べなければ、屋上駐車場は封鎖され逃走に不利となる。

> i 2 7 8 6 0 — 2 0 9 6 <

ヴィータ

「残り40秒……！」

ロイ

「封鎖されちまうのかな、このまま……」

キャロ

「あつた……！あの装置だ……！」

ヤング

「早い所乗せちまおう……！」

屋上の中央口に辿り着いたシグナム。

2人は持っている大袋をエリア縮小装置の上に乗せる。

すると、装置のランプが消えた。

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

ヤング

「よし・・・！何とか間に合った・・・！」

キャロ

「こんなに重い物運んだの初めて・・・」

プルルルル プルル♪

ドクター

「メール来た・・・」

咲

「おっ！『ヤングリンクとキャロ・ル・ルシエの活躍により、屋上の封鎖は免れた』！」

リユカ

「全部クリアした・・・！すごい・・・！」

ヴィータ

「あれか？前回ライティング分隊が不甲斐無かったから、その汚名返上って奴か？」

デイジー

「これで何処に行っても安心ね・・・！」

エリアの封鎖は免れたが、エリアには3体のハンターが逃走者を捜索している。安心出来る場所など存在しない・・・

ルイージ

「もう12万円超えてるよ・・・自首したいな・・・もう10万円あればね・・・」

自首用電話から申告すれば、その時点までの賞金を獲得しゲームからリタイアとなる。但し、電話にはダイヤルキーが付いている為、容易に自首は出来ない。

ルイージ

「いやでも・・・兄さんがあれだけ酷い目に遭ったんだ・・・ボクが名誉を取り戻さないと・・・！このままじゃ、ボクまで任天堂から追放されちゃう・・・！逃げ切ろう・・・！逃げ切って、兄さんの心を少しでも癒してあげよう・・・！」

その頃、何者かに誘拐された伊東は・・・

伊東

「ん・・・うん・・・こ・・・ここは・・・何処・・・？」

伊東が連れ去られたのは、逃走劇が行われているショッピングモールから遠く離れた別荘だった・・・

すると・・・

パシヤッ！

伊東

「・・・！な、何・・・！？」

一瞬眩い光が目に飛び込んできたかと思うと、そこには彼女を誘拐した犯人が立っていた・・・

しかし、その出で立ちは全身が黒い布で覆われ、ピエロの被り物をしていた・・・

????

「君は誘拐された・・・」

犯人の声は、ボイスチェンジャーで変えられていた・・・

伊東

「ゆ・・・誘拐・・・！？」

????

「暫くの間ここにいてもらう・・・逃げようなんて考えは決して起こさない事だ・・・」

伊東

「に・・・逃げるって・・・私には今日イベントがあるの・・・！？」

????

「あのイベントは、即刻中止になってももらわないと困るんだよ・・・」

伊東

「中止にならないと・・・困るって・・・あなた、一体何が目的なの・・・!？」

???

「それは追い追いつかってくる・・・だから無駄な事は口にするな・・・もし妙な真似をしたら・・・」

すると犯人は、懐^{ふところ}から実弾入りの拳銃を突き付ける・・・

伊東

「・・・!」

???

「命は無いと思え・・・」

そう言い残すと、犯人は部屋から出ていく・・・

イベントが行われる約2時間前・・・

伊東和葉のマネージャー・城ヶ崎^{じょうがさき}亮一郎が伊東を呼びに来た・・・

城ヶ崎

「和葉・・・入るぞ・・・」

待合室のドアを開ける・・・しかし、待合室は蛻もぬけの殻・・・

城ヶ崎

「あれ・・・？あいつ何処行っただ・・・？ん・・・？」

テーブルの上には、1通の差出人不明の置手紙が・・・

城ヶ崎

「『伊東和葉は預かった。妙な真似をせずにこちらの指示に従ってくれば、彼女は無傷で返してやろう。警察に通報したら彼女の命は無いと思え！ クロノス』・・・！？こ・・・これって・・・！」

その置手紙は、クロノスと名乗る犯人が伊東を誘拐した事を記した脅迫状だった・・・更にその手紙には、誘拐された状態の伊東の写真が同封されていたのだ・・・

この事件はショッピングモールの至る所に設置されているテレビで速報で流された。

キャスター

「番組の途中ですが、ここで臨時のニュースをお伝えします。本日、鳴海メインプレイスで開催が予定されていた、人気アイドル・伊東和葉さんのCD発売イベントが急遽中止となりました。関係者によりますと、伊東さんが何者かに誘拐されたという事です。現場には脅迫状と写真1枚が残されており、警察は誘拐事件として捜査を行い、伊東さんの行方も調べているという事です」

この報道がされていく内に、不審な人物を見たという情報も次々と

出てきていた・・・

証言者の男

「顔はよく見えなかったんですけど・・・腕に『逃走中』って書かれた物が見えて・・・あつ、あと頭に『FULL90』って書かれた黒いヘッドギアを付けていたのは覚えてます・・・そいつが、人がすっぽり入るくらいの大きな袋に何かを入れてた感じで走り去って行ったんです・・・」

キヤスター

「この証言を元に、警察が監視カメラの映像を分析した結果、証言とほぼ一致する人物が数人映っており、またこの人物は、本日鳴海メインプレイスで行われている『逃走中』というゲームの参加者である可能性が高い事が判明しました」

ゲームマスター

「・・・」

テレビで流れている臨時ニュースをモニター越しに見ているゲームマスター・・・

突然、画面をスライドさせる・・・

するとそこには『ADD HUNTERS』の文字が・・・

ゲームマスターはそれをタッチする・・・

しかし、モニターに映し出されたのは5人の私服警備員・・・

すると突然、私服警備員達の動きが止まった・・・

次の瞬間、瞳が発光した上に逃走者の顔が次々とインプットされていく・・・

ブルルルル　ブルル

咲

「メール来た・・・！」

キヤロ

「ミッションかな・・・？えっ・・・？通達・・・？」

ドクター

「『このショッピングモールで誘拐事件が発生』・・・！？何だよ、誘拐事件って」

スネーク

「『監視カメラに逃走者の姿が映っていた為、全員に無実の容疑が掛けられてしまった』・・・最悪だな、それ・・・！」

ネス

「『これより一般客に見つかりと騒ぎ出し、ハンターを呼び寄せる』・・・嘘！？」

デイジー

「『更に、エリア内にいる5人の私服警備員が』・・・」

アルル

「『ハンターと同じ様に君達を確保する』・・・!?!」

ヴィータ

「『気を付けたまえ!』つて・・・ちょっと待てよ!あたし達、かなり不利な状況じゃねえかよ!」

スバル

「・・・という事は・・・エリアにハンターが8体いる様なもんじやん!」

逃走者に伊東を誘拐した容疑が掛けられてしまった。これによりテレビで残存者全員の顔が公開されている為、一般客に見つかる騒ぎ出し、近くにいるハンターを呼び寄せる。更に、ゲームマスターの操作により、5人の私服警備員が事実上ハンターとしてエリアを搜索し、ハンターと同じ様に逃走者を追い確保する。

祈里

「ええ〜!?これじゃあ移動出来ないじゃん!」

えりか

「最悪だね・・・!不用意に動いたら、それこそ捕まりに行く様なもんだから・・・!」

シグナム

「この状況から抜け出す方法は無いのか?」

危機的状況に右往左往するシグナム。

その時・・・

客

「あれ・・・？あの人・・・」

シグナム

「な・・・何だ・・・？」

客

「あのテレビに映ってた・・・」

シグナム

「テレビ・・・？」

客

「あつ！不審者だ！誘拐犯！」

これを口火に、次々と一般客が騒ぎ出した。

シグナム

「な・・・何だ、この騒ぎは！？あたしが何したって言うんだ！？」

訳も分からず、一目散に逃げるシグナム。

しかし、騒ぎを聞いた私服警備員ハンターがシグナムの確保へと向かう。

シグナム

「こんなに騒がれたら・・・不味い、ハンターだ！」

そして、見つかった・・・

シグナム

「早いところ、この騒ぎから抜け出さなければ！」

曲がり角を利用し、ハンターとの距離を広げる。

> i 2 7 8 6 4 — 2 0 9 6 <

しかし、逃げる先に別のハンター・・・

シグナム

「事実上ハンターが8体・・・流石にきつい・・・！こっちに逃げるか・・・なっ、こっちにもいたのか！？」

見つかった・・・

ピーーーーーー

LOCK ON SIGNUM

シグナム

「くそっ！何て速さだ！」

一目散に逃げ続けるシグナム。しかし、ハンターとの距離はどんどん縮まる。最早、逃走不可能・・・

シグナム

「ううっ！」 ポンッ

> i 2 7 8 6 6 — 2 0 9 6 <

シグナム

「くそっ……！こんなに取り囲まれたら、逃げれる訳無いだろ……！何なんだ、この包囲網の大きさは……！」

シャマル

「あっ……！リーダーが確保された……！」

ヴィータ

「何やってんだよ……！これからがあたし達ヴォルケンリッターの見せ所じゃねえのかよ……！？」

その時、新たな証言が出てきた……

証言者の女

「確かにそんな格好はしていましたが……両腕に気持ち悪い模様の刺青いれずみが見えたんですよ……」

この証言が、逃走者達に助け舟を渡す事になる……

スネーク

「くそっ……このままでは、強制的ミッションが来ても動けん……！どうすれば……」

プルルルル プルル[♪]

スネーク

「むっ……！」

メールだ……

リユカ

「ミッション2……！ヤバい、見つかる……！」

シヤマル

「『誘拐事件の容疑者に関する新たな証言が出た』……新たな証言……？」

ルイージ

「『1階の螺旋階段近くにいる警察の許もとに行き』……」

スバル

「『両腕を見せれば、疑いが晴れ一般客に騒さわがれる事も』……」

えりか

「『私服警備員に追われる事も無くなる』……！』」

アルル

「疑いが晴れるんだ……！これは急がないと……！」

MISSION？ 両腕を見せ疑いを晴らせ！

新たな証言により、誘拐犯の両腕に刺青いれずみがある事が判明した。これより逃走者は、1階の螺旋階段近くにいる警察の許もとへ行き、両腕を見せて刺青が無い事を証明すれば疑いが晴れ、テレビに映し出さ

れている容疑者リストから外され、一般客に騒がれる事もハンターと化した私服警備員に追われる事も無くなる。

螺旋階段Ⅱ 地図のU字になっている所

えりか

「先ずは1階を目指さなきゃいけないんだ・・・うわ、大変だよ・・・」

ドクター

「すぐに行かないと、不味い事になるな・・・」

疑いを晴らす為に、次々と移動を試みる逃走者達。

しかし、エリアには事実上8体のハンター。動けば見つかる危険が高まる。

容疑者に仕立て上げられた逃走者達の運命は！？

ミッション1終了！　しかし・・・（後書き）

残る逃走者は、ルイー・ジ・デイ・ジ・ドクター・ヤング・ネス・リ
ユカ・ロイ・スネーク・アルル・咲・えりか・祈里・ヴィータ・ス
バル・キャロ・シャマルの16人

初の時間無制限ミッション・・・無事に全員クリア出来るのか！？

濡れ衣を晴らせ！（前書き）

無実の罪を擦り付けられてしまった逃走者・・・

身の潔白を証明できるのか！？

濡れ衣を晴らせ！

1階の螺旋階段近くにいる警察に両腕を見せ、疑いを晴らさなければ一般客に騒がれ、ハンターと化した私服警備員を含めた8体のハンターに追われ続ける。

ルイージ

「これ早めに行つていた方がいいって……！8体はきついよ……！」

ロイ

「螺旋階段が目印か……騒がれたら堪ったもんじゃねえ……！」

疑いを晴らす為に、続々と警察の許を^{もと}目指す逃走者達。

しかし、移動には危険が伴う。

> i 2 8 3 1 6 — 2 0 9 6 <

ワルイージ

「これは行くだろ、絶対……」

アミティ

「だよね？行かないと、ずっと騒がれっ放しだもんね……」

シグナム

「確かにな……それはそうと、レッド……お前はこのゲームに

何したんだ？」

レッド

「うつ・・・！お前・・・何て事言うんだよ・・・」

ワルイージ

「その通りだ、レッド・・・！お前3回とも見せ場を作れてねえだろ？」

レッド

「そ、それは・・・ただ単に運が無いだけであって・・・」

シグナム

「お前の運の無さは群を抜いてるぞ・・・！あのリユカでさえ、今回そんな事は無さそうだというのに・・・」

レッド

「うつ・・・」

ワルイージ

「だが、運が無えと言ったらアミティもそうだよな？」

アミティ

「え・・・ええ・・・？」

ワルイージ

「前回もそんなに目立ってなかった気がするんだよね・・・そして今回は、早めに捕まるという始末・・・」

アミティ

「ううゝ・・・あ、あたしだってこんなに呆気無く終わるだなんて
思わなかったもん・・・」

シグナム

「それは誰にでも言えるだろ・・・？あたしなんか、騒がれてこの
ザマだぞ・・・」

ワルイージ

「今回の逃走中は、いつもと何かが違うな・・・このエリアから不
穏な空気が流れてる気がするんだよな・・・」

警察の許^{もと}へと近付くドクターマリオ。

ドクター

「あそこなだけどなゝ・・・ハンターが彷徨^{うろつ}してるんだよ・・・」

ハンターがいる為、思う様に近付けない。

そこへ、スネークが合流。

スネーク

「ドクターか・・・」

ドクター

「あつ、スネーク・・・今行けないっばいんだよ、ハンターがそこ
にいるから・・・」

スネーク

「確かにいるな・・・だが、見た感じ遠ざかつてる感じがする・・・よしっ、曲がった・・・！行くぞ・・・！」

ドクター

「OK・・・！」

意を決して、2人は警察の許へ。もと

スネーク

「来たぞ・・・！」

ドクター

「あ・・・あれ？この人達、見た事あるぞ・・・！」

スネーク

「何・・・！？おっ・・・確かに俺もこいつ等の事はいくらか知っている・・・！」

2人は鳩が豆鉄砲を食った様な顔をしている。その理由とは・・・

スネーク

「間違いない・・・！こいつ等・・・」

ドクター

「機動六課の連中だ・・・！」

そこにいた警察は、機動六課の時空管理局本局及びロングアーチの者達だったのだ。

スネーク

「お前・・・クロノ・ハラオウンだろ・・・？何してんだ、こんな所で・・・？」

警部（クロノ）

「我々は機動六課ではない！鳴海警察署の者だ！」

ドクター

「いや、いや、いや・・・誰がどう見たって、クロノじゃないか・・・」

警部（クロノ）

「それはそうと・・・お前達、誘拐事件の犯人か？」

ドクター

「誘拐・・・いやっ！違います！」

スネーク

「断じて違う！」

警部（クロノ）

「ならば・・・両腕に刺青^{いれずみ}があるかどうか見せてみる」

そう言われ、2人は両腕を前に出す。更に、ヴァイスとグリフィスが扮する巡査が2人の袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

警部（クロノ）

「刺青^{いれずみ}は・・・無いか・・・分かった。お前達を容疑者リストから外す」

ドクター

「あつ・・・有難う御座います」

スネーク

かたじけな
「忝い・・・！」

2人は警察の許もとを離れる。

警部（クロノ）

「おい・・・あの2人の所、しっかりチェックしておけ」

巡査（ユーノ・シャリオ）

「はい！」

2人の巡査が、手元にある容疑者リストのドクターマリオとスネークの欄にチェックを入れる。

それと同時に、テレビ画面からドクターマリオとスネークが削除された。

疑いを晴らしていないのは、残り14人・・・

咲

「もう面倒臭い事になってるじゃん・・・冗談じゃないよ・・・！」

顔を隠しながらエリアを進む咲。しかしテレビでの証言により、一般客はヘッドギアやアームバンドにも反応し、騒ぎを起こしてしまう。騒がれずに進むのは容易ではない。

ヤング

「くそ……！客が多過ぎて、全然進めねえ……！」

思う様に動けないヤングリンク。

その後ろから、不気味な足音……

ヤング

「コソコソしなきゃいけないっていうのは、俺のポリシーに反す……
・何だ、この激しい足音……？うわぁ！」

ハンターと化した私服警備員だ……

ヤング

「ヤベエ！騒がれるとか、そんなの関係ねえよ！」

曲がり角を利用し、一目散に逃げるヤングリンク。

どうやら、間一髪撒いた様だ……

ヤング

「これ絶対……強行突破も覚悟しねえと……1階まで行けねえ
よ、こんな状態じゃ……！」

えりか

「5階に潜んでたのは失敗だったかな……？」

1階を目指すえりか。その時……

客

「あっ！怪しい女！」

一般客に見つかった・・・

えりか

「ギクッ！」

顔を隠しながら、素早くその場を離れる。

えりか

「どうしよう・・・？こんな時にエレベータさえ使えれば・・・」

エレベータの使用はルール上禁止されている。

一般客に騒がれているのは、彼女だけではない・・・

客

「あいつだ！誘拐犯！」

客

「子供とは言え許さんぞ！」

ネス

「何でこうなの！？て言うか、騒がないで！ハンター来ちゃう！」

客

「見るからに怪しい奴がいたぞ！」

客

「誰か捕まえて〜！」

ルイージ

「ちよつと！何でボクが『見るからに怪しい奴』なんだよー！？」

客

「いたぞ！」

客

「こつちだ！」

キャラ

「私は何もしてません！だから、大声出さないでー！」

客

「あいつをひつ捕らえろ！」

客

「逮捕だ、逮捕！」

リユカ

「ヒュー！逮捕だなんてゴメンだよー！」

逃走者達を襲う冤罪の恐怖・・・

デイジー

「もうヤダ・・・！何処行ってもお客さんだらけじゃない・・・！」

不満を漏らしながらも、1階を目指しているデイジー。

> i 2 8 3 1 7 — 2 0 9 6 <

しかし、彼女の向かう先に私服警備員ハンター・・・

デイジー

「おまけに8体もハンターいるし・・・もう少し楽しくて楽なものだと思ってた、逃走中・・・」

ピーーーーーービビビッ

LOCK ON DAISY

そして、見つかった・・・

デイジー

「ん・・・？誰・・・？嘘！？あれハンター！？止めてー！」

追って来る者がハンターだと気づき、一目散に逃げ続けるデイジー。しかし、彼女がハンターに敵う訳が無い。最早、逃走不可能・・・

デイジー

「キャーッ！」 ポンッ

> i 2 8 3 1 8 — 2 0 9 6 <

デイジー

「警備員怖過ぎる・・・！何であんなに速いのよー！？50万円に行く前に捕まっちゃったし・・・もう最悪ー！」

プルルルル プルル♪

スネーク

「メールか・・・」

ルイージ

「あっ・・・！『2階100円ショップ付近にてデイジー確保、残り15人』・・・！デイジー捕まった・・・！」

ロイ

「やっぱりこの状況は厳しいぞ・・・！」

アルル

「1階の螺旋階段の近くって言ってたよね・・・？」

螺旋階段の踊り場から下の様子を窺^{うかが}うアルル。

アルル

「あそこ・・・妙に人が溜まってる・・・多分あそこだ・・・！」

警察の姿を捉え、一気に階段を下りていく。

同じ頃、祈里とスバルが警察の姿を捉えた。

祈里

「あれじゃないですか？」

スバル

「間違いない・・・行こう！」

祈里

「はい！」

そして3人が、警察の許^{もと}に到着。

祈里

「すみません」

アルル

「あ．．．あれ？この人達．．．機動六課じゃん！」

祈里

「えっ？」

スバル

「ホントだ！皆さん、こんな所で何してるんですか？」

警部（クロノ）

「我々は機動六課ではない！鳴海警察署の者だ！」

アルル

「いや．．．だって君、クロノじゃん．．．」

警部（クロノ）

「それはそうと．．．お前達、誘拐事件の犯人か？」

スバル

「はっ．．．！違います！」

アルル

「ボクは誘拐なんてしてません！」

祈里

「私ものです！」

警部（クロノ）

「ならば・・・両腕に刺青いれずみがあるかどうか見せてみる」

そう言われ、3人は両腕を前に出す。更に、3人の巡査が袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

警部（クロノ）

「お前達ではない様だな・・・よし分かった。お前達を容疑者リストから外しておく」

スバル

「有難う御座います・・・それにしても、ホントに何してるんですか？」

疑問を抱きながら離れるスバルを尻目に、この2人は・・・

アルル

「あの、すみません・・・」

祈里

「握手してもらってもいいですか・・・？」

何故か警部に握手を強請ねだる。警部も何故かそれに応え、2人と握手をする。

アルル・祈里

「有難う御座います・・・！」

巡査（グリフィス）

「警部に対して失礼だぞ！」

巡査（ヴァイス）

「少しは立場を弁^{わきま}えろ！」

アルル

「うるさいよ！ヴァイスにグリフィス！」

祈里

「いいじゃないですか、少しぐらい！」

警部（クロノ）

「可愛い娘^こ達だな・・・」

巡査（ユーノ）

「警部殿！」

巡査（シャリオ）

「しっかりして下さい！」

警部（クロノ）

「・・・」

更にこの後、シャマル・ネス・ヤングリンクの3人が潔白を証明する事に成功。

これで、疑いを晴らしていないのは残り7人となった。

えりか

「うわゝ・・・2階に下りてきたら、急に人が多くなってるじゃん・・・！無事に行けるかなゝ・・・？」

ルイージ

「これ騒がれるの覚悟で行かないと、どんどんターゲット絞っていくからなゝ、ハンターも・・・」

キャラ

「こんな所でもたまたましてたら、それこそハンターの思う壺だよ・・・！腹を決めていかなきゃ・・・！」

事実上8体のハンターの恐怖に怯えながらも、警察の許を^{もと}目指す。しかし、動けばリスクも高い。

シャル

「疑いを晴らせてよかったわ・・・あのままだったらどうなっていた事か・・・」

既に疑いを晴らし、一般客に騒がれる事が無くなったシャル。

その時・・・

ピロロロロロロロ

シャル

「えっ・・・？な、何・・・？」

電話だ・・・

シャル

「もしもし？」

ヴィータ

「シャルカ？あれ・・・両腕警察に見せたか？」

シャル

「ええ、もうやったわ」

ヴィータ

「そうか・・・！それじゃあな、警察の連中を・・・あたしの所に連れて来てくれ・・・！」

シャル

「ええゝ！？何で！？私、クリアしたから安心して4階に来たばかりなのに！」

ヴィータからの突然の要求に戸惑いを隠せないシャル。

> i 2 8 3 1 9 — 2 0 9 6 <

そんな彼女の近くに2体のハンター・・・

シャル

「大体まだ疑いを晴らしていない人が何人かいるんだから、その人達の為にも移動させない方が・・・」

ヴィータ

「そんな奴等の事なんか、あたしの知ったこっちゃねえ・・・！兎に角連れて来い・・・！」

シャル

「でも・・・そんな事したら、大顰蹙だいひんしゅくを買う様なも・・・ん・・・
？嘘！？ハンター！」

ハンターを見つけ、一目散に逃げるシャル。

ヴィータ

「『ハンター！』って声が聞こえたんだけど・・・あいつ追われて
んのか？」

シャル

「止めてー！来ないでー！ああー！こっちにもー！？」

逃げた先にも別のハンター・・・最早、逃走不可能・・・

シャル

「やあー！」 ポンッ

> i 2 8 3 2 0 — 2 0 9 6 <

シャル

「2体・・・ハンターが2体もいるなんて・・・」

気付かぬ内に、ハンターに挟まれていた様だ・・・

プルルルル プルル♪

アルル

「また確保情報だ・・・」

えりか

「『4階駐車場にてシャルマル確保』だって……！」

ロイ

「ヴォルケンリッター情けねえ……！もう2人捕まってやがる……！」

ドクター

「ヴォルケンリッターが聞いて呆れるな、これは……」

ヴィータ

「嘘だろ……！？ヴォルケンリッター、もうあたししかいねえじやねえか……！」

仲間を使う作戦に失敗……

その頃、咲が警察の許もとに到着。

警部（クロノ）

「お前、誘拐事件の犯人か？」

咲

「違います！」

警部（クロノ）

「ならば……両腕いれずみに刺青があるかどうか見せてみる」

そう言われ、彼女は両腕を前に出す。更に、1人の巡査が袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

警部（クロノ）

「刺青^{いれずみ}は無い様だな・・・よし分かった。お前の名前を容疑者リストから外す」

咲

「有難う御座います・・・良かった・・・」

作戦に失敗したヴィータ。

ヴィータ

「ちくしょう・・・！こうなったら・・・」

再び電話を掛ける。

彼女が掛けた相手は・・・

ピロロロロロロロ

スバル

「電話・・・？あつ、ヴィータさんから・・・お疲れ様です」

ヴィータ

「スバルか？なあ、お前警察に両腕見せたか？」

スバル

「あつ・・・はい。もうやりました」

ヴィータ

「おお、そうか。じゃあな、警察の連中を・・・あたしの所まで連れて来てくれ」

スバル

「ええー！？ヴィータさん、今何処にいるんですか？」

ヴィータ

「今な、2階の螺旋階段近くのベンチの陰に隠れてるんだよ」

スバル

「それじゃあ、階段下りたらずぐですよ。あたしが連れて行く必要なんか無いですって」

ヴィータ

「もう足が疲れて動けねえんだよ・・・だから頼むって・・・！」

スバル

「階段を下りればいいだけなんですから、自分の力で行って下さいよ」

ヴィータ

「ゴチャゴチャ言っでねえで、さっさと連れて来い！バカ！」

そう怒鳴り散らすと、ヴィータは一方的に電話を切った。

ヴィータ

「何なんだよ、スバルの奴・・・！先輩の命令が聞けねえのかよ・・・！？」

後輩の気遣いの無さに腹を立てている様だ・・・

ルイージ

「いた・・・！あれが警察か・・・」

警察の姿を捉え、近付いていくルイージ。しかし・・・

客

「不審者がいたぞー！」

ルイージ

「嘘・・・！？何でこんな時に・・・！？」

一般客に騒がれ、その場を離れる。

しかし、騒ぎを聞き付けたハンターが確保へと向かう。

ルイージ

「折角のチャンスだったのに・・・どうしてこんな事に・・・あつ・・・！ハンター来てる！」

追って来るハンターに気付き、一目散に逃げるルイージ。

彼が逃げる先には・・・

リュカとキャラの姿が・・・

キャラ

「あともう少しまっすぐ行けばすぐですね・・・」

リュカ

「そうだね・・・あれ・・・？ルイージ・・・？ハンター連れてきてるし！」

キヤロ

「嘘!？」

2人も巻き添え・・・

ハンターから逃げる3人。逃げ切れるのか!？

濡れ衣を晴らせ！（後書き）

現在、疑いを晴らしていないのはルイー・ジ・リュカ・ロイ・えりか・
ヴィータ・キャロの6人

無事に疑いを晴らし、事実上8体のハンターの恐怖から逃れられる
のか！？

ミッション2終了！（前書き）

まだ疑いを晴らしていない6人は、無実を証明出来るのか！？

ミッション2終了！

ハンターに追われ、一目散に逃げるルイージ・リュカ・キャラの3人。

ルイージ

「来ないで〜！」

リュカ

「何でこっち来るんだよ〜！？」

キャラ

「やめて〜！」

> i 2 8 6 7 7 — 2 0 9 6 <

二手に分かれ、更に逃げる。

ハンターの視界から上手く消えた様だ。

そしてリュカとキャラは、そのまま警察のいる螺旋階段を目指す。

・・・が、ルイージは勢い余って正面の電器館へ・・・そこに警察はいない・・・

ルイージ

「ヒュ・・・！もうヤダ・・・！怖過ぎるよ・・・！」

その頃、リュカとキャラは警察の許へ^{もと}到着。

警部（クロノ）

「お前達、誘拐事件の犯人か？」

リュカ

「違います・・・！」

キヤロ

「私は、事件とは全く関係ありません・・・！」

警部（クロノ）

「ならば・・・両腕に刺青いれずみがあるかどうか見せてみる」

そう言われ、2人は両腕を前に出す。更に、2人の巡査が袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

警部（クロノ）

「なるほど、刺青いれずみは無いな・・・よし分かった。お前達を容疑者リストから外しておく」

リュカ

「有難う御座います・・・！」

キヤロ

「はあ、良かった・・・」

疑いを晴らし、安堵の表情を浮かべる2人。

と、その時・・・

ピロロロロロロ」

リュカ

「何、何？電話・・・あれ？ボクのじゃない・・・」

キャロ

「あつ、私の？えっと・・・ヴィータさんから・・・？はい、キャロです」

ヴィータ

「おお。お前警察に両腕見せたか？」

キャロ

「はい。たった今クリアしました」

ヴィータ

「おお、そうか。じゃあな、そこにいる警察の連中を・・・あたしの所まで連れて来てくれ」

キャロ

「ええ～！？ヴィータさん、今何処ですか？」

ヴィータ

「あたしか？あたしは今、2階の螺旋階段近くのベンチの陰に隠れてるぜ」

キャロ

「すごい近くじゃないですか。何で自力で来ようとしませんんですか？」

ヴィータ

「ずっと動き続けて足が疲れてんだよ・・・お前だけが頼りだ・・・！」

キャロ

「私だって、ここまで来るのが精一杯だったんですから・・・そんな連れて行く余裕無いですよ・・・」

ヴィータ

「嘘言つてねえで、早く連れて来いよ！」

そう野次を飛ばすと、ヴィータは一方的に電話を切った。

ヴィータ

「何だよ、キャロの奴まで・・・！て言うか・・・スバルの奴、何してやがんだ・・・？」

彼女はスバルに再び電話を掛ける。

ピロロロロロロ♪

スバル

「またヴィータさんだ・・・何ですか？」

ヴィータ

「『何ですか？』じゃねえよ・・・！おいコラ・・・！お前、いつになったら警察連れて来るんだ・・・！？おお・・・！？」

スバル

「だからさっきも言った様に、そんな近くにいるなら自力で行って

下さいって……！あたしが連れて行く必要なんか全然無いですよ・
・・！」

ヴィータ

「……」

すると、ヴィータは一方的に電話を切った。

スバル

「ちょ……切られたんだけど！何これ！？」

ヴィータ

「スバルもキャラも使えねえ連中だぜ……！先輩を何だと思ってんだよ、あいつら……！」

後輩の応対に目くじらを立てている……

その頃、警察の許もとにロイが辿り着いた。

警部（クロノ）

「お前、誘拐事件の犯人か？」

ロイ

「俺は犯罪を犯すほど愚かじゃねえ……！」

警部（クロノ）

「ならば……両腕いれずみに刺青があるかどうか見せてみる」

そう言われ、彼は両腕を前に出す。更に、1人の巡査が袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

警部（クロノ）

「お前では無い様だな・・・よし分かった。お前を容疑者リストから外す」

ロイ

「全くいい迷惑だぜ・・・！」

そこへ、遅れてえりかが到着。

えりか

「すみません！」

警部（クロノ）

「お前、誘拐事件の犯人か？」

えりか

「違います！嘘じゃありません！」

警部（クロノ）

「ならば・・・両腕に刺青^{いれずみ}があるかどうか見せてみる」

そう言われ、彼女は両腕を前に出す。更に、1人の巡査が袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

警部（クロノ）

「嘘じゃなさそうだな・・・よし分かった。お前を容疑者リストから外しておく」

えりか

「有難う御座います・・・！はあく、助かった・・・」

これで、疑いを晴らしていないのはルイージとヴィータの2人だけとなった。

電器館の冷蔵庫の陰に隠れているスネーク。彼は既に疑いを晴らしている為、私服警備員に追われる事は無い。

スネーク

「今回はここにいた方が良さそうだな・・・あそこから来るハンターをすぐに見つけられるし、向こうから来てもすぐに逆方向に動く事が出来る・・・」

常にハンターをやり過ごす作戦を考えている様だ。

> i 2 8 6 7 8 — 2 0 9 6 <

その時、ハンターが電器館に進入・・・

スネーク

「むっ・・・！ハンターがこっちに向かって来る・・・これは移動した方がいいな・・・」

ハンターを見つけたスネーク。距離を取る為、移動を試みる。

> i 2 8 6 7 9 — 2 0 9 6 <

しかし、見つかった・・・

スネーク

「不味い！目付けられた！」

曲がり角や棚を利用し、一目散に逃げるスネーク。しかし、ハンターとの距離は徐々に縮まっていくな。最早、逃走不可能……

スネーク

「ぐうつ……！」 ポンッ

> i 2 8 6 8 0 — 2 0 9 6 <

スネーク

「くそ……こんなに早く捕まるとは……俺とした事が……！」

作戦負けだ……

プルルルル プルル」

アルル

「確保情報だ……！」 『1階電器館にてスネーク確保、残り13人』
……」

ヤング

「スネーク確保！？嘘だ！あのスネークが！？」

祈里

「スネークさんまで捕まった……！」

ルイージ

「ヒィ……ヒィ……な、何でボクだけがこんな目に……」

涙目且つ荒い呼吸になりながらも、漸く警察の許に辿り着いたルイー
ジ。

ルイージ

「お・・・お願いです・・・助けて下さい・・・!」

警部（クロノ）

「お前、誘拐事件の犯人か？」

ルイージ

「ち・・・違いますよ!ボクはそんな事してません!」

警部（クロノ）

「ならば・・・両腕に刺青があるかどうか見せてみる」

そう言われ、彼は両腕を前に出す。更に、1人の巡査が袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

警部（クロノ）

「なるほど、犯人ではなさそうだな・・・分かった。お前を容疑者リストから外す」

ルイージ

「有難う御座います・・・もうここまで来るのに、かなりの時間使っちゃったよ・・・」

ルイージが疑いを晴らし、これで疑いを晴らしていないのはヴィー
タだけとなった。

ヴィータ

「シグナムとシャルマルは捕まっちゃったし、スバルとキヤロは使えねえし・・・ちくしょう・・・！自力で行くしかねえのかよ・・・！？」

仲間や後輩を使う作戦に悉く失敗し、自分の足で警察の許を目指す。

ヴィータ

「螺旋階段の近くだったよな・・・？ホントに下りてすぐ分かる所にいるのか？」

スバルの言葉に疑問を持ちながら、螺旋階段を下りていく。

ヴィータ

「おっ、マジでいた・・・お前等か、警察は・・・ああ？お前等・・・こんな所で何してやがんだよ？」

機動六課の者達が扮した警察の姿に、驚きの声を上げる。

警部（クロノ）

「お前、誘拐事件の犯人か？」

ヴィータ

「はあ！？違えし！」

警部（クロノ）

「ならば・・・両腕に刺青があるかどうか見せてみる」

そう言われ、彼女は両腕を前に出す。更に、1人の巡査が袖を捲し上げ、腕を警部に見せる。

ヴィータ

「刺青^{いれずみ}なんか無えから！」

警部（クロノ）

「確かに無いな・・・分かった。お前の名前を容疑者リストから外しておく」

ヴィータ

「当たり前だろ・・・！」

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

これで全員が無実を証明出来た。

プルルルル プルル♪

咲

「メール・・・！」

ネス

「『ミッションクリア。全員が疑いを晴らす事に成功』・・・！」

ドクター

「いやゝ、良かった・・・捕まる人も思いの外^{ほか}少なかったし、これ
はいい事だ・・・！」

全員が疑いを晴らした事で私服警備員は普通の状態に戻り、ハンターは通常の3体に戻った。

巡査（ユーノ）

「警部殿。容疑者全員のチェックが終わりました」

巡査（シャリオ）

「どうやら犯人は、彼等の中にはいない様です」

警部（クロノ）

「そうか・・・しかし彼等が誘拐犯でないとすると、一体誰が・・・？」

そして、疑いを掛けられていた逃走者に関する速報がテレビで流された・・・

キャスター

「伊東和葉さんの誘拐事件の続報です。事件の容疑者として挙げられていた『逃走中』の参加者は、この事件との関連性は全く無いという事が分かりました。警察の調べに寄りますと、『逃走中』の参加者の両腕を調べたところ、全員刺青いれずみがあるという証言と一致しなかったという事です。これにより、『逃走中』の参加者全員の疑いは晴れましたが、事件は振り出しに戻りました」

このニュースを小型モニターで見ていた誘拐犯は、逃走者に罪を擦り付けるつもりだったのか怒りを露にする・・・

レッド

「あともう少しで、残り100分になるぞ」

シグナム

「やっとな分の1か・・・」

デイジー

「あと100分も牢獄にいなきゃいけないの？暇過ぎる・・・」

アミティ

「これ復活とか無いのかな？」

スネーク

「本家では最近そういうのは無いみたいだから・・・恐らく無いと考えていいだろう・・・」

ワルイージ

「冗談だろ！？俺様全然活躍してねえのに！」

シャマル

「まあ、無いのが普通なんでしょうね・・・」

スネーク

「そうだな・・・そういったミッションが発動されて、クリアして復活する者が現れたのなら、それは奇跡と言ってもいいだろう・・・」

アミティ

「じゃあ、あたし達はその奇跡が起きるのをただ黙って信じるしかないの？」

レッド

「早い話がそうだな・・・」

ワルイージ

「ちくしょう・・・！まだ生き残っていれば、かなりの活躍が出来た筈なのによ・・・！ハンターの野郎・・・！」

デイジー

「私だつて50万円を持って帰れてた筈なのに・・・悔しい！」

シグナム

「仕方あるまい・・・運命には逆らえないものだ・・・結果は結果として受け入れるしかない・・・今あたし達は、誰かが逃げ切るのを祈るのみだ・・・！」

シャマル

「そうね・・・誰かが残ってくれば、それは私達の勝利も同然なものね・・・」

レッド

「いや・・・それ以前に、ここにいる俺達は敗北者だから・・・」

深夜のショッピングモールでの逃走中。賞金は間もなく30万円になろうとしている。

そして次回、誘拐犯がイベント関係者に最初の要求を申し出す！？

ミッション2終了！（後書き）

ここまで、レッド・ワルイージ・アミティ・シグナム・デイジー・シャル・スネークの7人が確保された

残る逃走者は、ルイージ・ドクター・ヤング・ネス・リュカ・ロイ・アルル・咲・えりか・祈里・ヴィータ・スバル・キャロの13人

そして次回、誘拐犯からの要求に逃走者達が振り回される！？

最初の要求（前書き）

どうにか濡れ衣を晴らせた逃走者達

しかし、ここから誘拐犯が彼等を攪乱かくらんしていく・・・

最初の要求

> i 2 9 2 3 1 — 2 0 9 6 <

深夜のショッピングモールでの逃走中・・・

50分が経過し、賞金は30万円を超えている。逃げ切れば90万円だ。

現在エリアでは、3体のハンターが残る13人の逃走者を搜索している。彼等に捕まれば、賞金は0円だ。

えりか

「今どのくらいだろう、賞金・・・おつ・・・！30万円超えてる・・・！あと30分くらいで目標の50万円だ・・・！」

自首狙いのえりか。5階の駐車場に身を潜め、その時を静かに待つ。

ネス

「ボクは絶対に自首はしない・・・！逃げ切って90万円獲って、最高級のバットとグローブとボール買いたいな・・・今持つてるの、使い古しちゃって結構傷んでるからね・・・」

ドクター

「それにしても、スネークが早めに捕まったのには驚いたな・・・上手い事隠れてやり過ごせる様な奴なのに・・・今日の逃走中、何かがおかしいぞ・・・」

ロイ

「この流れだと、次はアルルカスバルか祈里辺りが捕まる気がするな・・・逃げ切れそうな奴が次々と捕まっていってるんだもんな・・・」

ロイに予言された3人・・・的中するのか。

リユカ

「ボク今日すごい長く残ってる・・・！過去2回30分も逃げ切れてなかったのに・・・気が付けば、もう少しで1時間逃げた事になるよ・・・？若しかしたら逃げ切れるかも・・・！これで何か活躍出来れば、文句無いんだけどな・・・」

逃走時間の最長記録を更新中のリユカ。何処まで記録を伸ばせるか。

ヴィータ

「今のところ、近くにハンターはいねえな・・・」

ゲーム開始から殆ど動いていないヴィータ。

ヴィータ

「もう絶対に動かねえからな・・・！これからのミッションも誰かが勝手にやって、そいつはとっとと捕まっちゃえばいいんだよ・・・」

アルル

「ミッションは、兎に角全部やる気持ちで行かないと・・・！自分の為にも、皆の為にも・・・！失敗したら、自分の首を絞めてるもんだからね・・・！」

キャロ

「私達が不利になる様なミッションは、少なくともやらないと・・・
！それが出来なくて、前回全滅になったから・・・」

2人はミツシヨンクリアに闘志を燃やす。

スバル

「りんと響・・・あの2人を超える為にも、あたしはこんな所で捕まっちゃいけない・・・！」

夏木りん及び北条 響を目標に掲げているスバル。

スバル

「周りを良く見て行動し・・・あつ・・・！いた・・・！」

> i 2 9 2 3 3 — 2 0 9 6 <

ハンターを見つけ、一目散に逃げる。

彼女は近くの書店に逃げ込む。

そこには・・・

> i 2 9 2 3 3 — 2 0 9 6 <

山吹祈里がいた・・・

祈里

「あつ・・・スバルさん・・・」

スバル

「祈里・・・隠れて・・・！ハンターがいるから・・・！」

祈里

「ええ・・・？」

2人は雑誌の棚の陰に隠れる。

どうやらハンターは、気付いていない様だ。

スバル

「向こう行つた・・・はあ・・・危なかつた・・・」

祈里

「間一髪ですね・・・」

その頃・・・

伊東和葉の待合室では、警部の立ち合いの元、鑑識が行われていた・
・

すると・・・

城ヶ崎

「何か手掛かりは掴めましたか・・・？」

伊東のマネージャーである城ヶ崎が入ってきた・・・

警部（クロノ）

「あなたは・・・？」

城ヶ崎

「あっ・・・申し遅れました。私、伊東和葉のマネージャーを務めております、城ヶ崎亮一郎と申します・・・警部さん、何としてでも和葉を助けて下さい・・・！お願いします・・・！」

警部（クロノ）

「我々に任せて下さい・・・！必ずや犯人を突き止め、伊東さんを救出します・・・！」

城ヶ崎

「有難う御座います・・・！」

その時、イベント関係者が突然待合室の中に駆け込んできた・・・

イベント関係者

「け・・・警部さん！大変です！」

警部（クロノ）

「どうされました？」

イベント関係者

「楽屋のパソコンに・・・怪しいメールが・・・！」

警部（クロノ）

「・・・！？」

警部は、パソコンが置かれている楽屋に案内された・・・

そして3人が入室する・・・

警部（クロノ）

「おい！怪しいメールって何だ！？」

巡査（シャリオ）

「これです・・・」

・ 巡査は、目の前に置かれているノートパソコンの画面を指差した・・・

警部（クロノ）

「件名は『最初の要求』・・・送信者は・・・『クロノスCHRONOS』・・・

・・・？」

城ヶ崎

「クロノスって・・・まさか・・・！」

・ 何かを思い出したのか、城ヶ崎はポケットから何かを取り出した・・・

警部（クロノ）

「どうしました？」

城ヶ崎

「警部さん、これ・・・！」

・ 彼が差し出したのは、伊東の待合室に残されていた脅迫状だった・・・

警部（クロノ）

「これはいつ・・・？」

城ヶ崎

「イベント開始予定時間の2時間前に、私が和葉を呼びに行ったらこれが・・・」

警部（クロノ）

「『伊東和葉は預かった。妙な真似をせずにこちらの指示に従ってくれば、彼女は無傷で返してやろう。警察に通報したら彼女の命は無いと思え！ クロノス』・・・なるほど・・・このメールは、間違いなく伊東さんを誘拐した犯人からだ・・・！おい！メールを開ける！」

巡査（シャリオ）

「あつ・・・はい！」

・ 巡査は新着のメールを開ける・・・そこに書かれていた内容とは・・・

警部（クロノ）

「『ニユースは見させてもらった。それに伴い、最初の要求を告げる。容疑者としてリストアップされていた逃走中の参加者を、全員鳴海メインプレイスの敷地内から排除しろ！10分だけ待つ。要求に応えなかった場合、伊東和葉の命は無いと思ってもらおう！ クロノス』・・・」

イベント関係者

「『排除しろ』って事は・・・ただ単に建物から追い出せばいいという事でしょうか・・・？」

巡査（シャリオ）

「いえ！考え様によつては『殺せ』とも言ひ換えられます」

警部（クロノ）

「こいつ・・・！伊東さんの命と引き換えに、罪の無い複数の人間の命を奪えというのか・・・！？狂つてやがる・・・！」

城ヶ崎

「一体どうするんですか・・・？」

警部（クロノ）

「・・・」

犯人からの無謀とも言える要求に、その場にいる者全てが困惑する・

しかし誘拐犯は、警察がこの要求に対して不用意に動けない事を分かっていたのだろうか、突然手に握っていた小型リモコンのスイッチを押したではないか・・・

その瞬間・・・

時限装置

> i 2 9 2 3 4 — 2 0 9 6 <

逃走者の腕に付けられた時限装置が起動した・・・

そして、誘拐犯は薄ら笑いを浮かべる・・・

ルイーダ

「えっ……？何これ……？何で光ってんの……？」

ヤング

「何だ……？急に何だよ……？」

突如起動した時限装置に、逃走者達は戸惑いを隠せない。

と、その時……

ブルルルル　ブルル

咲

「あっ……メールかな……？」

ドクター

「ミッシヨン3……！えっと……」

アルル

「『誘拐事件の犯人により、君達の腕に付けられた時限装置が起動した』……えっ……？さっきから光ってるこの事……？」

ネス

「『残り85分までに装置のコードを全て切断しなければ強制失格となる』……きょ……強制失格！？」

ロイ

「強制失格！？おい、ふざけんなよ！何て事してくれんだよ！」

えりか

「『コードを切断するには、進入可能なテナントの商品棚にあるニッパーが必要だ』……!」

ヤング

「『急ぎたまえ!』……ニッパー?」

MISSION? 時限装置を解除せよ!

誘拐犯の手によって、逃走者の腕に付けられた時限装置が機動。これにより逃走者達は、残り85分に強制失格となってしまう。それを免れるには、進入可能になっているテナントの商品棚から赤・青・黄・緑・紫のニッパーを探し出し、全てのコードを切断し、装置を解除しなければならない。但し、ニッパーを店外へ持ち出すと万引き行為になるので、持ち出せば無条件で強制失格となる。

咲

「と言う事は……店の中に入って探さなきゃいけないの?」

ヴィータ

「しかも、ニッパーを店外に持ち出すとか……ふざけんじゃねえよ!」

ルイージ

「強制失格……!?!うわわわ……じゃあ、否が応でも行かなきゃいけないんだ……怖過ぎる……!」

強制失格を免れる為に、進入可能なテナントへ移動を始める逃走者達。

しかし、エリアには3体のハンター。動けば見つかる危険が高まる。

強制失格まで、およそ9分。

無事に解除する事は出来るのか!?

最初の要求（後書き）

誘拐犯の思惑により、強制失格の危機に曝^{さら}された逃走者達
果たして、この危機から脱する事は出来るのか！？

強制失格を免れる！（前書き）

誘拐犯によって、危機的状況に追い込まれた逃走者達

時間があまり無い中、クリア出来るのか！？

強制失格を免れる！

逃走者達は、進入可能なテナントの商品棚に置かれているニッパでコードを切断し、时限装置を解除しなければ、残り85分に強制失格となってしまふ。

ドクター

「残り85分までと言う事は・・・あと10分も無いじゃないか！これは急がないと！」

ロイ

「これは相当動く事になるな・・・」

エリアには3体のハンター。ミッションに動けば、遭遇する危険が高まる。

書店に潜んでいるスバルと祈里。

スバル

「『進入可能なテナントの商品棚』って事は、この店も例外じゃないよね・・・？」

祈里

「でも、本を専門に売ってるこの店にニッパなんてあるんですか・・・？」

スバル

「探してみる価値はあると思うけど・・・」

2人は手分けして、書店の中を搜索する。

えりか

「もう最悪だよ……！また下の階に移動しなきゃいけないじゃん……！」

5階駐車場からまた動くえりか。

えりか

「腕見せに行った後、あのまま1階に残ってれば良かったな……」

「

今頃後悔しても、もう遅い……

リュカ

「100円ショップにありそうな気がするな……」

100円ショップに近づくリュカ。

リュカ

「あつ……自首用電話がある……もう自首しちゃおうかな……」

「？」

自首用電話から申告すれば、その時点の賞金を獲得してゲームからリタイアとなる。

リュカ

「いや……！逃げ切るって決めたんだ……！自首はしない……」

自首よりもニッションをクリアする事に決めた様だ。

リュカ

「ここに絶対ニッパーある筈なんだけ……うわぁっ！」

キャロ

「何……!？」

先客がいた……

キャロ

「リュカ君……?」

リュカ

「ニッパー探してるの?」

キャロ

「うん……でも全然見つかんなくて……」

リュカ

「じゃあ、一緒に探そう……!早く探さないと、ハンターに見つかるかもしれないから……」

キャロ

「そうだね……早いところ1本は切つとかないと……!」

2人は協力して、ニッパーを探す。

一方、書店でニッパーを探している2人は……

祈里

「あれ・・・？やっぱりここには無いのかな・・・？」

スバル

「祈里！あつたよ！」

祈里

「えっ？嘘？」

スバルに駆け寄っていく祈里。

祈里

「あつたんですか？」

スバル

「これ・・・青のニッパー・・・雑誌に挟まってた」

祈里

「ざ・・・雑誌にですか・・・？」

スバル

「何でだろうね・・・？そんな事より、早く切ろう・・・！」

祈里

「あっ・・・そうですね」

2人は時限装置の青のコードを切る。

スバル

「あと4本・・・」

祈里

「スバルさん、あんまり時間も無いんで急ぎましょう・・・！」

スバル

「そうだね・・・！」

2人はニッパを置いて店を後にする。

一方こちらも・・・

リュカ

「あつた！」

キャロ

「ホントに？」

リュカ

「緑のニッパあつたよ！」

キャロ

「切ろう、切ろう！」

2人は時限装置の緑のコードを切る。

キャロ

「早く次行こう！」

2人も次のニッパを探しに行く。

アルル

「食品館・・・ここにある筈だけど・・・」

食品館に進入する魔導師の卵・アルル。

アルル

「広いから見つかりにくそう・・・あれ・・・？」

視線の先に・・・ハンター・・・

アルル

「ハンターいるじゃん・・・動くに動けないよ・・・」

ハンターがいて、思う様に探せない。

そのハンターが向かう先に・・・

> i 2 9 5 1 2 — 2 0 9 6 <

ニッパーを探している咲の姿が・・・

咲

「何処なんだろう、ニッパー・・・この店に絶対あるよね・・・？」

咲はハンターの接近に気付いていない。

ピーーーーーービュビュッ

LOCK ON HYUGA

そして、見つかった・・・

咲

「えっ・・・？うわぁー！何でいるのっ！？」

> i 2 9 5 1 3 — 2 0 9 6 <

ハンターを見つけ、一目散に逃げる咲。しかし、ハンターとの距離が徐々に縮まっていく。最早、逃走不可能・・・

咲

「やぁぁっ！」 ポンッ

> i 2 9 5 1 4 — 2 0 9 6 <

咲

「最悪だー！1本も切れて無いじゃん！」

ルイージ

「『1階食品館付近にて日向咲確保』・・・！」

ネス

「ええっ！？ソフトボール部のエースが、こんな早くに確保！？嘘だ！」

ヴィータ

「これもあれだな・・・ミッションで動き過ぎた故の結果だな・・・

」

ヤング

「あんまりゆつくりしてられねえな・・・」

電器館でニッパーを探しているヤングリンク。

ヤング

「何処かにある筈だ・・・！ん・・・？」

店の携帯電話売り場に、怪しい物を見つけた。

ヤング

「この紫色のつて・・・あっ！」

紫のニッパーだ・・・

ヤング

「こんな所に紛れてやがった・・・！」

彼は時限装置の紫のコードを切る。

ヤング

「OK・・・！確か店外に持ち出しちゃいけないんだっとな・・・誰かと会ったら教えてやるか・・・！」

彼はニッパーを置いて店を後にする。

同じ頃、食品館を探していたアルル。

アルル

「あつた！」

生活用品の商品棚に黄色のニッパを見つけた。

透かさず彼女は、時限装置の黄色のコードを切る。

アルル

「黄色切断つと・・・！」

ネス

「あつ・・・アルル」

そこへ、ネスが合流。

アルル

「黄色のニッパあつたよ！」

ネス

「ホント！？じゃあ、切つてよ！」

彼も黄色のコードを切断。

ネス

「まだ1本切っただけか・・・どうしよう、間に合うかな？」

アルル

「そつだ！携帯で誰か知ってたら聞こう！」

ネス

「あつ、そうか！誰かに聞こう！誰が知ってるかな？」

2人は情報収集の為に、電話を掛ける。

ピロロロロロロ」

スバル

「電話だ・・・アルルから・・・もしもし？」

アルル

「スバル？ニッパ―見つけた？」

スバル

「2階の書店に青のがあった」

アルル

「書店に青のニッパ―ね」

祈里

「スバルさん！緑のニッパ―ありました！」

スバル

「あっ！それと今、100円ショップで緑の見つけた」

アルル

「100円ショップに緑・・・今のところはその2つだけ？」

スバル

「そうだね・・・そっちは何か収穫あった？」

アルル

「えっとね・・・ボクの方は、食品館の生活用品の棚に黄色のを見つけたよ」

スバル

「食品館に黄色か・・・分かった、有難う！」

2人は電話を切った。

その間に、スバルと祈里は緑のコードを切断した。

祈里

「これで2本切りましたね」

スバル

「祈里・・・今アルルから、食品館の生活用品の所に黄色のニッパ
ーがあつたっていう情報をもらったよ」

祈里

「ホントですか？じゃあ、早速行きましょう！」

2人は1階の食品館を目指す。

ヤング

「あつ・・・誰がいるな」

ヤングリンクが誰かを見つけた。

ルイージ

「何処だよ・・・？」

ルイージだ・・・

ヤング

「ルイージ！」

ルイージ

「あっ・・・ヤングリンクだ・・・何？」

ヤング

「電器館の携帯売り場に紫のニッパ―見つけたんだ」

ルイージ

「ホントに？有難う、教えてくれて！」

ヤング

「こういう時はお互い様だ！」

ヤングの情報を元に、ルイージは電器館を目指す。

ルイージ

「あれ？あそこにいるの誰だ？」

その彼の視線の先にいたのは・・・

ロイ

「何処にあるんだ・・・？」

ニッパ―を探しているロイだ・・・

ルイージ

「ロイ、どうしたの？」

ロイ

「おお、ルイージか・・・ニッパーが何処にも無えんだけど・・・」

ルイージ

「さっきヤングリンクが、携帯売り場に紫のニッパーを見つけたって言うてたよ」

ロイ

「マジか！？よしっ、行くか」

ルイージ

「あれ？」

ルイージが疑問の声を上げる。

ロイ

「ん・・・？どうした？」

ルイージ

「ねえロイ・・・何で赤のコード切れているの？」

何と言う事か、既にロイは赤のコードを切断していたのだ。

ロイ

「ああ・・・空気清浄機売り場にあっただよ、赤のニッパー・・・」

「

ルイージ

「ええ！？ホントに!？」

ロイ

「ホントだ・・・そこで、ドクターのも切ってやったよ。まあ、あいつとはそのまま別れちゃったけどな・・・」

ルイージ

「じゃあさ・・・早く教えてあげてよ、紫のニッパの事」

ロイ

「そうだな」

その後、逃走者の間で情報交換が行われた。

その結果、えりかとヴィータの2人は残り3本、それ以外の者は残り2本となった。

ヴィータ

「残ってる3つは全部1階かよ・・・何でこんなに動き回らなきゃいけないんだよ・・・!」

えりか

「あとは電器館と食品館か・・・ちゃんと見つかるかな・・・?」

1歩出遅れている2人は、焦りを隠せない。

その頃、赤と紫のコードのみを残すスバル・祈里・リュカ・キヤロ・アルル・ネスの6人は、電器館にて2つのニッパを探している。

しかし、大勢で固まればハンターに見つかる危険が高まる。

祈里

「赤のニッパ―あつた!」

リュカ

「紫のニッパ―だ!」

それぞれのニッパ―を発見し、6人が合流。そして、2本のコードを切断していく。

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

これにより、6人が一斉にクリア。

キャロ

「これで安心ですね」

ネス

「やっぱり協力って大事だね」

一方、100円ショップで緑のニッパ―を探しているヤングリンク。

ヤング

「聞いた情報だと、この中にあるんだけどな。・・・」

> i 2 9 5 1 5 — 2 0 9 6 <

しかしそこに、ハンターが接近・・・

ヤング

「あれ・・・?何処だ・・・?全然見当たら・・・うわあ!ハンターじゃねえかよ!」

見つかった・・・

ヤング

「速え！ハンターマジで速え！」

一目散に逃げるヤングリンク。しかし、彼がハンターを振り切れる訳が無い。最早、逃走不可能・・・

ヤング

「ぎゃああゝ！」 ポンッ

> i 2 9 5 1 6 — 2 0 9 6 <

ヤング

「速過ぎだろ、ハンター！マジかよゝ！？最悪だ・・・！」

ブルルルル プルル♪

えりか

「えっ・・・？またメール・・・？」

ロイ

「ううわっ！『2階100円ショップ付近にてヤングリンク確保、残り11人』・・・！」

ルイージ

「ちょ・・・！100円ショップって、今向かおうとしてた所じゃん・・・！危ないじゃん・・・！」

ドクター

「と言う事は・・・先に書店に行った方がいいな・・・」

1階の電器館に入っていくヴィータ。彼女はこのミッション以外では殆ど動いていない。

ヴィータ

「ニッパーを外に持ち出したら失格とかふざけてるだろ・・・！何でこんなミッションの為に、あたしは振り回されなきゃならねんだよ・・・！腹立つ・・・！」

ニッパーを外に持ち出せない事に憤慨している様だ。

ヴィータ

「確かここだよな、赤のニッパーって・・・おっ！あつたぜ！」

> i 2 9 5 1 7 — 2 0 9 6 <

赤のニッパーを見つけたヴィータ。

そこへ、えりかが合流。

えりか

「あつ！赤のニッパーあつたんだ！早く切ろうよ！」

ヴィータ

「お前ふざけんな！あたしが先だ！あたしが切るまで待つてろ！」

ヴィータは時限装置の赤のコードを切る。続けてえりかも赤のコードを切断した。

これで、まだ装置を解除していない者は全員残るコードが2本となった。

えりか

「あれ？あなたあたしと残ってるコード一緒なんだ？このまま一緒に行動した方がいいんじゃない？」

ヴィータ

「それもそうだな」

えりか

「じゃあ、急いで黄色と紫を探そう。時間も無いし」

2人は残る2つのニッパーを探す為に、共に行動する事に。

強制失格まで、間もなく3分20秒。

残る5人の逃走者の運命は！？

強制失格を免れる！（後書き）

強制失格のタイムリミットが迫る5人

全てのコードを切断出来るのか！？

ミッション3終了！　しかし・・・（前書き）

まだ時限装置を解除していない5人・・・

残された時間は3分余り・・・間に合うのか！？

そして、誘拐犯が伊東に危害を加える！？

ミッション3終了！しかし・・・

現在時限装置を解除出来ないのは、ルイージ・ドクター・ロイ・えりか・ヴィータの5人。その内、前半の3人は青と緑のコードを、後半の2人は黄と紫のコードを残している。

ロイ

「ここだな、書店は・・・」

青のニッパが置かれている書店に辿り着いたロイ。

ロイ

「確かドクターとルイージも青を切ってなかったんだよな・・・ハンターから身を隠しつつ、2人が来るまでに見つけておくか・・・」

エリアには3体のハンター。大勢で集まれば、それだけ見つかるリスクも高くなる。

> i 2 9 9 1 3 — 2 0 9 6 <

一緒に行動しているえりかとヴィータ。

えりか

「あっ！紫のニッパあった！」

携帯売り場に置かれている紫のニッパを見つけた。

えりか

「早く切ろう！もう3分切ってる！」

ヴィータ

「オイお前！あたしが先だと何度も言ってるだろ！」

えりか

「ええ〜・・・？もう分かったよ〜・・・」

嫌々ながらも、ヴィータの時限装置の紫のコードを切ってあげるえりか。続けて彼女自身も紫のコードを切断。

ヴィータ

「よしっ・・・！あとは黄色のだけか・・・！」

えりか

「確か食品館の生活用品売り場だったよね？」

2人は黄色のニッパが置かれている食品館を目指す。

ロイ

「あつた・・・！」

ロイも青のニッパを発見。

そこへ、ドクターマリオとルイージが合流。

ドクター

「ロイ、あつたか？」

ロイ

「ああ」

ルイージ

「良かった……早く切っちゃおう……！」

3人は時限装置の青のコードを切る。

ドクター

「これであとは緑だけか……100円ショップだったな、確か……」

ルイージ

「早いところ行って、解除しよう……！」

100円ショップへと移動しようとする3人。

しかし、近くにいたハンターに見つかった……

ロイ

「ヤベエ！ハンターだ！」

ルイージ

「ええー！？」

ドクター

「逃げろ、逃げろ！」

ハンターに追われ、一目散に逃げる3人。

> i 2 9 9 1 4 — 2 0 9 6 <

建物の角を利用し、ハンターの追跡を上手くかわせた様だ。

しかし、3人は思い思いの方向に逃げた為、散り散りになってしまった・・・

ドクター

「くそ・・・あの2人大丈夫か・・・？」

ロイ

「ハンターの野郎・・・！マジで空気読めてねえな・・・！」

ルイージ

「もう怖いよ・・・これじゃ戻れないよ・・・」

ハンターに追われ、思う様にニッパに近付けない。

> i 2 9 9 1 5 — 2 0 9 6 <

その頃、えりかとヴィータの2人は食品館に置かれた黄色のニッパを探していた。

えりか

「生活用品のコーナーってここの筈だよね？何で無いの？」

ヴィータ

「大体生活用品って抽象的なんだよ・・・何かの近くだとか、そういう伝え方してくれねえと・・・」

えりか

「ホントだよな。棚が高さも奥行きもあるから、探すのが面倒だよ・

・・」

ヴィータ

「探してる間に見つかったら……ん……？」

何かを見つけたヴィータ。

ヴィータ

「あの黄色いのって……あっ！ニッパ―見つけたぜ！」

黄色のニッパ―を発見。

えりか

「おお！すごい、すごい！」

ヴィータ

「さて、切るか」

2人は時限装置の黄のコードを切る。

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

これで、2人も強制失格を免れた。

えりか

「はあ……これで幾分楽になった……」

ヴィータ

「もう強制失格のミッションはゴメンだぜ……！」

> i29916 — 2096 <

ドクター

「あと1分半か・・・不味いぞ、これは・・・！急がないと・・・！」

まだ时限装置を解除していない3人。間に合うのか。

ロイ

「ここが100円ショップだな・・・」

先に100円ショップに到着したロイ。

ロイ

「あの2人が来るかどうか・・・もし間に合わなかったら、申し訳ないが見捨てるしかなさそうだな・・・」

ルイージ

「ハンターいない・・・？音が漏れて全然気配が感じられない・・・」

「

ゲームセンターに逃げ込んだルイージ。ゲーム機の音でハンターの気配に気付きにくくなり、その恐怖でなかなか前に進めないでいる。

ルイージ

「誰でもいいから、近くを通って・・・これじゃ、安心して外に出れない・・・」

ドクター

「よしっ、着いたぞ・・・！」

ドクターマリオが100円ショップに辿り着いた。

ロイ

「おお、ドクター・・・無事だったか・・・」

ドクター

「まあな・・・あれ？ルイージは何処だ？」

ロイ

「いや、まだ来てねえんだよ・・・」

ドクター

「あいつまさか、何処かでハンターに怯えて動けなくなってるんじゃないのか・・・？」

ロイ

「マジかよ・・・？あと1分ぐらいしか無いぞ・・・？」

ドクター

「仕方ない・・・自分がルイージを連れて来る・・・！お前はニッパーを見つけておいてくれ・・・！」

ロイ

「はあ・・・！？お前正気か・・・！？もし捕まったらどうすんだよ・・・！？」

ドクター

「大丈夫だ、必ず連れて来る・・・！」

そう言い残し、ドクターマリオはルイージを探しに店を飛び出す。

ロイ

「必ずだぞ！必ずルイージと一緒に戻って来いよ！」

強制失格まで、とうとう1分を切ってしまった・・・

ドクター

「ルイージの奴、何処行つたんだ・・・？1分切ってるんだぞ・・・？何処で道草食つてんだ・・・！」

ルイージ

「どうしよう・・・？時間無いのに、怖くて全然動けないよ・・・」

ゲームセンターの出入口で1人怯えている永遠の2番手・・・

と、そこへ・・・

ドクター

「いた、いた！」

ルイージ

「へっ・・・？」

ドクター

「お前何してんだよ、ここで・・・！？早くしないと、強制失格になるぞ・・・！」

ルイージ

「わ・・・分かってるよ・・・！分かってるけどさ・・・怖いんだ

もん・・・!」

ドクター

「ロイが待つてくれてるから、急ぐぞ!」

ルイージ

「う・・・うん!」

ロイの許へ無我夢中で走る2人。

> i 2 9 9 1 7 — 2 0 9 6 <

強制失格まで30秒を切った・・・間に合うのか。

ロイ

「来ねえ・・・全然来ねえぞ・・・あの2人、ここで終わりか・・・?
」

ドクター

「ロイ!」

ロイ

「・・・!?!」

ドクター

「ルイージ連れて来たぞ!」

ロイ

「出来たぞ、ドクター!」

ルイージ

「2人ともゴメン……！行きたい気持ちはあったんだけど……
どうしても怖くて……」

ロイ

「もういいって……！そんな事より、早く切っちゃおう！マジで
時間無えから！」

ドクター

「OK……！」

3人は時限装置の緑のコードを切断した。

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

これで、全員がクリア。

ロイ

「よっしゃ！クリアだ！」

ドクター

「ギリギリセーフと言ったところだな……！」

ルイージ

「はあ……危なかった……もうダメかと思ったよ……」

ブルルルル プルル」

キャロ

「メール来た……！ミッション結果だ……！」

アルル

「おお！『ミツシヨンクリア。全員強制失格を免れた』！」

リユカ

「誰も強制失格になってないって事か・・・良かった〜・・・」

スバル

「それでも残りは11人か・・・前回同様捕まるペースが速いな〜・・・」

ネス

「ソフトボール部のエースの咲が、あんなに早く捕まったのには吃驚だよ・・・」

祈里

「逃走成功の候補がどんどん捕まってる・・・今日の逃走中、何かがおかしい・・・」

一方、時限装置を作動させた誘拐犯は、ノートパソコンの画面を見つめていた・・・

そこには、いくつものタイマーが表示されていた・・・しかし、それらには全て『ERROR』の文字が表示されていた・・・

そう・・・逃走者達が時限装置を解除した為、タイマーが作動しなくなってしまったのだ・・・

この事態に誘拐犯は、先程よりも更に強い怒りを露にする・・・

すると誘拐犯は突然立ち上がり、伊東が閉じ込められている部屋へ足を運ぶ・・・そして、部屋のドアが勢いよく開けられる・・・

そこには、極度の恐怖と不安に駆られて、手足を縛られたままぐったりとしている伊東和葉の姿があった・・・

伊東

「ん・・・ん・・・うん・・・うん・・・はっ・・・！」

虚ろな顔をしていた彼女は、ピエロの面を被り黒い布を羽織った誘拐犯の姿を目視するや否や、恐怖のあまり小さな悲鳴を上げ、後退りした・・・

伊東

「な・・・何・・・？まさか・・・私を殺すつもり・・・！？」

???

「さっきも言った筈だ・・・君が妙な真似さえしなければ、命を奪いはしないと・・・」

伊東

「じゃ・・・じゃあ、何で入ってきたの・・・！？」

???

「そろそろ君に教えなくてはいけないと思ったからね・・・」

伊東

「お・・・教える・・・って・・・？」

???

「何故今夜、君のイベントが中止になってもらわなければならなかったのか……」

伊東は固唾を吞んで、誘拐犯の話に耳を傾ける……

???

「その目的は……3人のボスの解放だ……」

伊東

「3人のボスの……解放……?」

???

「自分は、とある事件によって不当に逮捕されたある3人のボスに従っていた元部下だ……そして自分は日本政府に、その3人の身柄と君とを交換してもらう様に要求している……」

伊東

「ちょ……ちょっと待ってよ!それって……何の罪も無い私に、刑務所に入れって言っの!?!」

???

「あの3人が自分の許^{もと}へ帰って来てくれるならば、誰を犠牲にしたって構わない……例えばそれが、今注目されている人気アイドルだとしても……」

伊東

「酷い、あなた……!そんな事の為に、私をこんな目に……!」

???

「だが向こうは、自分の要求に全くと言っていいほど返事を出して来ない・・・」

伊東

「当たり前でしょ！？そんな要求に、一体政府の誰が応じると思ってるの!？」

???

「それでも諦めん・・・あの3人を返してくれるまでは・・・だからそれまで・・・」

そう言うと、誘拐犯は伊東に歩み寄る・・・

伊東

「・・・!？」

???

「君にはもう暫くの間眠^{ひま}つていてもらうよ・・・」

すると誘拐犯は、睡眠薬をたっぷりと染み込ませたハンカチで伊東の鼻と口を覆う・・・

伊東

「うつ・・・!」

伊東は全く抵抗出来ず、そのまま眠りに就いてしまった・・・

???

「待っていて下さい・・・もう少しの辛抱ですから・・・」

3人のボスに言い聞かせる様にそう呟き、誘拐犯は部屋を後にする。
・

スバル

「それにしても、誘拐事件の犯人は何がしたいんだよ？あたし達を犯人に仕立て上げたり、時限装置を作動させたり・・・あたし達に因縁抱いてる訳でもないのにさ・・・おかしいって・・・」

ネス

「誘拐事件が起きたってメールが来てから、どんどんおかしい方向に向かつてる気がするんだけど・・・考え過ぎかな？」

立て続けに起こる不可思議なミッションに、疑問を隠せない。

祈里

「何か要求して来るよね、犯人は・・・絶対に・・・」

キャロ

「高額な身代金とか・・・あるいは、何か声明を出すかもしれない・・・」

アルル

「どのみち嫌な予感がする・・・犯人の思惑通りに、ボク達が動かされてる気がしてならないよ・・・」

リユカ

「いろんな事が起こり過ぎて・・・もうホントに怖い・・・」

見えざる事件の恐怖に、ただならぬ不安を抱く逃走者達・・・

果たして、逃走者達に待ち受けている運命とは一体何なのか!?

ミッション3終了！　しかし・・・（後書き）

残る逃走者は、ルイー・ジ・ドクター・ネス・リュカ・ロイ・アルル・
えりか・祈里・ヴィータ・スバル・キャロの11人

次回、誘拐犯が第2の要求を申し出す！？

そして、逃走者達に降りかかる衝撃のミッションとは！？

第2の要求（前書き）

何とか強制失格を免れた逃走者達

しかし、またしても誘拐犯が要求を申し出る・・・

第2の要求

> i 2 8 3 1 6 — 2 0 9 6 <

ヤング

「くそ……ハンターマジで速えよ……」

牢獄へやって来たヤングリンク。愚痴を零しながら入獄する。

レッド

「しかし今回は、意外な奴がバンバン捕まってくよな……」

デイジー

「ホントね。私、咲は結構残る方だと思ってたのに……」

咲

「……っ！と……逃走中ではこういう事もあるんだよ。私、前回たったの7分半で捕まったんだから……」

シャル

「7分半……！？ソフトボール部のエースのあなたが……！？」

アミティ

「怖いよね、そういうのって……ところでさ、残ってる人で誰が逃げ切りそうかな？」

牢獄の者達は、『逃走中・確保・自首』のボードを見ている。

ワルイージ

「分からねえが・・・意外とリュカ辺りがしぶとく残りそうな気がするんだよな・・・だが、ルイージには早く捕まってほしい・・・！あいつがここまで残っているのには、正直腹が立つ・・・！」

ヤング

「お前酷いな・・・自分が情けない結果だからって・・・」

シグナム

「前回の活躍も考慮すると・・・あたしはスバルが本命だと思うな・・・」

咲

「そう考えると、祈里もそうなるよね・・・」

スネーク

「だが今回は、そういう奴等が真つ先に捕まる傾向にあるぞ・・・見えない魔物が、俺達の逃走成功を阻んでいる様に思えてならない・・・そう考えると、あまり期待しない方がいいのかも知れんな・・・」

デイジー

「でも確か、前回の逃走中は全滅してるんでしょ？2回連続全滅だけは止めてほしいわ・・・」

レッド

「だが、本家ではそれが当たり前になってるって言う噂だぜ？ひよつとしたら、このゲームも・・・」

シャマル

「ネ・・・ネガティブ思考になるのは止めましょう！屹度誰かが逃きつと

げ切ってくれる筈よ！」

シグナム

「そうだな・・・こんな所で嘆いていても仕方が無いからな・・・」

祈里

「それにしても、咲ちゃんがこんな早めに捕まるなんておかしいよ・・・足も早いし、スタミナも抜群の咲ちゃんが折り返しになる前に捕まるって・・・このエリアに不穏な空気が流れてる気がしてならないよ・・・」

ロイ

「人数の減り方が尋常じゃねえよ・・・ハンターが3体とはいえ、油断は禁物だな・・・！」

エリアでは3体のハンターが逃走者を搜索。視界に捉えた逃走者を、見失うまで追跡する。

えりか

「今40万円ぐらいか・・・あともう少して目標の50万円・・・50万円行ったら、すぐ自首しよう・・・！でもな・・・ダイヤルキーが付いてるから、それを解除している間に捕まったら最悪だよ・・・」

自首用電話を使える様にするには、ダイヤルキーを解除しなければならぬ。

周囲の様子を窺う魔導師の卵・アルル・ナジャ。

アルル

「死角から来られない様に、ちゃんと前後左右見張つとか・・・いた・・・！」

遠くにハンターを見つけ、一目散に逃げる。

彼女が逃げた先にいるのは・・・

> i 3 0 0 5 5 — 2 0 9 6 <

ヴィータ

「ん・・・？あいつアルルか・・・？」

ベンチの陰に隠れているヴィータだ・・・

ヴィータ

「嘘だろ・・・！？ハンターいるじゃねえか・・・！」

ハンターの接近に逸早く気づき、すぐさま身を隠す。

ハンターは2人に気付いていない・・・上手くやり過ごせた様だ。

ヴィータ

「おっかねえな、やっぱりハンターは・・・だが、隠れて動かなきゃ平気だ・・・！」

アルル

「もうホントに・・・通路が入り組んでるから、何処から来るか全然予測出来ないよ・・・！」

ルイージ

「怖いってば……兄さん……」

5階の駐車場に身を潜めているルイージ。

ルイージ

「夜中なのに買い物客多いね、このショッピングセンター……何処の駐車場も殆ど埋め尽くされてるし……まるで沖縄のスーパーみたいだよ……」

食品館の冷凍食品売り場にいるスバル・ナカジマ。

スバル

「ここはいいかもしれない……店に入ってくる人も見えるし、死角もしっかりカバー出来るし……ん……?」

誰かを見つけた……

キャロ

「視野が広い所にいた方がいい気がする……」

キャロ・ル・ルシエだ……

スバル

「おい……!キャロ……!」

キャロ

「へっ……?あつ、スバルさん……!」

2人が合流。

スバル

「そっちはどう？今のところ、ハンターが近くに感じる感じはしない？」

キャロ

「大丈夫です、ハイ」

スバル

「そう・・・良かった。あっ・・・あのさ、キャロ・・・」

キャロ

「はい？」

スバル

「まさかとは思っただけどき、ヴィータさんから変な要求の電話来なかった？」

キャロ

「ええ？な、何で知ってるんですか？」

スバル

「やつぱり来てたんだ・・・実はさ、あたしもあつたんだよ。2つ目のミッションの時に、警察連れて来っていう・・・」

キャロ

「そうです、そうです・・・！私もそういった内容でした・・・！」

スバル

「近くにいた癖に、考えられないと思わない？」

キャラ

「ホントですよ。初めてだからって、そんな事が許される筈無いですよ？」

ヴィータ

「もう今度こそ絶対に動かねえからな・・・！ミッションは行きてえ奴が勝手に行きゃいいんだよ・・・！」

後輩からの信頼を大きく損ねている事に気付いてないヴィータ・・・

ドクター

「誘拐犯は、自分達に一体何を求めているんだ・・・？こんな手荒な事ばかりして・・・」

誘拐事件に巻き込まれている事に、未だ動揺を隠せていないドクターマリオ。

ドクター

「次も何か企んでるな、絶対に・・・」

ネス

「あつ・・・！あそこにリュカがいる・・・！」

3階駐車場にやってきたネス。リュカを見つけ、近付いていく。

ネス

「リュカ・・・！」

リュカ

「うええ……！？あつ……ネスか……吃驚させないでよ……
心臓に悪い……」

ネス

「ゴメン、ゴメン……」

2人は車の陰で作戦を練る。

> i 3 0 0 5 6 — 2 0 9 6 <

しかし、そこへハンターが接近……

ネス

「こつちから下に行く方が、結構リスクは低いんだよ……」

リュカ

「うん、うん、うん……」

ネス

「それにもし見つかつても、ここの曲がり角を利用していけば……
」

ピーーーーーービビビッ

LOCK ON NES

LOCK ON LUCAS

見つかつた……

ネス

「ん・・・？ヤバい！ハンター来たよ！」

リユカ

「ええゝ！？嘘ゝ！」

2人は散り散りになって一目散に逃げる。

ハンターが視界に捉えたのは・・・

>i30057—2096<

ピーーーーー

LOCK ON NESS

ネスだ・・・

ネス

「わああゝ！こっち来たゝ！」

一目散に逃げ続けるネス。しかし、ハンターとの距離が徐々に詰められていく。最早、逃走不可能・・・

ネス

「にゃあゝ！」 ポンッ

>i30058—2096<

ネス

「捕まった……リユカ大丈夫かな……？」

リユカ

「ヒュ……ヒュ……怖いよ……」

プルルルル プルル♪

えりか

「メール来たよ……」

ドクター

「『3階駐車場にてネス確保』……！」

リユカ

「『残り10人』……うわぁ、ネス捕まっただ……ゴメン、ボクのせいで……」

ルイージ

「前回あんなに頑張ってたネスが、ここで確保……！？」

アルル

「やっぱり今回の逃走中、何かがおかしくなってるよ……」

一方、イベントの楽屋では……

巡査（シャリオ）

「ん……？あつ！警部！クロノスを名乗る者からの新着メールが

届いています！」

そのメールの件名には『第2の要求』と書かれていた・・・

警部（クロノ）

「開ける！」

巡査（シャリオ）

「はい！」

巡査は新着のメールを開ける・・・そこに書かれていた内容とは・・・

・

イベント関係者

「『最初の要求はなかった事にしてもらおう。それに伴い、新たな要求を告げる。伊東和葉を返してほしくば3億円を用意しろ！』・・・

・？」

城ヶ崎

「さ・・・3億円！？そんな・・・無茶過ぎる！」

イベント関係者

「『なお、現金の受け渡しには逃走者を指名する。場所は鳴海メイ
ンプレイスの屋上駐車場だ』・・・」

警部（クロノ）

「こいつ・・・今度は身代金の要求か・・・！」

城ヶ崎

「しかし、屋上駐車場ってかなり見晴らしがいい所ですね？何で

そんな所に・・・」

警部（クロノ）

「かなり大胆な行動に出ましたね・・・恐らく、共犯者がいるのか
もしれません・・・おい！今すぐに現金3億円を用意しろ！それと、
屋上駐車場に警備を就かせろ！」

巡査（シャリオ）

「はい！」

誘拐犯からの新たな要求に^{あわただ}遽しくなる楽屋内・・・

そして、このメールを送った誘拐犯は謎のペンダントを握り締めて
いた・・・

ゲームマスター

「・・・」

1億円の入った3つのジュラルミンケースが用意されている様子を
モニター越しに見ているゲームマスター・・・

突然、画面をスライドさせる・・・

するとそこには『RESET THE PRIZE』の文字が・・・

ゲームマスターはそれをタッチする・・・

その瞬間、屋上駐車場に賞金単価減額装置が設置された・・・

プルルルル プルル」

ロイ

「うお！？何だ！？」

メールだ・・・

ヴィータ

「来たよ・・・ミッション4・・・」

スバル

「『誘拐犯が被害者の身柄と引き換えに3億円を要求』・・・はあ！？3億円！？何て図々しい誘拐犯なんだよ・・・！」

ルイージ

「『誘拐犯は、君達逃走者を現金の受け渡しに指名した』・・・ええ？何で？」

ドクター

「『残り60分までに、宝くじ売り場に用意された3つの現金入りジュラルミンケースを』・・・」

祈里

「『屋上駐車場に設置された賞金単価減額装置に運ばなければ』・・・」

アルル

「『運べなかった数に応じて、賞金単価を減額する』……！1秒100円じゃなくなるって事……！？」

MISSION？ 賞金単価減額を阻止せよ！

伊東和葉を救う為に、宝くじ売り場前に用意された3つの現金入りジュラルミンケース。残り60分までに3つ全てを、ゲームマスターによって、屋上駐車場に設置された賞金単価減額装置に運べなければ、運べなかったジュラルミンケースの数に応じて、それ以降の賞金単価が減額されてしまう。

3つ全て運べれば、賞金単価は100円のままで、逃げ切った場合の賞金も90万円をキープ出来る。

2つしか運べなければ、賞金単価は50円となり、逃げ切った場合の賞金は72万円に減額される。

1つしか運べなければ、賞金単価は10円となり、逃げ切った場合の賞金は57万6000円に減額される。

1つも運べなければ、賞金単価は0円、つまり残り60分以降賞金は増えず、逃げ切った場合の賞金は54万円に減額される。

えりか

「ええ〜！？お金減っちゃうの！？不味過ぎるでしょ！」

リユカ

「また1階の方・・・移動大変だよ、これ・・・」

キャロ

「54万円でもいい様な気はするけど・・・でも多くもらえるに越した事は無いし・・・難しいな・・・」

エリアには3体のハンター。ミッションに動けば、見つかる危険が

高まる。

賞金単価減額まで、およそ14分。

逃走者達は現状を守る事が出来るのか！？

第2の要求（後書き）

逃走者に降りかかった賞金減額の危機

ミッションに動く者は現れるのか！？

賞金単価減額阻止へ！（前書き）

誘拐犯によって、現金の受け渡しに指名された逃走者達

要求通り、無事に現金を届けられるのか！？

賞金単価減額阻止へ！

残り60分までに、現金入りジュラルミンケースを屋上駐車場の賞金単価減額装置に運ばなければ、その数に応じて賞金単価が減額されてしまう。

ロイ

「賞金単価が減るって事は、満額の賞金も当然減る訳だよな・・・これはヤバいぞ・・・！」

キャロ

「やっぱりやろう・・・！皆の為に、賞金はキープしとかないと・・・！」

祈里

「これも協力し合ってクリアしないと・・・！」

ミッションクリアの為に、動き出す逃走者達。しかし、エリアには3体のハンター。動けば、見つかる危険が高まる。

アルル

「えつと宝くじ売り場・・・あつ、すぐそこだ・・・！」

偶然宝くじ売り場の近くにいたアルル。このミッションも、積極的に参加する様だ。

アルル

「すみません！」

巡査（グリフィス）

「お前は・・・あの時の・・・」

アルル

「このトランク・・・」

巡査（ヴァイス）

「持って行ってくれるのか？」

アルル

「勿論ですよ。だって、ボク達が受け渡し人なんでしょ？」

巡査（グリフィス）

「じゃあ、1つを頼む」

アルルは巡査から、現金入りジュラルミンケースを受け取る。

アルル

「うわっ、重っ！これを屋上駐車場まで！？これはまた重労働だ・・・」

巡査（ヴァイス）

「無事に届けてくれよ！」

アルル

「は・・・はい！」

ジュラルミンケースの重さはおよそ13kg。持ったまま移動するのは、かなりのリスクを伴う。

ミッションへ向かうドクターマリオ。

ドクター

「宝くじ売り場だったな・・・と言う事は、あそことは別の東口か・・・」

彼が身を隠しているベンチの下には・・・

ドクター

「うおお・・・！？あつ・・・何だお前か・・・」

ヴィータ

「な、何だよ？」

ヴィータだ・・・

ドクター

「オイお前、ミッション行くのか？」

ヴィータ

「チエツ！」

ドクターマリオの何気無い問いに、ヴィータは突然舌打ちをし・・・

ヴィータ

「お前なあ！何度も同じ事言わすんじゃねえよ！行かねえつつってんだろ！」

ドクター

「『何度も』って・・・今初めて聞いたんだが・・・と言うか、あ

んまり大きな声出すな．．．！ハンター来るぞ．．．！」

駐車場に潜んでいる、お馴染みの2人は．．．

ルイージ

「また1階に行つて戻らなきゃいけないミッションじゃん．．．もう誰かやって．．．ボク、ホントにもう無理．．．」

リュカ

「ネスの分も頑張りたいけど．．．怖いよ．．．」

ハンターへの恐怖心が拭えず、動けない．．．

えりか

「賞金単価が変わるタイミングで．．．自首しよう．．．！その時には、もう50万円超えてるし．．．それぐらいあれば十分だよ．．．！」

えりかは早くも、自首に心が傾いている様だ。

現金入りジュラルミンケースを運んでいるアルル。

アルル

「さっきの袋に比べたら軽いけど．．．それでも十分重いつて、これは．．．！」

> i 3 0 5 4 4 — 2 0 9 6 <

しかし、彼女が向かう先にハンター．．．

アルル

「これは、本当に大変だよ・・・曲がり角から現れたら最悪だよね・・・」

そう言いながらも、警戒心無く進んでいく。

ピーーーーーービビビッ

LOCK ON ARLE

そして、見つかった・・・

アルル

「へっ・・・？ええっ！？ハンターじゃん！」

ジュラルミンケースを手放し、一目散に逃げるアルル。しかし、ハンターとの距離が徐々に縮まっていく。最早、逃走不可能・・・

アルル

「わあっ！」 ポンッ

> i 3 0 5 4 5 — 2 0 9 6 <

アルル

「あんなの・・・あんなの狡いずるよ・・・！もう・・・やっとの思いで1フロア上がってきたのに・・・！」

前回に引き続き、ハンターの前にばたんきゅ・・・

スバル

「ええ〜！？アルル捕まった！」

キャラ

「あのアルルさんが！？嘘でしょ！？」

ロイ

「マジでか・・・！俺、こいつ結構最後の方まで残ってんだけどな・・・」

ヴィータ

「これもミッションに参加した故の結果だな・・・ホントに、どいつもこいつも好感度気にしやがって・・・！」

祈里

「あつた！あれだ！」

宝くじ売り場に辿り着いた祈里。

祈里

「あれの事だね・・・！すみません！そのトランクを・・・！」

巡査（グリフィス）

「お前は・・・あの時の・・・」

巡査（ヴァイス）

「持って行ってくれるのか？」

祈里

「はい！私が、これを屋上まで届けます！」

巡査（グリフィス）

「じゃあ、1つを頼む」

祈里は巡査から、現金入りジュラルミンケースを受け取る。

祈里

「嘘・・・！これも重い・・・！また誰かと一緒に運ばないと・・・」

「

巡査（ヴァイス）

「無事に届けてくれよ！」

祈里

「はい・・・！でもこれ、私1人じゃ大変だよ・・・」

スバル

「いた！」

続けて、スバルも宝くじ売り場に到着。

スバル

「これが最後の1つか・・・」

巡査（グリフィス）

「お前は・・・あの時の・・・」

巡査（ヴァイス）

「これを屋上まで持って行ってくれるか？」

スバル

「あつ・・・勿論ですよ！あたしが必ず！」

巡査（グリフィス）

「じゃあ、頼んだぞ」

スバルは巡査から、最後の現金入りジュラルミンケースを受け取る。

スバル

「ううわっ・・・！やっぱり想像通り重い・・・！」

巡査（ヴァイス）

「無事に届けてくれよ！」

スバル

「心配しないで下さい！」

城ヶ崎

「全て無事に届いてくれればいいんですが・・・」

巡査（グリフィス）

「大丈夫ですよ、城ヶ崎さん・・・」

巡査（ヴァイス）

「彼女達を信じましょう・・・！」

ロイ

「あそこのエスカレータを下りれば、目の前に宝くじ売り場がある東口だな・・・」

宝くじ売り場を目指すロイ。その時、彼の視界に現れたのは・・・

ロイ

「ん．．．？何だありや．．．？箱．．．？トランク．．．？ちょっと待てよ．．．！あれってまさか．．．！」

アルルが置き去りにしたジュラルミンケースだ．．．

ロイ

「これを屋上に運べって内容だったよな．．．？よしっ．．．！運んでやるか．．．！」

ジュラルミンケースを持ち上げるロイ。しかし．．．

ロイ

「うっえ．．．！？何だよ、この尋常じゃねえ重さは．．．！これは、普通エレベータとかが使えないと厳しいぞ．．．！」

予想外の重さに、少々困惑している。また、エレベータは使えない．．．

ロイ

「でも運ばねえと．．．！賞金単価0円はゴメンだぜ．．．！」

意を決して、ジュラルミンケースを運ぶ。

ドクター

「宝くじ売り場ってここだよな？」

漸く、宝くじ売り場前にやって来たドクターマリオ。

ドクター

「あれ？もう全部無くなってる・・・もう渡ったのか・・・あの、すみません。誰が持つて行きましたか？」

巡査（グリフィス）

「確か・・・アルルと山吹祈里とスバル・ナカジマという者が持つて行った」

ドクター

「祈里とスバル・・・なるほど。有難う御座います、グリフィスにヴァイス」

巡査（ヴァイス）

「俺達は、鳴海警察署の巡査だ」

ドクター

「いやいや・・・だって今、2人とも車に寄り掛かって休んでただら？」

巡査（グリフィス）

「いや、休んではないない」

ドクター

「もう完全に『俺達の役割は終わったな』って顔してただろ？安心感たっぷりと・・・」

巡査（ヴァイス）

「それは誤解だ」

スバル

「これは最初のミッションみたいに、ハンターに見つかったらほぼ確実に終わりだね・・・!」

ハンターに見つかれば、重いジュラルミンケースは手放すしかない。

祈里

「ハア・・・ハア・・・ホントに重い・・・!」

重さに耐え切れず、休み休みでジュラルミンケースを運ぶ祈里。

そこへ・・・

キャロ

「祈里さん」

祈里

「へっ・・・!? キャ・・・キャロちゃん・・・?」

キャロ・ル・ルシエが現れた・・・

キャロ

「見る限り重そうですね」

祈里

「すごい重い・・・!」

キャロ

「一緒に運びましょうよ」

祈里

「ホントに？」

キャロ

「はい」

2人は協力してジュラルミンケースを運ぶ事に。

その頃ロイは、螺旋階段を利用して4階まで辿り着いていた。

ロイ

「この螺旋階段は、一応屋上まで繋がってるみたいだから・・・これを使えば、時間を短縮出来る・・・！」

一方スバルは、上の階へと繋がるエスカレーターを利用して屋上を目指している。

スバル

「一部の動いてるエスカレーターがあつたからね・・・それで上がっていけば、体力の消耗を少なくして辿り着ける・・・！」

異なる方法でケースを運んでいる2人。祈里とキャロのペアは、どんな方法を使っていくのだろうか。

キャロ

「どうやって行きます？」

祈里

「地図を見る限り、螺旋階段で行く方が歩く距離が短くて済むみたいだから・・・」

キャロ

「先ずは螺旋階段ですね？」

祈里

「うん」

どうやら、ロイと同じ集団で運ぶ様だ。

しかし、その時・・・

祈里

「あつ・・・！ちょっと待って・・・！ハンターがいた・・・！」

キャロ

「ええ・・・！？」

祈里が遠くにハンターを見つけた。

> i 3 0 5 4 6 — 2 0 9 6 <

キャロ

「こつち来そうですね・・・」

祈里

「あその曲がり角を曲がらなかったら、後ろの道を使っていこう・
・・」

近付いて来るハンターを警戒する2人。

> i 3 0 5 4 7 — 2 0 9 6 <

しかし、ハンターは2人には気付かず、そのまま曲がり角を曲がっていった。上手くやり過ごせた様だ。

キャロ

「はあゝ・・・危なかったゝ・・・」

祈里

「よしっ・・・！行こう・・・！」

2人は屋上駐車場を目指し、移動を再開。

一方ロイは、遂に屋上駐車場に辿り着いた。

ロイ

「あれか、賞金単価減額装置・・・！ど真ん中にあるって・・・完全に見晴らし良過ぎだろ・・・？」

彼は運んできたジュラルミンケースを賞金単価減額装置の上に乗せる。

すると、装置のランプが1つ灯った。

ロイ

「これでいいんだな？しかし重いな、現金入りジュラルミンケースってのは・・・！」

プルルルル プルル♪

リュカ

「あつ・・・メールが来た・・・！」

牢獄

レッド

「『ロイの活躍により、1つ目のトランクが届けられた』！」

ヤング

「おお！」

レッド

「『これにより、賞金単価0円は免れた』！」

スネーク

「流石ロイだな・・・！」

デイジー

「あの人、やる時は本当にやるからね」

シグナム

「大した奴だ・・・！」

ルイーダ

「ロイすごい・・・！いや、やっぱり彼は頼りになるね・・・！」

えりか

「やっぱり男はこうじゃなきゃね・・・!」

ロイによって、1つ目のジュラルミンケースが届けられ、残るケースはあと2つ。

それは、1つがスバル・・・もう1つが祈里とキャロのペアが持ち運んでいる。

賞金単価減額まで、残りおよそ5分30秒。

果たして、間に合うのか!?

賞金単価減額阻止へ！（後書き）

ジュラルミンケースが1つ運ばれ、賞金単価0円は免れた

残る2つのジュラルミンケースはどうなるのか！？

知っている人もいるかと思いますが、次回の逃走中の放送は10月9日です

サブタイトルも『狙われたハンター』と言う事で、かなり期待大です♪

皆さん、絶対に見ましょう！

ミッション4終了！　しかし・・・（前書き）

ミッションクリアに必要なケースはあと2つ

これらを無事に運び切れるのか！？

ミッション4終了！　しかし・・・

現在ジュラルミンケースを運んでいるのは、スバル・祈里・キャロの3人。残り60分までに、屋上駐車場の賞金単価減額装置に運べなければ、それに応じて賞金単価が減ってしまう。

スバル

「ハア・・・ハア・・・これはホントにきつい・・・！」

1人でケースを運んでいるスバル。これまで2度も1人で重い物を運んでいる。最後まで体力は持つのか。

祈里

「螺旋階段の踊り場で交代しながら運ぼう・・・！」

キャロ

「そうですね・・・」

漸く螺旋階段の近くまでやって来た祈里とキャロ。

そんな彼女達を陰から見ていたのは・・・

ヴィータ

「あのケースに現金が入ってるのか・・・見るからに重そうだな・・・」

これまで、全くと言っていいほどゲームに貢献していないヴィータだ・・・

ヴィータ

「まあ、あたしには関係ねえ……！あの2人も、いずれ確保される運命なんだからな……！」

手伝いに行く気は全く無い様だ……

> i 3 0 8 6 8 — 2 0 9 6 <

一方、駐車場に潜んでいるこの2人は……

ルイージ

「この駐車場……薄暗いから尚更怖いよ……何か物音がしたら、ハンターが来たと思っちゃうぐらい気味が悪いよ……大体、何で選り^よによつて深夜なの……？ボク、こういうの苦手なの^{にさ}……」

リュカ

「ボクが呼ばれてる逃走中……全部深夜じゃん……何で明るい時に呼んでくれないの……？ボクが、暗闇の中に溶け込んでるハンターが1番怖いと思つてる事知つてるでしょ……？早く朝日昇つて来てよ……！」

第1回目の逃走中のトラウマが蘇^{よみがえ}つたのか、身体が震えている。

また、5階駐車場に潜んでいるのは……

えりか

「はあ……早く自首したいな……」

自首狙いのえりかだ……

えりか

「ところで、今賞金は・・・えっと・・・あっ！もう50万円超えてる！もついいや。自首しよう！」

目標金額である50万円に達した為、自首へと動く。

えりか

「でも、電話する為には確かダイヤルキーを外さなきゃいけないんでしょ・・・？その番号が分らないと・・・ん？」

地図の裏に何かを発見した。

えりか

「な・・・何これ・・・？『9603』・・・？『自首用』って・・・えっ？ちよっと待って・・・若しかして、これが解除する為の番号・・・！？」

そう・・・逃走者が持っているエリアの地図の裏側には、自首に必要なダイヤルキーの暗証番号が書かれているのだ。

えりか

「これさえ分かれば、もう迷う事は何もないね・・・！よしっ！自首します！待ってて、あたしの50万円！」

改めてえりかは、自首用電話を目指す。

>i30869—2096<

スバル

「ヨッシャ・・・！着いた・・・！」

やっこの思いで、屋上駐車場に辿り着いたスバル。

スバル

「賞金単価減額装置は・・・あれか・・・！うわ・・・見晴らしいいな、ここ・・・これでハンターに来られたら最悪だね・・・」

そう呟きながら、彼女は運んできたジュラルミンケースを賞金単価減額装置の上に乗せる。

すると、装置のランプがもう1つ灯った。

スバル

「これでOK・・・！あと1つだ・・・！」

プルルルル プルル」

ロイ

「おっ・・・メールか・・・内容は何だ？」

牢獄

レッド

「『スバル・ナカジマの活躍により、2つ目のトランクが届けられた』！」

ワルイージ

「すげえ！」

レッド

「『これにより、賞金単価10円は免れた』！」

シャマル

「彼女、本当にすごいわね・・・！」

アミティ

「伊達に前回しぶとく残ってないね！」

ドクター

「これであとは1つか・・・確か祈里って奴が持つて行ったって言うってたな・・・」

祈里

「頑張ろう・・・！あともう少しだから・・・！」

キャロ

「はい・・・！勿論です・・・！」

これで残るは、祈里とキャロのペアが運ぶケースのみとなった。

ロイ

「あと1分ぐらいか・・・無事に運んでくれ・・・！」

スバル

「あと1つ・・・何とか運んでほしいな・・・！」

ミッションを遂行した2人。ミッションクリアを兎に角祈る。

ヴィータ

「残り1分切ったな・・・」

ミッション終了まで、既に1分を切っている。このまま2人がジュラルミンケースを運ばなければ、賞金単価が1秒100円から50円になり、逃げ切った場合の賞金も90万円から72万円に減額されてしまう。

キャロ

「やっとここまで来ましたね・・・」

祈里

「うん・・・もう少し・・・頑張ろう・・・!」

キャロ

「はい・・・!」

5階まで上がり終えた2人。あとは、屋上へと繋がる階段を上るだけとなった。

しかし、その時・・・

祈里

「うわぁ!」

キャロ

「ハンター!?!」

目の前からハンター・・・

2人はジュラルミンケースを手放し、思い思いの方向へ一目散に逃げる。

> i 3 0 8 7 0 — 2 0 9 6 <

祈里

「こんな時に〜!」

キャロ

「酷いよ〜!」

叫びながら、尚も逃げ続ける。

どうやら2人は、間一髪でハンターを撒いた様だ。

祈里

「あんな所から・・・^{ずる}狡いよ、ハンターも・・・!」

キャロ

「どうしよう・・・? ケースからかなり離れちゃったよ・・・」

4階の駐車場へと逃げ込んだキャロ。

> i 3 0 8 7 1 — 2 0 9 6 <

しかし、逃げた先に別のハンター・・・

キャラ

「それにしても、何でこんな時にハンターが・・・って、こっちにもいるじゃーん！」

見つかった・・・

方向転換し、一目散に逃げるキャラ。しかし、彼女がハンターに敵う訳が無い。最早、逃走不可能・・・

キャラ

「いやあゝ！」 ポンッ

> i 3 0 8 7 2 — 2 0 9 6 <

キャラ

「もう・・・！何でクリア目前でこんな事になるの・・・？」

リユカ

「『4階駐車場にてキャラ・ル・ルシエ確保、残り8人』・・・うわあ、キャラまで捕まったよ・・・」

ヴィータ

「ほらな・・・ミッションやる奴は、こうなる定めなんだよ・・・！」

キャラが確保され、祈里もジュラルミンケースから遠ざかってしまった為、ミッションはクリア出来なくなった・・・

そしてそのままミッション失敗・・・

> i 3 0 8 7 3 — 2 0 9 6 <

これにより、賞金単価が半分の50円となってしまった・・・

ブルルルル　ブルル」

ルイージ

「ミッションの結果かな・・・？」

スバル

「ええー！？『ミッション失敗』！？」

ロイ

「『届けられたケースは2つの為、これより賞金は1秒50円となり、逃げ切れれば72万円獲得となる』・・・」

ドクター

「まあ、仕方ないか・・・1階から屋上までエレベータ無しで重い物を運ぶなんて、そう簡単に出来る事じゃないからな・・・」

祈里

「あの時ハンターがいなかったら、絶対キープ出来てたのに・・・おまけにキヤロちゃんも捕まっちゃったし・・・ゴメンなさい、キヤロちゃん・・・！」

誘拐犯からの3億円の要求には応えられなかったが、屋上駐車場で
は厳重な警備が敷かれていた・・・

警部（クロノ）

「おい・・・そっちは何か異常は無いか・・・？」

巡査（ユーノ）

「はい・・・大丈夫です・・・ひとけ人気もありません・・・」

警部（クロノ）

「そっちはどうだ・・・？」

巡査（グリフィス）

「こちらも、特に目立った動きはありません・・・」

巡査（ヴァイス）

「こちらも、異常は見当たりません・・・」

警部（クロノ）

「よしっ・・・ケースに近付く不審な奴がいたら、すぐに確保だ・・・いいな・・・！」

巡査（ユーノ・グリフィス・ヴァイス）

「はい・・・！」

深夜の屋上駐車場で目を光らせる警部ら・・・

・・・と、その時・・・

バーン！バーン！バーン！

警部（クロノ）

「！？」

突如、電光石火の如く夜空に打ち上げられた無数の花火・・・

そして、再び静まり返った直後・・・

巡査（ユーノ）

「警部！現金を入れた2つのケースが無くなってます！」

警部（クロノ）

「何！？」

ふと眼をやると、賞金単価減額装置に置かれていた2つのジュラルミンケースが、忽然と消えていた・・・

警部（クロノ）

「おい！駐車場から出ていった車は！？」

巡査（グリフィス）

「いいえ！1台もありません！」

警部（クロノ）

「ケースを持ち去った不審な人物は！？」

巡査（ヴァイス）

「近くにそれらしき物を持った人は1人もいません！」

警部（クロノ）

「どういう事だ・・・！？車の移動も無ければ、近くに人の気配も無い・・・！じゃあ、奴はどうやって現金を奪い取っていったというんだ・・・！？」

通常なら考えられない出来事に、警部も思わず頭を抱えてしまう・

・

・・・と、その時・・・

警部（クロノ）

「ん？」

彼等の前に落ちてきた、1通の手紙・・・警部がそれを拾い、内容を読む・・・

警部（クロノ）

「『交渉決裂だ。次のメールを待て』・・・！？こいつ・・・俺達の事を完全に嘗^なめ切^なってやがる・・・！クソー！」

怒りに震える警部は手紙を握り潰し、地面に思いつ切り叩き付ける・
・

巡査（ユーノ）

「ここは一旦、楽屋に戻りましょう」

巡査（グリフィス）

「次こそ奴は、必ずぼろを出す筈です」

巡査（ヴァイス）

「そうすれば、犯人の手掛かりも伊東さんの行方も、きっと分かります」

警部（クロノ）

「そうだな・・・よしつ、戻るか」

何の手掛かりも掴めぬまま、警部達は楽屋へと戻っていく・・・

ロイ

「くそ・・・！ハンターが3体のままなのに、捕まるペースが尋常じゃねえぞ・・・！残り60分を切って、あと8人・・・こりゃ、全滅も覚悟した方がいいのかもしれない・・・」

ドクター

「復活ミッションが来て人数を増やせば、まだ希望はあるんだがな・・・でも、復活は無いと見るのが賢明なのかもな・・・」

逃走中初参戦の2人。予想外の展開に、少々戸惑いを隠せない。

ヴィータ

「これまで結構活躍してる奴が、どんどん捕まってるんだよ・・・」

「

こちらも初参戦・・・ヴォルケンリッターのヴィータ。

ヴィータ

「まあ、本家もそんなもんだからな・・・再参戦若しくは活躍してる奴の殆どが捕まる運命にあるみてえだし・・・だったら、動かずにいるのが最善の策って訳だ・・・！」

どんな状況になっても、動く気は全く無い様だ。

自首狙いのえりか。

えりか

「えっと・・・１００円ショップにあるんだよね、自首用電話・・・」

「

自首電話から申告すれば、その時点の賞金を獲得し、ゲームからリタイアとなる。

えりか

「あっ！あつた、あつた！」

自首用電話を見つけ、すぐさま駆け寄る。

しかし、その近くにハンター・・・

えりか

「まずは番号を９６０３に合わせて、キーを解除しないといけないんだよね・・・」

彼女はダイヤルキーを操作し、番号を合わせる。

その間に、ハンターとの距離が徐々に縮まっていく。

えりか、自首出来るのか！？

ミッション4終了！　しかし・・・（後書き）

残る逃走者は、ルイージ・ドクター・リュカ・ロイ・えりか・祈里・
ヴィータ・スバルの8人

えりかはハンターに捕まる前に、自首を成立させられるのか！？

そして、逃走者に迫る最大の危機とは！？

エリア大爆発！？（前書き）

自首しようとするえりかにハンターが接近

彼女の自首が先か・・・？ハンターの確保が先か・・・？

その答えは、神のみぞ知る！

エリア大爆発!?

> i 3 1 3 7 9 — 2 0 9 6 <

自首用電話のダイヤルキーを外そうとしているえりかの近くに、ハンターが接近。

えりか

「たった4桁とはいえ、合わせるのって結構大変だね・・・」

ハンターとの距離が徐々に縮まっていく。

えりか

「あつ、開いた・・・!この電話から申告すればいいんだね?」

その時・・・

> i 3 1 3 8 0 — 2 0 9 6 <

ピーーーーーービュビュッ

LOCK ON KURUMI

見つかった・・・

えりかは追って来るハンターに気付いていない。

えりか

「来海えりかです!自首します!」

その瞬間、ハンターは追跡を止めた。

そう・・・自首が成立したのだ。

> i 3 1 3 8 1 — 2 0 9 6 <

えりか

「有難う御座いました！」

彼女は嬉々として電話を切る。

えりか

「いえーい！50万円獲ったぞー・・・ってハンター！？近くまで来てたんだ・・・！全然気付かなかった・・・ちよつとでもタイミングが遅かったら、間違いなく捕まってたね・・・良かった、セーフ・・・！」

プルルルル プルル♪

ドクター

「またメールか・・・えつと・・・」

ロイ

「『自首情報』・・・自首！？『来海えりか自首成立』・・・はあ
あ！？」

ヴィータ

「おい、ふざけんなよマジで！あいつ何なんだよ！？」

祈里

「えりかちゃんが自首した！？嘘でしょ！？」

スバル

「ミッションも大してやって無い癖に、ズル過ぎだよ！」

リユカ

「何で自首すんの！？？」

ルイージ

「ボク達は、こうやって怖い我慢して頑張ってるのにさ、こんな風に逃げるのってアリ！？」

> i 2 8 3 1 6 — 2 0 9 6 <

レッド

「『来海えりか自首成立』だってよ」

デイジー

「ええ！！？」

アルル

「自首！？」

ヤング

「あいつ最低だな！今日何にもしてねえじゃねえか！」

咲

「ホントだよ！プリキュアが聞いて呆れるよ！」

ワルイージ

「まだ50分以上も残ってるぜ？もつと粘れただろ、絶対に」

シャマル

「ハンターの恐怖に耐え兼ねた……とか、そんなんじゃないかしら？」

ネス

「だとしても、あんなに怖がってたリユカとかルイージはまだ残ってるし……」

シグナム

「単純に目標に達したか、あるいは目の前の賞金を選んだか……」

スネーク

「そう考えるのが自然だろう……何せ、賞金単価が50円に減らされた訳だし……それに54万円といったら、中学生からすればかなりの高額金額だしな……」

アミティ

「確かにえりかって人、50万円行ったら有無を言わず自首するって言ってた様な言ってなかった様な……」

デイジー

「いいな、えりかは……私なんか目標行く前に捕まっちゃったし……」

シグナム

「主はやてから、自首しか考えていない奴には、それ相応の天罰が下ると聞いていたが・・・今回は、必ずしもそうとは限らなかったみたいだな・・・」

ワルイージ

「えりかの奴、俺様よりも質^{たち}が悪いな。この俺様でさえ、逃げ切ろうって気持ちがあったというのに」

咲

「しょうがないよ。ああ見えて、えりかはお金に結構うるさいから」

アルル

「でも、えりかが自首したから残ってる逃走者が7人しかないよ？これ、若しかしたら全滅するかも・・・」

スネーク

「そうなんだよな・・・あと57分で残り7人・・・状況はかなり厳しいな・・・」

アミティ

「でもそうなら、えりかだけが得をする感じで終わる事になるんだよね・・・？」

ヤング

「自首した人だけが賞金を持って帰る・・・そんな逃走中、誰も見たくないだろう」

レッド

「そういう展開ほど、信じられないくらい盛り下がる展開は無いかな・・・」

シャマル

「こういう状況になった以上、誰かの逃げ切りを祈らない訳にはいかないわね……！」

ネス

「そうですね……誰でもいいから、最後まで逃げ切って……！」

ロイ

「今残り57分で……54万9千円か……くそ、賞金単価が半分になっただけで、こんなにも増える速度が極端に遅くなるなんてな……満額72万円が、ものすごく遠くを感じるぜ……」

現在、賞金は1秒50円ずつ上昇している。逃げ切れば、72万円獲得出来る。

スバル

「残ってるのが7人しかないなんて……ハンターは3体しかないのに、確保されるペースが今までと比べ物にならないくらい早いよ……前回と同じ様に、今回も全滅になるのかな……？」

エリアでは3体のハンターが搜索。視界に入った逃走者を見失うまで追跡する。待ち伏せなどはしない……

1階の電器館に潜むドクターマリオ。

ドクター

「ここは死角が多いな……高い棚の陰から現れたら、絶対に逃げ

られないな・・・あまり入り組んだ所には行かない方が絶対いい筈だ・・・兎に角、自分の首を絞める様な事は慎もう・・・」

ここに来て、エリアの特徴やハンターの行動に注意を払う。

ゲーム中盤から、ずっと同じ場所にいるヴィータ。

ヴィータ

「万が一ハンターに見つかっても、すぐ逃げられる様にしとかねえと・・・」

その彼女の近くに・・・

> i 3 1 3 8 2 — 2 0 9 6 <

ハンターが接近・・・

ヴィータ

「ん・・・？ヤベエ・・・！ハンターじゃねえか・・・！」

すぐさまベンチの下に身を隠す。

ヴィータ、やりすごせるか。

ヴィータ

「マジでヤベエぞ・・・あっち行け・・・！あっち行けよ、ハンター・・・！」

> i 3 1 3 8 3 — 2 0 9 6 <

その念が通じたのか、ハンターは彼女に気付かず、その場を通り過ぎた。

ヴィータ

「はぁ、危ねえ・・・！こんな所で捕まってたまるかよ・・・！賞金はあたしがもらっていくんだ・・・！」

・・・と、その時・・・

ピンポンパンポン・・・

ヴィータ

「？」

エリア中に、謎のチャイム音が・・・

???

「警告・・・警告・・・このショッピングモールに爆弾が仕掛けられています。至急避難して下さい」

ヴィータ

「ば・・・爆弾!？」

祈里

「爆弾!??ええ!??わ、私達も避難しないといけないの!??」

謎の放送に、ショッピングモール内は大パニック・・・

ドクター

「な・・・な、な、何が起こったんだ・・・!??ば、爆弾って・

・・・！」

ルイージ

「ええ・・・！？ええ・・・！？い、一体何があったんだよ・・・！？」

建物内は、逃げ惑う客達でごった返していた・・・

リユカ

「ボ、ボク達も避難しないとヤバイよね・・・！？だって、爆弾でしょ・・・！？」

スバル

「ちよ、ちよつと・・・！あたし達、ここにいたら不味いでしょ・・・！非常口に行かなきゃ・・・！」

ロイ

「何なんだよ・・・！何処行っても客でごった返してて、逃げ場所が無えよ・・・！」

出入口に多くの客が殺到し、逃走者達は建物から逃げられなくなっていた・・・

そして、その頃・・・

巡査（グリフィス）

「皆さん！慌てずに避難して下さい！」

巡査（ユーノ）

「大丈夫です！落ち着いて行動して下さい！」

巡査（ヴァイス）

「出たら、速やかに建物から離れて下さい！」

巡査達が客達を安全な場所へと誘導している・・・

そして、警部とマネージャーの城ヶ崎も避難していた・・・

城ヶ崎

「ど・・・どうしましょう、警部さん・・・このままじゃ、この街のシンボルとも言える鳴海メインプレイスが・・・」

警部（クロノ）

「くそ・・・！ダメだ、時間が無い・・・！」

警部は腕時計を見ながら、顔を顰める・・・

実は、誘拐犯からメールで爆発予告が送られており、その時刻まであと1分前となっていたのだ・・・

それは刻一刻と迫っていた・・・

巡査（ユーノ）

「警部！中にいた人は全員避難させました！」

警部（クロノ）

「よしっ・・・！」

巡査（グリフィス）

「あつ・・・！あと20秒で爆発します！」

警部（クロノ）

「何！？今からではとても間に合わん・・・！全員車内へ避難だ！」

巡査（ユーノ・グリフィス・ヴァイス）

「はい！」

逃走者以外全ての者が、ショッピングモールから姿を消した・・・

そして、腕時計が爆発時刻を差した・・・

しかし・・・

巡査（ヴァイス）

「あ・・・あれ・・・？何も・・・起こりませんね・・・」

予告された時間を過ぎたが、ショッピングモールからは爆発する気配が感じられなかった・・・

城ヶ崎

「へっ・・・？じゃあ・・・あの爆破予告は・・・ダミーって事ですか・・・？」

警部（クロノ）

「くそ・・・！あいつ、俺達を弄びやがって・・・！」

警部は、誘拐犯からのデマに操られた自分に腹を立てた・・・

しかし、ショッピングモール内では確かに大きな爆発は無かったものの、至る所に仕掛けられた爆弾が、小規模ではあったが確かに爆発していた……

そして、その残骸から無数の透明な珠が転がっているのだ……

この珠が、逃走者達にチャンスを与える事となる……

ルイージ

「人の声が全く聞こえなくなったんだけど……だ、大丈夫だったのかな……？」

プルルルル プルル♪

ルイージ

「ひっ！な、何だよ……！？」

メールだ……

リユカ

「ミッション5……！『エリア内に仕掛けられた爆弾が爆発。残骸から無数の透明の珠が現れた』……透明の珠……？」

祈里

「『残り45分までに透明の珠を4つ集め、牢獄前にある復活の台座に乗せれば』……」

レッド

「『牢獄の中から4人復活出来る』!」

この通達に、牢獄の者達は大喜び。

スバル

「『復活した者は自首出来ないが、逃げ切れば助けた者はその賞金の半分を受け取る事が出来る』・・・!」

ヴィータ

「『権利は先着1名のみ。助けるかどうかは、君達の自由だ』・・・!」

MISSION? 復活の珠を集め牢獄から救出せよ!

誘拐犯が仕掛けた爆弾が爆発し、その残骸から無数の復活の珠が出現。残り45分までに、この珠を4つ集めて牢獄前の復活の台座に乗せると、珠に色が付きその色に応じた4人が復活出来る。そして復活した者が逃げ切れば、助けた者はその賞金の半分を受け取る事が出来る。但し、珠の色は復活の台座に乗せるまで分からない為、逃走者達は肉眼で色を認識する事は出来ない。また、集めた珠の色が重複するとその珠は消滅してしまう。なお、牢獄は1階タクシーのりば近くの駐車場に設置されている。

ドクター

「来たぞ、復活ミッション・・・!この先の事も考えてやっとか・・・!」

ロイ

「4つ拾えばいいんだな?ヨッシャ、仲間を増やすチャンスだぞ・・・!」

エリアには3体のハンター。動けば見つかる危険が高まる。

ミッション終了まで、およそ9分。

果たして、助ける事は出来るのだろうか！？

エリア大爆発！？（後書き）

シリーズ初の、逃走者の力を必要とする復活ミッション

7人の逃走者達は、牢獄の者を救出できるのか！？

ここで、この小説を読んで下さっている皆さんにアンケートを取ります！

復活させてほしい4人の名前を投票してください。

今回、投票は1人3回までOKとします（必ず遵守してください）

出来るだけアンケートの結果を反映させようと思います。

締め切りは10月1日の午前0時までとします。

宜しくお願いします！

4人救出へ！（前書き）

逃走者に与えられた復活の大チャンス

時間内に、4人を復活させられるのか！？

4人救出へ！

残り45分までに、復活の珠を4つ集めて牢獄前の復活の台座に乗せられれば、牢獄の中から4人を復活させる事が出来る。更に復活した者が逃げ切れば、助けた者はその賞金の半分を受け取る事が出来る。

スバル

「やるしかないでしょ・・・！」

祈里

「折角私達にくれたチャンスなんだもん・・・！助けてあげなきゃ・・・！」

これまで、果敢にミッションに挑み続けている2人。今回も積極的に動く。

ルイージ

「4人復活か・・・よしっ・・・！これはやろう・・・！」

リュカ

「このままじゃ全滅しちゃうもん・・・！復活させてあげよう・・・！」

駐車場に隠れ続けていた2人も、初めてのミッションに参加する様だ。

しかし、エリアには3体のハンター。動けば遭遇するリスクが高まる。

牢獄

レッド

「4人復活って、かなりでかいぞ？」

ワルイージ

「そうだな」

アミティ

「何としても、復活したいよ」

シグナム

「だが、誰が復活出来るのかは、結局のところ運任せだからな・・・」

デイジー

「確かに・・・本家でも運任せだもんね、この類の^{たぐい}ミッションは」

シャマル

「でも、復活したい気持ちは皆一緒なものね・・・」

スネーク

「当然だろ。任務を遂行して報酬を得るのは、社会の道理だからな」

咲

「復活出来たら、今度こそ自慢の足を活かして逃げたいよ」

ヤング

「でもよ、復活云々以前にミッションやってくれる奴がいねえと・・・」

ネス

「いやいや、やらない人なんていないでしょ?」

アルル

「そうだよ。時間的にも、まだ最後のミッションが残ってそうだし・・・」

キャロ

「その事を考えても、人数は多いに越した事は無いですからね」

ヴィータ

「行かねえよ、あたしは。どうせ、助けた奴も助けられた奴も捕まる運命にあるんだからな。このミッションも、捕まってもいいと思う奴が勝手に行きやいいんだよ」

ゲーム開始から殆ど動ほとんかずに隠れて続けるヴィータ。このミッションにも、全く動く気は無い様だ。

ロイ

「ただ、地図に場所が描かれてねえからな・・・まずは、復活の珠を探し当てねえと・・・」

逃走者達は、自力で復活の珠を探し出さなければならぬ。牢獄の者を復活させるのは、容易な事ではない。

ロイ

「おっ・・・何か転がってるぞ・・・透明の珠・・・まさか、これが復活の珠か・・・！？うおっ・・・！？しかも、辺り一面に転がってやがる・・・！」

復活の珠を発見したロイ。これより、色が重複しない様に4つ拾わなくてはならない。

ロイ

「色が被ったらダメって言われてもな・・・見えねえから、どうしようもねえんだよ・・・」

ドクター

「おっ・・・！こんな所に透明の珠がいっぱい転がってるぞ・・・！なるほど、これが復活の珠か・・・！」

ドクターマリオも復活の珠を発見。早速収集に取り掛かる。

> i 3 1 7 0 4 — 2 0 9 6 <

しかし、そこへハンターが接近・・・

ドクター

「これとこれは・・・被ってない・・・これはどうだ・・・？あっ・・・！消えてしまった・・・あと3つか・・・」

彼はまだ、ハンターの接近に気付いていない。

ドクター

「よしっ、被ってないぞ……！あと1つ……これが大事だな……」

そして、見つかった……

ドクター

「これはどうなんだろうな……全く見当が……へっ……？
うおぁー！マジかよー！？」

> i 3 1 7 0 5 — 2 0 9 6 <

追って来るハンターを見つけ、一目散に逃げるドクターマリオ。

しかし……

ドクター

「ちょ……ちょっと待て……！珠がいっぱいあり過ぎて……
滅茶苦茶逃げにくい……！」

復活の珠が足場を埋め尽くしており、思う様に逃げれない。

そして……

ドクター

「うおっ！？」

誤って復活の珠を踏んでしまっただけでバランスを崩し、その場で転倒。
最早、逃走不可能……

ドクター

「最悪だゝ．．．」 ポンッ

> i31706 — 2096 <

ドクター

「くそ．．．拾うのに夢中になり過ぎた．．．はあゝ、失敗した．．．」

祈里

「あつ．．．！『ドクターマリオ確保、残り6人』．．．！」

ルイージ

「未来の兄さんが捕まっちゃったよ．．．」

ヴィータ

「ほらな．．．動くから捕まるんだよ．．．！逃走中ってのはな、動いたら負けなんだよ．．．！」

スバル

「あつ．．．！透明な珠がいつぱい転がってる．．．！」

スバルも漸く復活の珠の大群を見つけた。

スバル

「見た感じ色が被る事は無さそうだけど．．．意外と被りやすくなってるのかもしれないね．．．」

そう呟きながらも、復活の珠の収集を始める。

リユカ

「あつ．．．！こんな所に、たくさん転がってる．．．！この中から4つか．．．ハンター来そうで怖いけど、見つけた以上やるしかない．．．！」

祈里

「あつた！これが復活の珠．．．いつぱいある．．．！消えない組み合わせで4つ．．．よしっ．．．！頑張ろう．．．！」

ルイージ

「これか．．．！ここから4つを選び抜くんだね．．．？任天堂の名誉に賭けて．．．このミッションぐらいは、ボクの手で成功させてやる．．．！」

リユカ・祈里・ルイージも復活の珠を見つけ、これで5人が復活の珠を探している事となる。

その5人とは裏腹に、ミッションに一切参加せずに隠れているこの女は．．．

ヴィータ

「客がいなくなったから、ハンターを見つけやすくなってるが、ハンターに見つかりやすくもなってるだよ．．．これじゃあ、ミッションに動いたら『どうぞ捕まえて下さい』って言ってる様なもんだろ．．．！」

牢獄

デイジー

「誰が助けに来てくれると思う？」

シグナム

「やはりスバルだろうな・・・あいつは、全てのミッションをやり遂げようとする執念があるしな・・・」

咲

「祈里じゃないかな？祈里も、責任感を持ってやってくれそうな感じだったもん」

アミティ

「うーん・・・よく考えてみたら、その2人以外考えられないよね？」

ワルイージ

「言えてるぜ。ルイージは怯えて動かねえだろうし・・・」

ネス

「リユカも同じ理由でやってくれなさそうだもんね・・・」

ヤング

「ロイは男の癖して、かなりの意気地無しだからな・・・」

シャマル

「そしてヴィータは、動く気なんか全く無いらしいから・・・」

スネーク

「結局、信じられるのは過去の功績がある2人だけという訳か・・・」

レッド

「そう考えると、このミッションは失敗に終わるのが落ちなんだろうな〜・・・」

アルル

「でも逆に言えば、ミッションをやってくれる人が2人もいるから、幾分可能性はあるって事でしょ？」

キヤロ

「そうですよ。私達を見捨てていない人がいるんですから、皆で信じましょう！」

祈里

「あれ？また消えちゃった・・・4つ揃えるのって、意外と難しい・・・」

スバル

「くそ〜、これもダブリか・・・！結構同じのを拾っちゃうもんなんだね〜・・・」

牢獄の者達から期待されている2人。復活の珠を4つ揃えるのに、かなり苦労している様だ。

彼女達とは裏腹に、全く期待を持たれていないリユカ。

リユカ

「これで3つ・・・！これはどうだろう・・・？被って・・・いない！やった〜！4つ揃った！」

色が重複する事無く、4つの復活の珠を獲得出来た。

これより彼は、1階の駐車場に設置された牢獄を目指す。

リユカ

「折角掴んだ活躍のチャンスなんだ……！絶対に復活させてやる……！皆待つてて……！」

しかし、エリアでは3体のハンターが行く手を阻む。彼等の搜索を掻い潜つて、牢獄に辿り着かなければならない。

ロイ

「ハンター来そうだな、これは……あんまり拾ってるのに没頭してられねえな……」

ルイージ

「さっきまでの賑やかだった時に比べると、余計に怖さが倍增してるんだよね……何て言うか、この静けさが変な事を呼び寄せる感じがして……」

リユカ

「あのエスカレータを下って行こう……！」

他の者が復活の珠の収集に手間取っている間に、リユカは牢獄との距離を少しずつ縮めていく。

スバル

「どれを選べばいいんだ……？色が分かんないと、ホントに辛い……って、うわっ！何、何、何！？ハンター来たの！？」

リュカ

「違います！」

スバル

「じ．．．じゃあ、何で？」

リュカ

「4つ取りました！今から復活させに行つて来ます！」

スバル

「あつ、取れたんだ！じゃあ、頼んだよ！」

祈里

「あと1つ．．．でも、このあと1つが難しいんだよね．．．ん．．．
．？えつ、何．．．！？ハンター！？」

リュカ

「違います！復活の珠4つ取りました！」

祈里

「取れたの？」

リュカ

「はい！今から4人復活させに行つて来ますんで！」

祈里

「ホントに！？それじゃあ、お願いね！」

2人からの声援を受けて、牢獄へと走るリュカ。

リュカ

「このエスカレータを下りたら、この道をまっすぐ行って・・・所したらすぐだ・・・！よしっ・・・！」

> i 3 1 7 0 7 — 2 0 9 6 <

しかし、向かう先にハンター・・・

リュカ

「もうちょつとだ・・・！皆待つてて・・・！今、助けるからね・・・！」

ハンターとの距離が徐々に縮まる。

そして・・・

リュカ

「えっ・・・？嘘だー！」

見つかった・・・

ハンターの姿を見て、一目散に逃げるリュカ。

果たして、逃げ切れるのか！？

4人救出へ！（後書き）

リユカはハンターを振り切り、無事に復活の珠を届けられるのか！？

引き続き、復活させてほしい人の投票を行っております

1つ注意しておきますが、復活の対象はミッション発動時に牢獄にいた者なので、ドクターには絶対投票しないで下さい

合わせて、ご協力お願いいたします！

ミッション5終了！　そして・・・（前書き）

復活の珠を4つ集め、牢獄へ向かっているリュカがハンターに見つかった

果たして、逃げ切れるのか！？

そして、このミッションの行方は！？

ミッション5終了！そして・・・

ハンターに見つかった、4つの復活の珠を持つリュカ。

リュカ

「ヤダー！こんな時に捕まりたくないよー！」

叫びながら一目散に逃げるリュカ。彼が逃げる先には・・・

ルイージ

「ダメだ・・・どれを取っても消えちゃう・・・これじゃ4つなんて集められ・・・えっ？何？」

リュカ

「ハンター！ハンター！」

ルイージ

「ハンター！？ちょっと・・・こっち連れて来ないでよー！」

ルイージも巻き添え・・・

ハンターは視界に捉えた逃走者を、見失うまで常に追い続ける。

> i 3 2 1 3 3 — 2 0 9 6 <

二手に分かれて逃げる。

ハンターが狙いを定めたのは・・・

ピーーーーーー

LOCK ON LUCAS

リュカだ・・・

リュカ

「うわぁー！まだ追い掛けて来るー！止めてー！」

尚も逃げ続けるリュカ。しかし長い事逃げている為、既に体力の限界。最早、逃走不可能・・・

リュカ

「あぁー・・・」 ポンツ

> i 3 1 9 8 6 — 2 0 9 6 <

リュカ

「うわー・・・何でまたこんな事になる訳・・・？」

牢獄の者を復活させるのは、危険と隣り合わせだ。

ルイージ

「怖い・・・！滅茶苦茶怖過ぎる・・・！」

その間に、ルイージは何とか逃げ延びた様だ。

プルルルル プルル♪

ロイ

「メールか・・・？」

スバル

「ええ〜！？リュカが捕まった！」

祈里

「折角復活の珠持ってたのに！？また集めなきゃいけないの！？」

ヴィータ

「こいつ・・・初めから動いてなきゃ、こんな事にはならなかったのによ・・・バカだな、やつぱり・・・！」

> i 3 1 9 8 7 — 2 0 9 6 <

残り45分までに4つの復活の珠を集められなければ、牢獄の者を助ける事は出来ない。

牢獄

レッド

「でも、意外とルイージやってくれるかもしれないぞ？」

ワルイージ

「そんな訳無えだろ、あんな奴がミッションやる姿なんか想像出来ねえよ・・・」

アミティ

「どっちとも言い切れないんだよね・・・もう5人しかいないっ

て事を考えると、やってるかもしれないし・・・」

シグナム

「本来の性格を考慮すれば、やっていないという事も否定は出来ない・・・」

デイジー

「ルイージって、結構その場の空気に流される所があるからね」

シャマル

「あと3分切ってるわ・・・誰か来てくれるかしら？」

スネーク

「来ない筈は無い・・・！残ってる奴らが、俺らの事を平気で見捨てる事など決してしない・・・！」

咲

「そうですよ。このままじゃ、残り30分くらいで全滅になり兼ねませんよ」

ヤング

「これで来なかったら、あいつ等全員に裏切り者のレッテルを貼り付けてやる・・・！」

ネス

「もう誰でもいいから来て・・・！」

アルル

「ボク達をもう1回外に出させてよ・・・！」

キャロ

「お願いですから、ゲームに復帰させて下さい．．．！お願いします．．．！」

タイムリミットが迫り、次第に神に祈る者まで出てきている。

ロイ

「ちくしょう．．．！ドクターもリユカも捕まっちゃった．．．！こうなったら、俺が何とかしてやる．．．！」

このミッションに闘志を燃やすロイ。しかし、色が被らずに4つの復活の珠を拾うのはかなりの難易度であり、相当なリスクを追う事になる。

ロイ

「くそっ．．．！これも違うのか．．．！」

スバル

「こんなにたくさんあるのに．．．何でダブらない組み合わせが出来ないんだ．．．！？」

スバルも復活の珠の収集に梃子ていす摺ずっている様だ。

スバル

「ヤバイ．．．！時間が無い．．．！ん．．．？ヤバイ．．．！」

スバルが見たのは．．．ハンター．．．

すぐさま近くの出店に身を隠す。ハンターがいて、思う様に拾えない。

スバル

「あつち行け、ハンター・・・！どんだけ復活させたくないんだよ・・・！？」

> i 3 1 9 8 8 — 2 0 9 6 <

祈里

「ハア・・・ハア・・・手当たり次第拾ってるだけなのに・・・ハンターがいる怖さからなのかな・・・？体力が異常なまでに消費されている気がする・・・」

復活の珠を拾い続けている祈里。なかなか4つ集められずにいる。

祈里

「あつ・・・もう2分切ってる・・・！急がなきゃ・・・！牢獄の皆が復活したがつてるんだもん・・・！このミッションは絶対に成功させないと・・・！」

諦めずに復活の珠を拾い続ける。

ルイージ

「ハンターいないね・・・よしっ・・・！今がチャンスだ・・・！」

先程ハンターに追われたルイージ。ハンターがいない事を確認し、再び復活の珠を拾い集める。

エリアには3体のハンター。彼等に見つかれば、逃げ切るのは容易

ではない。

ここまで殆ど動いていないヴィータ。^{ほん}

ヴィータ

「もうすぐ時間が切れるな・・・誰かやってんだろうな、このミッション・・・残り5人だもんな・・・まだ3分の2ぐらいしか経ってねえのに、人数が4分の1まで減るって・・・絶対おかしいだろ・・・？」

今回の逃走中の異常な展開に、少々困惑している様だ。

> i 3 1 9 8 9 — 2 0 9 6 <

ヴィータ

「まあ、逃走者があたし1人になったとしても、あたしはここでのままだり過ごしてやるよ・・・！賞金はあたしが全額もらっているんだからな・・・！」

ロイ

「ヤバ過ぎる・・・！あと1分20秒だ・・・！時間無えぞ・・・！」

スバル

「このままじゃ、ミッション失敗しちゃう・・・！」

祈里

「そうだったら、私達が不利のままだよ・・・！」

タイムリミットが迫り、焦り出す逃走者達。

ルイージ

「これで3つだ．．．あと1つ．．．どれが被らないんだろう．．．
．？うわっ．．．！あと1分だ．．．！」

ミッション終了まで、遂に1分を切った。

このままミッションをクリア出来なければ、牢獄から救出できなくなり、ハンターに捕まる確率が格段に高い状態で逃げ続けなければならなくなる。

ルイージ

「これだ．．．！ん．．．？4つちゃんとある．．．被ってないんだ！やったー！これで復活させられるぞ！」

色が重複せずに、4つの復活の珠を獲得出来た永遠の2番手。

これより彼は、1階の駐車場に設置された牢獄を目指す。その距離およそ150m。

ルイージ

「時間が無いな．．．！これはもうハンターに見つかるの覚悟で行くしかないね．．．！」

> i 3 1 9 9 0 — 2 0 9 6 <

牢獄へと走る永遠の2番手。果たして、間に合うのか。

レッド

「もう40秒切ってるぜ？これ来ないか？」

アルル

「ええ〜?」

ワルイージ

「おい、ふざけんじゃねえぞ！ヘタレどもが！」

デイジー

「ここから出しなさいよ！意気地なし！」

咲

「来ないとか考えられないよ！この人でなし！」

とうとう罵声が飛び交う様になった牢獄。

しかし、その時・・・

ルイージ

「復活の珠持って来たよ！」

ヤング

「あつ！ルイージ！」

キャロ

「あなたが復活の珠を!？」

アミティ

「でも偉いよ！ありがとうルイージ！」

シャマル

「あなたならやってくれるって、ずっと信じてたわ！」

ルイージ

「じゃあ・・・セットします！」

彼は、持ってきた4つの復活の珠を復活の台座に乗せる。

すると、珠に少しずつ色が浮かび上がってくるではないか。

そして浮かび上がった色は、肌色・紫色・藍色・・・そして、藤色・
・

更には名前までが浮かび上がってくるではないか。そこに書かれていたのは・・・

ルイージ

「えっと・・・スネークとシグナムとワルイージと・・・ネスだつて！」

ワルイージ

「うおおー！俺様復活だー！」

ネス

「またゲームに参加出来る！」

スネーク

かたじけな
「忝いルイージ・・・！」

シグナム

「この恩は必ず返すからな・・・！」

選ばれた4人は、嬉々として牢獄から出る。

祈里

「『ルイージの活躍により、スネーク・ワルイージ・ネス・シグナムが復活。現在逃走者は9人』……！逃走者が増えた……！すごく心強い……！」

ヴィータ

「おっ！リーダーが復活してきたか……！」

シグナム

「復活したからには、もう捕まるのは勘弁だな……！」

スネーク

「やはり俺は、ゲームに参加している方が性に合うな……牢獄の中では何も務まらん……！」

ワルイージ

「しかし、まさかルイージに助けられるとはな……お陰であいつに借りが出来たぜ……！」

ネス

「見直したよ、ルイージ……！君はもう永遠の2番手じゃない……！」

ルイージ

「皆逃げ切ってほしいな……勿論、ボク自身も最後まで逃げ切

らなきゃ・・・！」

賞金は1秒50円ずつ上昇している。逃げ切れば72万円を獲得出来る。

更にルイージは、自分と復活させた4人が全員逃げ切れば、216万円を手に来る。

その後、警察の捜索によってエリア内に設置された爆弾は、全てダミーである事が発覚した・・・

建物及び来客に大きな損害が生じなかった事は幸いであつたが、結果的に全ての者が誘拐犯に弄ばれた事となつた・・・
もてあそ

所は変わって、イベントの楽屋・・・散々誘拐犯の良い様にされてきた警部は、苛立ちを隠せないでいた・・・

警部（クロノ）

「あいつめ・・・！伊東さんを誘拐するだけでなく、これほど多くの人達にまで被害を与えて・・・一体何がしたいんだ・・・！？」

巡査（ユーノ）

「警部・・・」

城ヶ崎

「警部さん・・・」

・・・と、その時・・・

巡査（シャリオ）

「警部！クロノスを名乗る者からの新着メールが届いています！」

そのメールの件名には『残念だが・・・』と書かれていた・・・

警部（クロノ）

「開ける！」

巡査（シャリオ）

「はい！」

巡査は新着のメールを開ける・・・そこに書かれていた内容とは・・・

・

イベント関係者

「『1時間ほど前、伊東和葉を殺害した。死体は近くの山奥に捨てた。今頃野犬か熊の餌にでもなっているだろう。全てお前達のせいだ！ クロノス』・・・」

それは、伊東の殺害を知らせるものだった・・・

城ヶ崎

「こ・・・殺した・・・？和葉を・・・？う・・・嘘だ・・・そんなの嘘だ・・・！」

巡査（グリフィス）

「何て事だ・・・！」

巡査（ヴァイス）

「くそー！」

事件はとうとう、最悪の結末を迎えてしまったのだ・・・

しかし・・・

警察が伊東の死体があると思われる近くの山を搜索したところ、倒れている伊東を発見した。しかもその時、彼女にはまだ息があったのだ・・・

そう・・・誘拐犯がメールに書いていた事は、全くの出鱈目だったのだ・・・

その後彼女は、近くの病院へと搬送された・・・

伊東の生死を確認せずに彼女の身柄を放置した誘拐犯・・・結局、何が目的なのだろうか・・・

シグナム

「しかし、あたしがさっきまでいた時とは完全に環境が違うな・・・客が全くいない・・・何処の店も蛻もめけの殻だ・・・」

ワルイージ

「こんなに静かなショッピングモールは、何かヤダだな・・・閉まつてる店の中にいる気がして、俺様達の存在が忘れられたまま電気が消されそうだな・・・」

ネス

「皆車を残して出て行っちゃったんだね・・・駐車場に車がいつぱい止まったままだもん・・・これがいい事なのか悪い事なのか・・・」

スネーク

「こうも店に人がいないと、かなり違和感があるな・・・これで電気でも消えたら、完全に廃墟だぞ・・・？そんな所でこんな事してていいのかってなるしな・・・ん・・・？」

何かを見つけたスネーク。

スネーク

「これは・・・！これがあれば、かなり有利に進められるぞ・・・！」

従業員が使っていた台車に乗っていたと思われる、空の段ボールだ。

絶好のアイテムを獲得した秘匿工作員・・・

現在、ルイージの活躍により、逃走者は9人。

残りおよそ40分・・・生き残るのは誰だ！？

ミッション5終了！　そして・・・（後書き）

次回、誘拐犯が新たな要求を出す！

それに連動して起こる、驚愕のミッションとは！？

誘拐犯の奇行（前書き）

4人が復活し、有利となった逃走者達

しかし、そんな彼等に誘拐犯の魔の手が忍び寄る・・・

誘拐犯の奇行

> i 3 2 5 4 3 — 2 0 9 6 <

深夜のショッピングモールでの逃走中・・・

残り40分が過ぎ、賞金は60万円に達した。

現在、賞金は1秒50円ずつ上昇。逃げ切れば72万円。捕まれば0円・・・

スバル

「前回、機動六課のメンバーの中で1番残ったからね、あたし・・・今日もメンバーの中で1位を獲って、願わくば逃げ切りたいな・・・」

シグナム

「ライトニング分隊、そしてヴォルケンリッターの名誉に賭けて、自首は絶対に有り得ん・・・！ルイージからもらったこの命、決して無駄にはしない・・・！」

機動六課のメンバーが目指すのは逃げ切りのみ。

先程、空の段ボールを手に入れたスネーク。

スネーク

「段ボールを手にしたのはいいが、やはり場所を考えないと・・・1つだけポツンと段ボールがあったら、ハンターも確実に怪しむだろっつから、なるべく段ボールが多くある所に隠れなければ・・・」

隠れ場所を探しているが、なかなか見つけれない。

ワルイージ

「ミッションは基本的にやりたくはないが・・・ルイージに借りを作ってしまった以上、行かない訳にもいかないのも事実だし・・・何なんだ、このジレンマは・・・！」

ライバルに助けられた、スポーツ系悪役・ワルイージ。彼は今後どのような立ち回りを見せるのか。

ネス

「考えてみたら、今回変な事件起こってるよね・・・前回もとんでもない事件だったからね・・・」

前回の逃走中の舞台となっていた遊園地に遊びに行っていたネス。そこで巻き込まれた事件と、今回の不可解な事件との間に、何か密接な関係があるのではないかと思わずにはいられない様だ。

そんな彼の近くに・・・

祈里

「あつ・・・ネス君だ・・・」

山吹祈里だ・・・

祈里

「ネス君・・・！ネス君・・・！」

ネス

「へっ・・・！？あつ、祈里さんか・・・」

2人が合流。

祈里

「ネス君、復活おめでとう・・・！」

ネス

「あつ、有難う御座います・・・あの祈里さん・・・今回のゲーム、なんかおかしいと思いません・・・？」

祈里

「言われてみれば・・・逃げ切れそうな人達が、結構早めに捕まってるんだよね・・・」

ネス

「それもそうなんですけど、その発端って・・・メールにあった誘拐事件だと思いませんか・・・？」

祈里

「誘拐・・・ああ、確かに書いてあったね・・・あれが来てから、ミッシヨンの内容もどんどんおかしくなってる気がする・・・！」

ネス

「ですよね・・・？この事件が解決しないと、相当ヤバい事になりそう気がするんですよ、ボクは・・・」

祈里

「私も実はそう思ってたの・・・」

ネス

「多分、次のミッションがクリア出来るかで、この事件の結末が決まると思うんですよ……！」

祈里

「そうだね……！次のミッションは絶対に成功させないとね……！」

ネス

「はい……！それじゃ、ミッションが来たらすぐに動くという事で……」

祈里

「うん、分かった……！」

2人はミッションに必ず参加する事を誓い、そして別れる。

ロイ

「客がいないと、通路がいつも以上に広々として見えるもんなんだな」

2階の見晴らしの良い通りを歩いているロイ。

> i 3 2 4 4 6 — 2 0 9 6 <

そんな彼に、ハンターが接近……

ロイ

「閑古鳥^{かんこ}が鳴いているっていうのは、正にこの事なんだな……
何かの撮影の為に、客全員を掃けたって言う感じとも取れ……ん・

・・・？うおあゝ！ヤベエー！」

見つかった・・・

ロイ

「これはやべえぞ！1階に下りるか！」

近くにあった螺旋階段を利用し、一目散に逃げるロイ。

彼が逃げる先に・・・

> i 3 2 4 4 7 — 2 0 9 6 <

ベンチに隠れ続けているヴィータだ・・・

ヴィータ

「何だ・・・？うわつ、追い掛けられてやがる・・・！ここは危なそうだな・・・動くか・・・！」

ロイ

「何だあいつ！？速さが尋常じゃねえ！」

ヴィータの避難を余所よそに、尚も逃げ続けるロイ。しかし、ハンターとの距離が徐々に無くなっていく。最早、逃走不可能・・・

ロイ

「ぐわあゝ！」 ポンッ

> i 3 2 5 4 4 — 2 0 9 6 <

ロイ

「くそ．．．！こんな時に．．．マジかよ．．．？」

ここまでフェレ家のプライドを持って、全てのミッションに参加してきたロイ。遂に力尽きた．．．

ヴィータ

「危ねえ．．．！1階も絶対的安全な場所じゃねえな．．．」

ルイージ

「うわっ．．．！ロイが捕まった．．．！」

ワルイージ

「俺様．．．こいつ本命だと思ってたんだがな．．．」

シグナム

「この時でも、逃げ切れそうな奴が捕まるのか．．．やはり今回の逃走中は、確実におかしな事になってる．．．！」

スネーク

「やはり紛れる場所が無いな．．．」

隠れ場所を探し続けているスネーク。しかし、段ボールが積み重ねられている所が何処にも無い。

スネーク

「さっきの様に、冷蔵庫の陰に隠れていた方が良さそうだな」

電器館にある冷蔵庫の陰が良いという結論を出し、段ボールを捨てた．．．

スバル

「あんなに賑^{にぎ}やかだった建物に人がいないだけで、こんなに怖い所になるもんなのかな？」

ここに来て、かなりの恐怖を感じているスバル。

スバル

「ほら、レストランの中もガラガラだもん・・・あれ・・・？あれ誰だろう・・・？」

誰かを見つけた。

ヴィータ

「ここは不味いな・・・絶対ハンターが見つかる・・・！」

屋台の陰に隠れているヴィータだ・・・

スバル

「ヴィータさん？」

ヴィータ

「うおお・・・！？何だよ、スバルか・・・」

スバル

「ちよつとヴィータさん、いくら先輩だからって、電話で後輩を扱き使わないで下さいよ・・・！」

ヴィータ

「はあ？しょうがねえだろ、本当に疲れてんだからさ」

スバル

「折角逃走中に出させてもらってんですから、少しは貢献したらどうですか？」

ヴィータ

「まあな・・・確かに8人しかいねえし、多少厳しいのかもしれないな」

スバル

「でしょ？」

ヴィータ

「分かったよ。逃走中に名を残せるように、あたしも何とかやってみるよ」

スバル

「お願いしますよ。ミッションもちゃんと行って下さいね。皆で連携しないと、クリア出来ないかもしれないんですから」

ヴィータ

「OK・・・！じゃあ、その時にな」

互いにミッションで貢献する事を誓い、2人は別々の行動に。しかし・・・

ヴィータ

「スバルの奴、後輩の癖に生意気なんだよ・・・！お前が勝手に行きやいいだろうが、ミッションなんか・・・！あたしはどんな事になろうと、ミッションなんか参加しねえからな・・・！誰が行くか・

・・・！」

一方、イベントの楽屋では・・・

巡査（ユーノ）

「分かりました・・・警部。診察の結果、伊東さんに特に目立った外傷は無く、翌日にでも退院出来るそうです」

警部（クロノ）

「そうか・・・」

城ヶ崎

「警部さん、和葉を助けて下さいまして本当に有難う御座います・・・！あのメールが来た時、私はもう・・・」

警部（クロノ）

「そんなに泣かないで下さい、城ヶ崎さん。伊東さんが無事に帰ってきたんですから」

城ヶ崎

「いえ・・・でも、和葉が無事で良かった・・・！何とお礼を申し上げたらよいのか・・・」

警部に感謝の意を述べる、城ヶ崎・・・

・・・と、その時・・・

プルルルルルル！

警部（クロノ）

「!？」

城ヶ崎

「で・・・電話・・・？」

突如鳴り響く楽屋の固定電話・・・

巡査（グリフィス）

「犯人からでしょうか？」

警部（クロノ）

「可能性はあるな・・・おい！すぐに盗聴と逆探知の用意をしろ！」

巡査（ヴァイス）

「はい！」

巡査達はすぐさま、盗聴と逆探知の為の準備をする・・・

そして・・・

巡査（シャリオ）

「警部！準備出来ました！」

警部（クロノ）

「よしっ！では・・・」

イベント関係者

「は、はい・・・!」

イベント関係者が電話を取る・・・

イベント関係者

「も・・・もしも？」

???

「どうだったかね・・・？この私が計画した劇的なショーは・・・」

受話器の向こうから聞こえるのは、ボイスチェンジャーで声が変わえられていたが、紛れも無く誘拐犯の声だった・・・

イベント関係者

「シ・・・ショーって、どういう意味？」

???

「そんな君達に、私が更に面白い物を見せてあげよう・・・そこにいる警部と代われ・・・！」

イベント関係者

「えっ・・・？」

言われるがままに、イベント関係者は警部に受話器を渡す・・・

警部（クロノ）

「おい・・・面白い物って何なんだ？それとも、またハッターか？」

???

「クククク・・・ハッターなどでは無い・・・今私はワゴン車に

乗って、国道を走っている・・・そしてその目的地は、君達のいる
ショッピングモールだ・・・」

警部（クロノ）

「何？まさか観念して、手錠に掛かりに来るとでも言うのか？」

????

「まさか・・・もう1つ言っておく事がある・・・私が運転している
ワゴン車には、実は爆弾が大量に積み込まれている・・・」

警部（クロノ）

「!?!」

????

「ここまで言えば、流石に気付いただろうね・・・そうだ・・・私は、
このワゴン車とそのショッピングモールに突っ込む・・・そして、私も
君達もリセットだ・・・!」

警部（クロノ）

「貴様・・・正気か!?!」

????

「勿論だ・・・もしワゴン車を止めたいのなら、遠くから狙撃して
タイヤをパンクさせるなり、2台の車で挟み撃ちして身動きを取れ
なくするなり好きな様にしてくれて構わない・・・但し、それによ
って爆弾が爆発しないという保障は何処にも無いがね・・・」

そう言った直後、誘拐犯は一方的に電話を切った・・・

警部（クロノ）

「おい待て、この野郎！くそっ！」

警部は受話器を叩き付ける様に電話を切った・・・

警部（クロノ）

「おい・・・逆探知は出来たか？」

巡査（ユーノ）

「はい。ここからおよそ4 km離れた所を走行している模様です」

巡査（シャリオ）

「それと、車の速度からしてあと15分ほどでこちらに到達すると思います」

城ヶ崎

「じゅ・・・15分!？」

イベント関係者

「そんな速さで突っ込んできたら、このショッピングモールは一溜まりも無いですよ!」

巡査（グリフィス）

「警部・・・！一体どうしたらいいんでしょうか？」

巡査（ヴァイス）

「警部!」

警部（クロノ）

「『爆弾が爆発する保障は何処にも無い』だと・・・!? そんな事は有り得ない・・・！絶対何処かに抜け目がある筈だ・・・！絶対

に・・・！」

自爆テロを実行する為、エリアへ向け走り続けるワゴン車・・・
その中には、爆弾だけでなくハンターも積み込まれていた・・・

ルイージ

「何でだろう・・・？また恐怖が蘇って来たよ・・・」

プルルルル プルル♪

ルイージ

「えっ・・・？何・・・？」

メールだ・・・

ネス

「ミッション6来た・・・！えっと・・・『現在、誘拐犯が運転する爆弾が積み込まれたワゴン車が』・・・」

スネーク

「『君達のいるエリアに向かって進行中だ』・・・爆弾・・・？という事はまさか・・・自爆テロか・・・！？」

シグナム

「『中には7体のハンターが乗っており、残り20分になると到着しエリアに放たれる』・・・」

スバル

「7体も・・・！？7体はかなり大きいって・・・！」

祈里

「『阻止するには、シアターホールの映画館のスクリーンに表示されている暗証番号を』・・・」

ワルイージ

「『1階駐車場に設置された誘導装置に入力し、ワゴン車を停止させなければならない』・・・」

ヴィータ

「シアターホール・・・？2階のこれか・・・？」

MISSION？ハンターワゴンを停止せよ！

現在、逃走者のエリアへ向かって国道を走行しているのは、誘拐犯が運転する1台のワゴン車。中には7体のハンターが乗っており、残り20分になると到着し、エリアへと放たれる。阻止するには、シアターホールの中にある9つの映画館のスクリーンに表示されている暗証番号を1階の駐車場に設置された誘導装置に入力し、ハンターワゴンを止めなければならない。但し、ハンターワゴンを停止出来る暗証番号は、9つの内1つだけ。

なお、シアターホールは2階南口を出た正面にあり、このミッション時のみ進入可能となる。

> i 3 2 4 4 9 — 2 0 9 6 <

ネス

「失敗したら10体になっちゃうじゃん！止めなきゃ！」

シグナム

「これはかなり危機的状況だな・・・！」

エリアには3体のハンター。動けば見つかる危険が高まる。

ミッション終了まで、およそ14分。

ハンター放出を防げるか！？

誘拐犯の奇行（後書き）

遂に自爆テロを決行した誘拐犯

逃走者達は、誘拐犯の行為を阻止出来るのか！？

しかし、シアターホールには逃走者達の知り得ない罠が・・・！？

ハンター放出阻止へ！（前書き）

誘拐犯の奇行により、窮地に立たされた逃走者達

彼等はそこから脱せられるのか！？

ハンター放出阻止へ！

残り20分までに、シアターホールの中にある映画館のスクリーンに表示されている暗証番号を1階の駐車場に設置された誘導装置に入力しなければ、ハンターワゴンが到着後爆発し、中にいる7体のハンターがエリアへと放たれてしまう。

ルイージ

「あわわわわ……ば……爆弾積んでるって……ハンター放出以前に、このショッピングセンターが豪い事になるよ……こんな夜中にさ……」

祈里

「こんなの行かない訳無いでしょ……！ハンターがいつぱい出てきちゃうんだもん……！とりあえず2階のシアターホールに行つて暗証番号を確認しよう……！」

スバル

「このミッションは、皆で連携しながらじゃないとクリア出来ないな……！」

ネス

「行く、行く……！残り20分で10体になったら、絶対誰も最後まで行き付かないよ……！」

ハンター放出を阻止する為、続々と移動する逃走者達。

しかし、エリアには3体のハンター。ミッションに動けば遭遇するリスクが高まる。

ワルイージ

「どうすっかな．．．？」

ライバルに助けられた男．．．

ワルイージ

「誰かが暗証番号を見ってくれるとは思うんだよ．．．なら俺様は、誘導装置の所で待つて誰かから聞き出すか．．．」

暗証番号の確認には動かず、誘導装置を目指す様だ。

シグナム

「ハンターが増えるのは、正直きつい．．．だが、9つの番号の内1つでしか停められないというのは、何か裏がありそうだな．．．しかし、そんなのに怯^{おび}えていたら何も出来はしない．．．ここは腹を括^くって挑むしかない．．．！」

こちらも復活したヴォルケンリッターの将。彼女もまた、果敢にミッションに挑む。

ルイージ

「さっきのミッション、このボクでも出来たんだ．．．！行つてみよう．．．！少し勇氣出てきたし．．．もう少し頑張つてみるか．．．！」

恩人であるルイージも、ミッションに向かう。

スネーク

「制限時間がたっぷりある上、見た感じ簡単なミッション．．．こ

ういうのには、とんでもない罠が仕掛けられてる可能性がある・・・それが何であるか分からない状態では、不用意に動かない方がいいな・・・今は動いたらハンターの思う壺だ・・・！」

新たな命を授かった秘匿工作員。ミッションの裏を探る為、今は動かない・・・

スバルとの口約を破り、屋台の陰に隠れるヴィータ。

ヴィータ

「絶対ミッションになんか行かねえからな・・・！ハンターが何体になろうが、隠れ続けてれば絶対逃げ切れるんだよ・・・！今回のゲームでは、あたしだけが賞金を獲るんだ・・・！」

祈里

「ここをまっすぐ行けば、南口に出るね・・・そしたらすぐだ・・・！」

暗証番号の確認の為、シアターホールを目指す祈里。

祈里

「あっ・・・！」

誰かを見つけ、近くの曲がり角に身を隠す。

彼女が見たのは・・・

> i 3 2 9 5 5 — 2 0 9 6 <

ハンターだ・・・

祈里

「あの様子からして、外に出るみたい・・・」

ハンターは祈里には気付いていない様だ。そして、そのまま建物の外へ・・・

祈里

「気付かれない様に行こう・・・!」

> i 3 2 9 5 7 — 2 0 9 6 <

ハンターに悟られない様に後を付ける。

祈里

「このままだと、シアターホールに入っていくかも・・・どうしよう・・・?」

ハンターは、エリア内の進入可能なテナントも含め逃走者を搜索する。無論、シアターホールも例外ではない。

祈里

「うわぁ・・・入ってっちゃった・・・あれ・・・?すぐ出てきちゃった・・・」

シアターホールに進入したかと思いきや、再び出てきたハンター。そのまま別の方向へと歩き始めた。

祈里

「背を向けてる・・・今がチャンス・・・!」

> i 3 2 9 5 8 — 2 0 9 6 <

ハンターの間を見て、移動する祈里。最早、形振り構^{なり}っていられない……

ワルイージ

「誘導装置は……牢獄の近くか。南口出て……タクシーのりば辺りだな」

誘導装置を目指しているワルイージ。

ワルイージ

「ただ直接そっちに向かうとなると、通路が広いから見つかるリスクが高いな……西口から出て、回り込むっていうのも手だな……そっちでいくか」

危険を考慮し、西口へと向かう。正に急がば回れ……

祈里

「うわぁ……中は結構入り組んでるんだね……」

シアターホールに進入した祈里。

祈里

「館内のマップを見た限り、この辺りだと思っただけど……あつた……！」

1番の映画館の前に到着。早速ドアを開けようとする。

しかし・・・

祈里

「あれ・・・？うん・・・！えっ・・・！？鍵掛かってる！入れないよ、これじゃあ！」

映画館のドアに鍵が掛かっていて、中のスクリーンに表示されている暗証番号を確認出来ない。

祈里

「他の所も入れないのかな・・・？」

彼女は続いて2番・3番・4番の映画館を調べるが、全て鍵が掛かっていた。

祈里

「どうしよう・・・？鍵を開けないと中に入れないって事・・・？でも、鍵なんて何処にも無いよ・・・」

戸惑いを隠せず狼狽^{うろた}える祈里。

そこへ遅れて、スバルとネスがシアターホールに入ってきた。

スバル

「ここも誰もいないね・・・受付の人も皆避難しちゃったんだ・・・」

「

ネス

「そんな事より、早く暗証番号を確認しましょうよ」

スバル

「そうだね。ハンター7体はきついよ……あれ……？誰がいる……」

ネス

「えっ？」

祈里

「あつ……！スバルさんにネス君……！」

スバル

「祈里……もう来てたんだ」

ネス

「暗証番号確認出来ました？」

祈里

「それが……全部の映画館のドアに鍵が掛かってて、中に入れないの」

スバル

「ええー！？鍵が掛かってる！？」

ネス

「それじゃあ、番号を確認出来ないじゃないですか！」

祈里

「そうなの。でも鍵なんてここに来るまで全然見なかったし、もし受付の人が持つて行っちゃってたら、このミッションクリア出来ないって事だよ」

スバル

「いやっ、絶対何処かにある筈だよ。あたしは、このシアターホールの何処かにあると思うんだよ」

ネス

「ボクも正直そう思います。皆で手分けして探しましょう!」

祈里

「うん!分かった!」

映画館のスクリーンに表示されている暗証番号を確認する為には、それぞれの映画館のドアを解錠しなければならない。しかし、鍵の在り処は逃走者達が自力で探すしかない。

シグナム

「この道の方が、結構近道になっているかもしれないな・・・」

ミッションに挑むシグナム。

その時・・・

ピロロロロロロ♪

シグナム

「ん・・・?電話・・・?ヴィータからか・・・何だ?」

ヴィータ

「リーダー・・・?ミッション行くのか・・・?」

シグナム

「ああ、当然だ・・・ハンター7体放出は、あたし達にとってかなりのマイナスだからな・・・」

ヴィータ

「そうか・・・じゃあな、暗証番号が分かったらあたしにすぐ連絡してくれ・・・あたしは、誘導装置の方へ向かうから・・・」

シグナム

「分かった・・・主はやての為に、ここはお互いに連携しなければ・・・!」

ヴィータ

「おお・・・!じゃあ、また後でな・・・!」

シグナム

「ああ・・・絶対に捕まるんじゃないぞ・・・!」

2人は電話を切った。

ヴィータ

「済まねえなリーダー・・・1人で行って来てくれ・・・あたしは何としても賞金を獲得する為に、誘導装置の所には行かねえよ・・・絶対ミッションには参加しねえって決めてるからな、あたしは・・・」

ルイージ

「階段下りるの怖いな・・・下り切った所にハンターいたら最悪だよ・・・でも、兄さんの為にもボクが頑張らなきゃ・・・!このままじゃ兄さん共々任天堂から追放されちゃう・・・!」

4階の駐車場からシアターホールを目指している配管工の双子の弟。今回もヒーローとなれるのか。

電器館の冷蔵庫の陰に隠れているスネーク。

スネーク

「あと10分程度でハンターが来ちまうな・・・しかし、まだクリアの予兆が感じられん・・・やはり何か罠があったみたいだな・・・よしっ・・・！俺も行くか・・・！」

意を決して、ミッションへと動き出す。

> i 3 2 9 5 9 — 2 0 9 6 <

その近くにハンター・・・

スネーク

「そのエスカレータを上っていくと・・・ここに出るのか・・・もう少し先のエスカレータの方が近くに出れそうだな・・・向こうのを目指すか・・・」

ピーーーーーービビビッ

LOCK ON SNAKE

見つかった・・・

スネーク

「うおお！？こんな時にハンターが！ヤベエぞ、これは！」

追って来るハンターに反応し、一目散に逃げるスネーク。

スネーク

「折角復活したというのに、捕まってたまるか……！」

曲がり角を利用し、更に逃げる。

そして、逃げた先にあったエスカレータで上の階へ。

どうやら、上手く撒いた様だ。

スネーク

「危ねえ……！しかし、何とか2階に上がって来れたぞ……！」

> i 3 2 9 6 0 — 2 0 9 6 <

しかし、彼が向かう先に別のハンター……

スネーク

「この先にシアターホールがあるな……このまま行つて、暗証番号を確認するか……ってこっちにもハンターか!？」

ハンターと鉢合わせになり、再び一目散に逃げるスネーク。しかし、ハンターとの距離があまりにも近過ぎる。最早、逃走不可能……

スネーク

「ぐおあー！」 ポンッ

> i 3 2 9 6 1 — 2 0 9 6 <

スネーク

「ちよつと待つてくれよ……！俺、今日何にもしてねえぞ……！嘘だろ……？」

復活の秘匿工作員。再び牢獄に逆戻り……

ルイージ

「えっ……？『スネーク確保』……？ええっ！？また捕まったの……！？折角助けたのに何で……！？」

牢獄

レッド

「『スネーク確保』だつてよ」

レッド以外

「ええっ！？」

アミティ

「あの人、復活した人の中で1番逃げ切れそうだったのに！」

ヤング

「酷い！マジで酷過ぎる！」

咲

「何してんだよー！？」

シャル

「ルイーダさんに申し訳ないわよ、こんな結果出して!」

スネーク

「牢獄の奴等・・・絶対『何してんだ』って言ってるよな・・・うわあ、行きたくねえ・・・!」

ヴィータ

「おい・・・!何やってんだよ・・・!ちゃんとミッションやってんのか、あいつ等・・・!?!」

ワルイーダ

「あれだな!」

漸く誘導装置の許に辿り着いたワルイーダ。

ワルイーダ

「これで暗証番号を誰かから聞き出せばいいんだな・・・よしっ・・・!」

彼は誰かに電話を掛ける。

ピロロロロロロロ

ネス

「えっ、何?こんな時に誰だよ?ワルイーダからだ・・・はい?」

ワルイーダ

「ネスか？俺様な、今誘導装置の前にいるんだよ」

ネス

「あつ、そうなの？」

ワルイージ

「おお。だから、もし暗証番号が分かったら俺様に電話してくれ。頼むぜ」

ネス

「了解！」

2人は電話を切った。

スバル

「どうしたの？」

ネス

「今ワルイージから電話があつて、誘導装置の前にいるから暗証番号が分かったら連絡してくれって」

スバル

「そうなんだ・・・じゃあ、あたし達は早いところ鍵を見つけて暗証番号を確認しよう・・・！」

ネス

「はい・・・！」

現在シアターホールでは、祈里・スバル・ネスの3人が映画館のドアの鍵を探しており、ワルイージは誘導装置の前で他の逃走者から

の連絡を待っている。更に、ルイージとシグナムは何も知らないままシアターホールへと向かっている。

ハンター放出まで、およそ7分30秒。

逃走者達はハンター放出を阻止し、ショッピングモールを守れるのか！？

ハンター放出阻止へ！（後書き）

刻一刻と迫るハンター放出の危機・・・

逃走者達は、ハンターワゴンを止められるのか！？

しかし、そんな中で新たなトラップが作動し始めようとしていた・・・

一体どうなってしまうのか！？

迫る破滅の時・・・（前書き）

ミッションクリアを目指す逃走者達

しかし、そんな彼等を襲う驚異のトラップとは！？

迫る破滅の時・・・

現在、シアターホールにいるのは祈里・スバル・ネスの3人。彼等は館内の何処かにある映画館の鍵を見つけ、スクリーンに表示されている暗証番号を確認しなければならない。

ネス

「鍵何処なの？」

スバル

「受付にも無いってどういう事？」

祈里

「もつと根気よく探しましょう！」

ワルイージ

「全然連絡来ねえぞ・・・！こんな所に立ち止まっていたら、格好の的だぞ・・・！誰でもいいから早く連絡を・・・！」

ワルイージは誘導装置の前で、逃走者からの連絡を待つ。しかし彼は、シアターホールで起こっている出来事を知らない。

ルイージ

「もう大丈夫かな・・・？ハンターいないかな・・・？」

ルイージもシアターホールを目指しているが、何度もハンターに足止めを食らっており、思う様に進めないでいる。

ルイージ

「このままじゃ、いつまで経っても着かないよ……！」

一方、ミッションに全く興味が無いこの女は……

ヴィータ

「おい……！シアターホールに行つて、番号確認して、誘導装置に入れるっただけの話だろ……？何で終わってねえんだよ……？時間無えんだよ……！早くクリアしろよ、ウスノロ……！」

行動力は皆無でも、口だけは達者の様だ。

その時……

ピロロロロロロロ

ヴィータ

「電話……？鳴らすんじゃないよ、ハンター来るだろ……！誰だよ、空気読めねえのは……！？」

苛立ちながらも携帯のモニターを確認する。

電話を掛けてきた、空気の読めない逃走者とは……

ヴィータ

「リーダー……？何だ？」

シグナム

「ヴィータか……？お前、本当に誘導装置に向かつてるのか……？」

ヴィータ

「な．．．何言つてんだよ．．．？当たり前じゃねえか．．．！」

シグナム

「ならば、何故眼鏡売りの屋台に凭もたれ掛かつてるんだ．．．？」

ヴィータ

「へっ？」

慌てて辺りを見渡すヴィータ。すると．．．

ヴィータ

「ゲッ！」

視線の先に、電話をしているシグナムの姿が．．．それが徐々に近付いてくる．．．

ヴィータ

「リ．．．リーダー．．．な、何でこんな所に．．．？」

シグナム

「それはこっちの台詞だ．．．！お前、誘導装置の所に行くんじゃないかったのか．．．？何故こんな所で隠れてる．．．？」

ヴィータ

「い．．．いいじゃねえか、隠れてたつてよ．．．！隠れたらダメだっていうルールなんか無えだろうが．．．！あたしはルールに則のっとってやつてるだけだ．．．！」

シグナム

「全くお前って奴は・・・主はやてに何と言われても、あたしは知らないぞ・・・!」

ヴィータ

「序盤で捕まった奴に、そんな事言われたくねえな・・・!」

シグナム

「ぐっ・・・!と・・・兎に角、あたしは今からシアターホールに向かう・・・お前も誘導装置に向かえ・・・必ずだぞ・・・!いいな・・・?」

ヴィータ

「面倒臭えな・・・分かったよ、行くよ。行く行く」

シグナム

「よしっ・・・必ずあたし達の手で、このミッションをクリアさせるぞ・・・!」

ヴィータ

「おお・・・!」

任務を分担し、確実にミッションをクリアさせる事を誓った2人。

そしてシグナムは、シアターホールへ暗証番号の確認へと動く。

ヴィータ

「リーダーの言う事であっても、今回ばかりは絶対に動かねえからな・・・!あたしは今日、隠れて逃げ切るって決めてるんだ・・・!誰がリスクなんか負うか・・・!」

未だに鍵を見つけれないでいる3人。

スバル

「くそ……！何で無いんだよ？」

祈里

「探せる場所は全部探したのに……」

ネス

「ん……？待てよ……」

スバル

「ん？」

祈里

「どうしたの、ネス君？」

ネス

「スぺアキー……意外な隠し場所……ひょつとして……！」

ネスが突然、何か閃いたのか、入口の方へと走り出す。

そして彼は、入口に辿り着くや否や壁に掛かっている映画のポスターが入っている額縁を動かし始めたではないか。

祈里

「ちょ……ちよつとネス君！それ公共の物だよ！？」

スバル

「いくら意外な場所かもしれないって言っても、そんな場所になん

か・・・！」

ネス

「ボクの勘が正しければ、どれかに絶対・・・！」

2人の少女の言葉も耳に入らず、己の勘を信じて額縁を物色する超能力少年。

そして・・・

ネス

「あっ！あつた！」

遂に鍵の束を発見。

祈里

「ネス君すごい！ホントに探し当てちゃったよ！」

スバル

「でも、何でここだと思ったの？」

ネス

「ボクの家、ポストの中の上の方に家の鍵のスペアをテープで留めてあるのを思い出して・・・若しかしたら、これもそんな感じであるんじゃないかと思って・・・」

スバル

「兎に角ナイスだよ！ナイス！」

祈里

「それじゃあ、早いところ暗証番号確認しよう！もうすぐで残り6分だから！」

ネス

「そうですね！」

3人はこれより、暗証番号の確認に動く。

しかし、7体のハンターが積み込まれたワゴン車を止められる番号は9つの内たったの1つだけ。

ルイージ

「不味い……！このままじゃ、何もせずに終わっちゃっよ……！」

シアターホールへと急ぐルイージ。

しかし……

ルイージ

「うわっ……！ハンターいるじゃん……！」

> i 3 3 3 0 7 — 2 0 9 6 <

窓ガラス越しに、ハンターの姿を捉えた。

ルイージ

「来るな、来るな、来るな……！向こう行け、向こう行け、向こう行け……！」

ハンターに念を送る永遠の2番手。しかし・・・

ルイージ

「うわぁ・・・こっち来ちゃったよ・・・また戻らないと・・・」

ハンターの接近に、再び階段を上がり逃げる。

ハンターはルイージに気付いていない様だ。

ルイージ

「もうさ・・・何でハンターがこの辺を巡回してる訳・・・？折角3階まで下りて来れたと思ったら、また4階が上がっちゃったしさ・・・いつになったら、ボクを2階に下ろしてくれるの・・・？」

ネス

「ここだ、1番！」

1番の映画館にやってきた3人。ネスがドアの鍵を開ける。

ネス

「開いた！」

スバル

「あれか、暗証番号って！」

祈里

「えつと・・・821・・・821！」

ネス

「よしっ！早速ワルイージに・・・」

ピロロロロロロ」

ワルイージ

「おっ・・・来たぞ・・・！ネスからだ・・・！はいよ」

ネス

「ワルイージ？暗証番号1つ分かったよ。821」

ワルイージ

「821な・・・サンキュー！」

ネス

「このまま掛け続けていいかな？もし違ってた場合の為に・・・」

ワルイージ

「ああ、勿論さ。よしっ・・・！821と・・・」

ワルイージは誘導装置に暗証番号を入力。

しかし・・・

ワルイージ

「はああ！？『入力ミス』だつてよ！」

ネス

「入力ミス？じゃあ、違うんだよ」

ワルイージ

「マジでか・・・！」

ネス

「とりあえず、これから2つ目を確認するから・・・絶対切んないだよ」

ワルイージ

「分かってるって・・・!」

間違った暗証番号を入れてしまったワルイージ。

すると、エリアの屋上に巨大なゲージが現れ、その中に3つの黒い影が・・・これが後ほど、逃走者達を更に苦しめる事になる・・・しかし、彼等はその事に全く気付いていない・・・

> i 3 3 3 0 9 — 2 0 9 6 <

シグナム

「ヴィータ・・・ちゃんと約束を守ってくれているのか・・・?あいつの行動からして、かなり怪しい・・・」

ヴィータへの疑問を抱きながら、2階へと上がってきたシグナム。

シグナム

「ん・・・?何かいるぞ・・・!」

何かを見つけ、屋台の陰に隠れる。

彼女が見つけたのは・・・

> i 3 3 3 0 8 — 2 0 9 6 <

ハンターだ・・・

シグナム

「これは・・・確実にこつちに来るな・・・」

身体を屋台の陰に隠しながら、ハンターをかわす。

シグナム

「ん・・・？このままだと・・・ハンターがシアターホールに入っていくぞ・・・！これは不味い・・・！」

ハンターがシアターホールの中へ・・・狙われた3人・・・

ワルイージ

「ダメだ。682も違うみたいだ」

ネス

「嘘・・・」

2つ目も間違いだった・・・

ゲージの中の黒い影が、更に3つ増えた・・・

祈里

「次は3つ目だね・・・って嘘！」

ハンターに見つかった祈里・・・

スバル

「い・・・祈里!？」

ネス

「えっ?えっ?えっ?」

ワルイージ

「どうしたんだよ?今、誰かの悲鳴が聞こえた様な気が・・・」

ネス

「一緒にいた祈里さんが、ハンターに追われたんだよ」

ワルイージ

「何だと!?ハンターって、シアターホールの中にも入って来るのかよ!？」

2人の会話を余所^{よそこ}に、一目散に逃げる祈里。

祈里

「嫌だー!来ないでー!」

シアターホールを出て、逃げ続ける。

シグナム

「誰か来るぞ・・・!」

屋台の後ろに隠れていたシグナム。シアターホールから出てきた祈里とハンターの姿を捉えた。

> i 3 3 3 1 0 — 2 0 9 6 <

シグナム

「山吹祈里か・・・あいつが捕まったら、いろいろと厄介な事になる・・・！絶対に捕まるな・・・！」

祈里の振り切りを願いながらも、彼女は足早にシアターホールへと向かう。

ピーーーーー

LOCK ON YAMABUKI

尚も逃げ続ける祈里。しかし、長距離では彼女に勝ち目などありはしない。最早、逃走不可能・・・

祈里

「うわあゝ！」 ポンッ

> i 3 3 3 1 1 — 2 0 9 6 <

祈里

「捕まったら・・・逃げ切れなかった・・・スバルさんにネス君、ゴメンなさい・・・ミッシェンお願いね・・・」

プルルルル プルル♪

ワルイージ

「ん・・・？」

牢獄

レッド

「うわぁ！」

デイジー

「えっ？何？」

レッド

「『山吹祈里確保』だつてよ！」

レッド以外

「ええ！？」

咲

「あの祈里が捕まった！？」

キヤロ

「あんなに一所懸命頑張ってたのに！？」

アルル

「うわゝ・・・これミッションクリアが相当厳しくなったんじゃない？」

ロイ

「あいつが捕まったとなると、かなりヤバいぞ・・・！」

ヴィータ

「とうとう祈里が捕まったか・・・まあ、当然の結果だな・・・！
好感度上げようとミSSIONに参加するからそうなるんだよ・・・
！こいつ、ホントにバカ過ぎるぜ・・・！」

ルイージ

「うわわわわわ・・・逃走成功の候補が捕まっちゃったよ・・・こ
れ絶対ヤバいつて・・・！」

ワルイージ

「くそっ！573も違う！」

ネス

「嘘・・・また間違い？」

これで3回入力ミスとなり、ゲージの中の黒い影が9つにまで増加・
・

スバル

「どうしよう？番号は違うし、祈里は捕まっちゃうし・・・絶体絶
命だよ、これ・・・！」

シグナム

「あたしが手伝おう」

ネス

「あっ・・・あなたは・・・」

スバル

「シ・・・シグナムさん！？」

シグナム

「2人とも急いだ方がいいぞ・・・！もう残りは3分近くだ・・・！」

スバル

「さ・・・3分!？」

ネス

「じゃあ、ホントに急いだ方がいいですね・・・！」

シグナムが合流し、再び3人で暗証番号の確認を行う事に。

> i 3 3 3 1 2 — 2 0 9 6 <

ハンター放出まで3分を切った。

このままでは7体のハンターが放出され、その数は合計10体となってしまう。

果たして、どうなってしまうのか!？

迫る破滅の時・・・（後書き）

残る逃走者はルイー・ジ・ワルイー・ジ・ネス・ヴィータ・スバル・シ
グナムの6人

彼等はミッシェンをクリアし、ハンターワゴンを止められるのか！？

そして、屋上に現れた謎の黒い集団の正体とは！？

ミッション6終了！　そして・・・（前書き）

ハンター放出まで3分を切った

逃走者達は、上手く連携してミッションをクリア出来るのか！？

そして、誘拐事件の信じられない結末とは！？

ミッション6終了！　そして・・・

エリアへ徐々に近付いてくる、伊東和葉の誘拐犯が運転するハンターワゴン。

このまま行けば、中にいる7体のハンターが放出され、その数は合計10体となる。

ワルイージ

「くそっ・・・！174もダメみたいだ・・・！」

ネス

「そう・・・じゃあ、次5番行くね」

シアターホールにいるネス・スバル・シグナムが暗証番号の確認に動き、ワルイージがそれを誘導装置に入力する作戦の様だが、3人はまだ正しい番号を見つけられないでいる。

ワルイージ

「ちよつと急いでくれよ・・・！このままだと、こっちにもハンターが来るかもしれねえんだぞ？」

ネス

「分かってるよ・・・！こっちも出来る限り早くやってるつもりだよ・・・！でも、ホールの中がすごく入り組んで・・・」

ワルイージ

「マジでか・・・」

ネス

「あつ！5番の暗証番号分かったよ！295！」

ワルイージ

「295つと・・・ダメだ！また『入力ミス』だ！」

ネス

「次は6番だね・・・」

これで5回入力ミスをした事となり、屋上駐車場にあるゲージの中に15体の謎の黒い影・・・

彼等は一体何者なのか・・・

ミッションに一切参加せず、ずっと隠れ続けているヴィータ。

ヴィータ

「失敗したら、そのドアから入って来るんだよな・・・ここは危険だな・・・さっきのベンチの下に隠れとくか・・・あたしはやっぱり、あそこが1番安全だと思うんだよ・・・よしっ・・・向かうか・・・！」

元々の隠れ場所へと移動する。

漸く^{せうめ}2階に下りてきたルイージ。

ルイージ

「やっと2階に着いた・・・もう絶対ハンター来ないですよ・・・って言った傍からっ！？」

ハンターに見つかった・・・

> i 3 3 7 2 8 — 2 0 9 6 <

曲がり角を利用し、一目散に逃げるルイージ。

ルイージ

「ヤダ・・・！止めて・・・！来ないでよ・・・！」

彼は近くのゲームセンターに逃げ込む。

何とか撒いた様だ。

ルイージ

「何でさ・・・ボクって、こうもハンターを呼び込むのかな・・・？さっきだって、4階で何回もハンターとニアミスしたし・・・それで、やっと2階に下りてきたら下りてきたでハンターに追われるし・・・」

ハンターを何回も目撃し、かなり滅入っている様だ。

> i 3 3 7 2 9 — 2 0 9 6 <

7体のハンター放出まで、2分を切った。

ワルイージ

「何でだよ・・・？486も違つとよ」

ネス

「またハズレなの？」

スバル

「どうするの？もう2分切ってるよ？」

シグナム

「2人ともそんなに慌てるな・・・」

スバル

「このままだとハンターが7体も来ちゃうんですよ？慌てずにいられる訳無いじゃないですか・・・！」

シグナム

「それは勿論そうだが、ここで慌てて判断を誤れば、それこそミッションが失敗し兼ねない・・・！こういう危機的だからこそ、冷静になる事も必要だ・・・！」

スバル

「まあ・・・そうですね・・・」

ルイージ

「ハンターいない・・・？いるじゃん、そこに・・・！」

シアターホールを目指すルイージ。しかしハンターを目撃し、思う様に進めない。

ワルイージ

「ヤベエぞ・・・！そろそろハンターがここを嗅ぎ付けてきそうだな・・・！」

誘導装置の前にいるワルイージ。顔色からは分らないが、彼もハ

ンターの恐怖に慄^{おの}いている。

スバル

「あつた！7番だ！」

ネス

「ホントだ！えつと．．．507．．．」

シグナム

「あと1分半だぞ．．．！」

ネス

「ワルイージ！507！」

ワルイージ

「OK．．．！507つと．．．！」

ワルイージは誘導装置に暗証番号を入力。

すると．．．

ワルイージ

「おお！『緊急停止』つて出たぞ！」

ネス

「『停止』つて事は．．．停まったんだよ、ワゴン車！」

ネスの言う通り、7体のハンターを乗せたワゴン車が停止。

> i 2 7 6 9 8 — 2 0 9 6 <

ハンター放出は免れた。

プルルルル プルル♪

ルイージ

「あつ、メール・・・えつと・・・」

牢獄

レッド

「おお！『ネス、スバル・ナカジマ、シグナム、ワルイージの活躍により、ハンターワゴン停止』！」

レッド以外

「おおー！」

レッド

「『ハンター放出を免れた』！」

アミティ

「すごい、すごい！」

シャマル

「復活した人皆活躍したわね！」

咲

「そうだね！」

ヤング

「いやゝ．．．やっぱりあんたの同士はすごいなゝ！」

スネーク

「俺を『あんた』って呼ぶな．．．」

ルイージ

「あつ．．．クリアしたんだ．．．良かったゝ．．．でも皆ゴメン、何の力にもなれなくて．．．」

ヴィータ

「ハンターは引き続き3体が．．．10体にならなくて良かったぜ．．．！それにしても、あいつ等もつと早くクリアしろよな．．．！時間たつぷりあったんだし．．．おかげで、あたしまで冷や冷やしただろ．．．！」

シグナム

「よしつ、これで恐らくミッションは終わりだろう．．．このまま逃げ切るぞ．．．！」

ネス

「勿論．．．！1度無くなった命、また消す訳にはいかないからね．．．！」

スバル

「あと20分切ったね．．．逃げ切りまでもう少しだ．．．！」

ワルイージ

「よしっ！これでルイージに借りを返せそうだ！後は逃げ切るだけ・
・これさえ叶えば・・・！」

???

「くっ・・・！な、何故だ・・・！？何故急に動かなくなった・・・
！？」

誘導装置の発動により緊急停止し、道路の中腹で動かなくなってし
まった誘拐犯のワゴン車・・・

???

「これでは、折角立てた計画が台無しだ・・・！」

焦った誘拐犯は、爆弾テロの実行を諦め、なんと車を乗り捨ててそ
の場から逃走しようとした・・・

だが・・・

???

「・・・！」

ワゴン車の後方から、何台ものパトカーが走って来るではないか・
・更には、パトカーの中から警察官がぞろぞろと現れ、誘拐犯の方
へと走ってくる・・・

???

「こっちはダメか・・・ならば・・・何・・・！？」

警察官から逃げようと振り返ると、視線の先には鳴海メインプレイスから出てきた警部達が走って来る姿があった・・・

警部（クロノ）

「おいクロノス！貴様にもう逃げ場は無い！観念しろ！」

警察に囲まれ、万事休すの誘拐犯・・・強行突破を試みるものの、逃げる事など到底不可能・・・そのまま警部に取り押さえられた・・・

警部（クロノ）

「確保ー！」

誘拐犯は手錠を掛けられ、顔を隠していた帽子・サングラス・マスク等が剥ぎ取られていく・・・そして露になった誘拐犯・クロノスの正体とは・・・

警部（クロノ）

「こ・・・こいつ・・・まさか・・・」

巡査（シャリオ）

「警部！この人・・・以前『ミッドナイトランド』を襲ったアルファと名乗っていた奴ですよ！」

ミッドナイトランドとは、前回の逃走中の舞台となった深夜営業の遊園地の名称である・・・そして、伊東和葉の誘拐及び自爆テロ未遂を犯したのは、前回の逃走中で解体されたメイズの元幹部・アルファだった・・・

巡査（グリフィス）

「確かこいつ・・・半月ほど前に、看守を騙して拘置所から脱獄したと聞いていたが・・・」

巡査（ヴァイス）

「土地の占拠の次は誘拐とテロか・・・何処までもふざけてやがるな、貴様という人間は・・・！」

警部（クロノ）

「なるほどな・・・まあ、詳しい事は所で聞く・・・おい！こいつを連れてけ！」

警察官

「はっ！」

アルファ

「くそ・・・！放せ！」

こうして、今回の大事件は幕を閉じたのであった・・・

しかし・・・ゲームはまだ幕を閉じてはいない。

スバル

「栄光の逃げ切りが見えてきたぞ・・・！今日は何としてでも、前回の雪辱を果たさないと・・・！ここで捕まったら面目無いよ・・・！」

全てのミッションに参加し、貢献してきたスバル。このまま逃げ切

る事は出来るのか。

ヴィータ

「やっぱりあたしは、この場所が向いているな……！」

先程のベンチの下に隠れているヴィータ。

ヴィータ

「多分ミッションは、さっきので終わりだろうな……だったら、このまま隠れ続けて逃走成功の名誉を頂くぜ……！誰が何と言おうと、賞金はあたしの物だ……！」

彼女はハンターに見つかる事無く、隠れ続けられるのか。

ワルイージ

「この勢いそのまま逃げ切つてやるとするか……！」

最後のミッションに貢献し、上機嫌のワルイージ。

> i 3 3 7 3 0 — 2 0 9 6 <

しかし、そんな彼の近くにハンター……

ワルイージ

「これは素敵な土産を持って帰れそうだな……！賞金と好感度という最高の特産物をな……！」

ピー——————ビビビッ

LOCK ON WALLUIGI

見つかった・・・

ワルイージ

「ん・・・？うおあゝ！あんなのアリかよゝ！？来るなー！来るんじゃないねえー！」

一目散に逃げるワルイージ。しかし、ハンターとの距離が近い為撒き切れる訳が無い。最早、逃走不可能・・・

ワルイージ

「ひいやあゝ！」 ポンッ

> i 3 3 7 3 1 — 2 0 9 6 <

ワルイージ

「くそゝ・・・！折角ミッションで貢献出来たつてのに・・・！ルイージに借りを返せると思ったのに・・・！逃走中の名物を持ち帰れる筈だったのに・・・！」

素敵な土産を持って帰る事は出来なかった・・・

ルイージ

「うわっ！ワルイージも捕まった・・・！あんなに頑張ってたのに・・・！」

牢獄

レッド

「『1階南口付近にて、ワルイージ確保』!」

レッド以外

「うわぁー!」

ドクター

「折角復活してミッションクリアしたのに……!」

キャロ

「でも、何にもしてないスネークさんよりは全然マシですよ」

スネーク

「……っ!お、お前まで……」

アルル

「あと5人か……誰か逃げ切れるかな?」

ロイ

「2回連続全滅だけは避けてくれ……!」

リユカ

「誰でもいいから、1人くらいは逃げ切ってほしいね……!」

祈里

「皆頑張つて……!」

ゲーム終了まで、残りおよそ18分となった。

しかし・・・逃走者達には、まだ最後の試練が残されていた・・・
彼等に降りかかるその試練とは！？

ミッション6終了！　そして・・・（後書き）

次回、遂に屋上に現れた18体の黒い影が動き出す！

彼等はいったい何者なのか！？

そして、逃走者達に待っている運命とは！？

謎の集団始動（前書き）

遂に明かされる屋上の黒い影の正体・・・

それが動き出した時、逃走者達の運命が大きく揺らぐ・・・

謎の集団始動

20人で始まった今回の逃走劇も、残るは僅か5人。

ゲーム終了まで、既に18分を切っている。

スバル

「あと17分45秒・・・あともう少し・・・でも、このもう少しが遠いんだよね・・・遠いけど、りんや響と肩を並べる立場になる為にも、今回は絶対に逃げ切る・・・！」

夏木りんと北条 響を目標に掲げているスバル。最後まで逃げ切る決心を固めた様だ。

ルイージ

「おお・・・もう66万円超えてるよ・・・！72万円がもう目の前だよ・・・！もう少し・・・もう少しだけこの恐怖を耐え抜けば・・・兄さんの面子を守れる・・・！」

数々の見せ所を作ってきたルイージ。兄の顔に泥を塗らずに逃げ切れるか。

ヴィータ

「あたしの考えは的中したな・・・！ハンターは何回もあたしを見過ぎてやがる・・・！これは賞金頂いたも同然だぜ・・・！ザマ見やがれ、ハンター・・・！」

お気に入りの場所で隠れ続けるヴィータ。早くも逃走成功を確信している様だ。

ネス

「逃げ切つたら72万円・・・それを救世主^{メシア}のルイージと折半か・・・出来れば男2人でゴールしたいね・・・！彼はもう永遠の2番手じゃないし・・・！」

牢獄から復活したネス。ルイージと並んでの逃走成功は叶うのか。

シグナム

「いくら復活した身とはいえ、再び牢獄に戻る事があれば、ヴォルケンリッターの名が泣く・・・必ずや逃げ切つて見せる・・・！助けてくれたルイージの為にも・・・！」

ネスと同じく、ルイージに助けられたシグナム。ヴォルケンリッターのリーダーの意地を見せられるか。

牢獄

アルル

「残り17分ぐらいで、あと5人か」

ドクター

「3分程度で1人のペースで捕まると全滅になる計算だな・・・」

キャロ

「確かに復活して人が増えても、捕まるペースが早いのに変わりないですからね・・・」

リユカ

「そうだよね・・・前は、この時間だと9人ぐらいは残ってたもんね・・・」

咲

「今回の逃走中がいかにも過酷なものなのか、一目で分かつちゃうね・・・」

デイジー

「やっぱり全滅するの・・・？ねえ、全滅なの・・・？」

シャル

「あんまりネガティブな方に考えるのは良くないと思うわ・・・」

祈里

「私もそう思います・・・そういう考えが、ゲームに悪い影響を与えるかもしれないし・・・」

ヤング

「でもな・・・時間的に見ても、まだ何か仕掛けが起こりそうな予感がするんだよな・・・」

スネーク

「俺もそう思うな・・・危険な臭いがエリアに充満している・・・」

ロイ

「今回の逃走中、初めから異常なまでに変な空気が漂ってたもんな・・・」

アミティ

「でも、あの5人だったら屹度きつとそんな空気を打破してくれるよ」

ワルイージ

「それを信じるしか、今の俺様達には出来ないしな・・・」

レッド

「あいつ等なら、絶対にやってのけてくれる筈さ・・・！」

えりか

「あたしもそう思う・・・！頑張れ頑張れ・・・！」

スバル

「なのはさんもティアも・・・そして機動六課の人達皆も・・・賞金72万円を・・・そして、あたしの逃げ切りを待ち望んでる・・・！りと響に追い付く為にも・・・あたしは、こんな所で捕まっちゃいけないんだ・・・！」

シグナム

「ヴォルケンリッターの名に懸けて、主はやての為にも必ず逃げ切る・・・！2度も捕まる事は屈辱以外の何物でも無い・・・！序盤の頃のあたしとは全く違う事を教えてやる・・・！」

ヴィータ

「ここまで逃げてきたんだから、やっぱり逃げ切りたいぜ・・・！マジでハンターに捕まるなんてゴメンだ・・・！ヴォルケンリッターは、他の奴らとは格が全く違う事をまざまざと見せ付けてやるからな・・・！」

ネス

「1回捕まったら、2回も捕まるなんて屈辱は味わいたくない・・・！そうになったら、ボクは任天堂から追放され兼ねないよ・・・！それはボクの居場所が無くなるという事・・・これだけは絶対に避けなきゃ・・・！」

ルイージ

「こんなボクでも、ここまで生き残れてきたんだ・・・！これはボクに追い風が吹いてきている何よりの証拠・・・！今日は逃げ切つて、縁起でもない異名から脱却してやる・・・！待ってて兄さん・・・！」

ゲームマスター

「・・・」

生き残っている逃走者達の様子をモニター越しに見ているゲームマスター・・・

突然、画面をスライドさせる・・・

するとそこには『A HIGHER LEVEL OF OBSE
RVATION』の文字が・・・

ゲームマスターはそれをタッチする・・・

それと同時に、メーターが徐々に上がっていく・・・

そして、メーターは75%を指して止まった・・・

その直後、屋上駐車場に現れたゲージの扉が突然開き、中にいた18体の黒い影が一斉にエリアへと放たれる・・・

そしてその黒い影は、何故かインラインスケートを履いている・・・

ブルルルル　ブルル

シグナム

「ん・・・？何だ・・・？」

メールだ・・・

ルイージ

「通達・・・？」先程のミッションで6回暗証番号の入力ミスがあった為、ペナルティを科す・・・ペナルティ・・・！？そんな制度ってアリ・・・！？」

ネス

「まあ、仕方ない事なんだろうけど・・・『屋上駐車場から18体のインラインスケート通報部隊を投入した』・・・インラインスケート通報部隊・・・？」

ヴィータ

「『彼等は逃走者を見つけると、笛を鳴らしハンターを呼び寄せる。気を付けたまえ！』・・・逃走中初じゃねえか、通報部隊って・・・？」

スバル

「インラインスケートって・・・あたしの二番煎じのつもり・・・？まさか、その中にギン姉とかいないよね・・・？」

屋上駐車場に現れたゲージの中から出てきたのは、18体のインラインスケート通報部隊。彼等は1組3体編成で1フロアずつ隈なく搜索。逃走者を見つけ次第、笛を鳴らして位置情報をハンターに伝える。

逃走者に襲い掛かるハンターと通報部隊の恐怖。最早、逃げ場所は無いに等しい。

シグナム

「あれか、インラインスケート通報部隊というのは？」

螺旋階段の手摺^{てす}りを滑りながら下りていく通報部隊の姿を捉えたシグナム。

シグナム

「奴等に見つかりと、何かと厄介だな・・・慎重に動かねばならぬいな・・・」

ヴィータ

「うおお・・・！？あれがインラインスケート通報部隊か・・・！」

1階に下りてきた3体のインラインスケート通報部隊を目の当たりにし、驚きの声を上げるヴィータ。

ヴィータ

「かなり移動速いな・・・これは見つかった瞬間に終わりだな・・・」

まあ、言っても隠れてるあたしには関係ねえ事だがな……！通報部隊だろうが何だろうが、あたしは逃げ切つてやるんだ……！」

スバル

「あつ……！あれがインラインスケート通報部隊……！？」

1階の食品館の商品棚の陰からインラインスケート通報部隊の姿を捉えたスバル。すぐに身を隠す。

スバル

「こつち入つて来そうだな……上手くかわしていかないと、絶対笛を吹かれる……来た、来た、来た……！」

近付いてくる通報部隊を、棚を利用して上手くかわしていく。どうやら、気付かれなかった様だ。

ネス

「あれか……！あれは絶対ヤバイ……！あんなのに見つかったら一溜まりも無いよ……！」

遠くからインラインスケート通報部隊を見つけたネス。

ネス

「離れた方がいいかな……？でも、どの階に行つてもいるんですよ……？それはきついつて……！」

3階駐車場の車の陰に隠れているルイージ。

ルイージ

「18体とか多過ぎるよ……！これじゃあ、動くに動けないって・

・・・！」

あまりの恐怖に、身体が震えている。

> i 3 4 0 1 9 — 2 0 9 6 <

その彼の近くに、インラインスケート通報部隊が迫る・・・

ルイージ

「何か変な音がするんだけど・・・何だろう・・・？確認したいけど、怖くて出来ないよ・・・」

身動きが取れない・・・

ピーーーーーッ　　ピーーーーーッ　　ピーーーーーッ

見つかった・・・

ルイージ

「ギャッ！」

近くにいたハンターが、音の鳴る方へと走り出す。

ルイージ

「うわわわわ・・・！嘘でしょ・・・！？最悪だ、通報部隊に見つかった・・・！」

すぐさま、その場から離れるルイージ。建物の中へと逃げ込み、階段を上って4階へ。

ルイージ

「怖いよ……これじゃあ、いくら隠れてても絶対に見つかった
やうじゃん……どうしよう……ってハンターいるじゃんかー！」

通報部隊の笛の音を聞き付けたハンターに見つかった……

ルイージ

「こんな所で見つかるなんて……最悪だー！」

絶叫とも取れる悲鳴を上げながら一目散に逃げるルイージ。

> i 3 4 0 2 0 — 2 0 9 6 <

しかし、逃げた先に4階を搜索しているインラインスケート通報部
隊の姿が……

ルイージ

「止めてー！追って来ないでー！うわあ！また通報部隊！？」

急遽逃走ルートを変更し、更に逃げる。しかし、彼の後ろからハン
ターと通報部隊が迫る。

ピーーーーーー

LOCK ON LUIGI

ルイージ

「嫌だー！助けてー！」

泣き言を叫びながら尚も逃げ続けるルイージ。しかし、ハンターと

の距離が縮まっっていく。最早、逃走不可能・・・

ルイージ

「はあぁう！」 ポンッ

> i 3 4 0 2 1 — 2 0 9 6 <

ルイージ

「うわ・・・逃げ切れなかったよ・・・ていうか、通報部隊しつこ過ぎだよ・・・！ずっと後付いてきて、笛鳴らし続けてるんだもん・・・残ってる人達、かなりヤバイよ・・・」

通報部隊は1度逃走者を見つけると、その人物が確保されるまで執拗に追い続け笛を鳴らす。ほんの一瞬でも通報部隊に見つかってしまつと、ハンターの格好の餌食だ・・・

最早逃走者にとって、このショッピングモールに安全な地など存在しない。

ヴィータ

「『4階駐車場にてルイージ確保、残り4人』・・・とうとうルイージ捕まったか・・・あいつがまさかここまで残るとはな・・・まあ、いずれあいつが捕まる事は目に見えてたけどな・・・！」

ネス

「ボクの救世主^{メシア}捕まった・・・！男ボクだけ・・・？」

牢獄

レッド

「『ルイージ確保』!」

レッド以外

「うわぁー!」

ロイ

「捕まっちゃったのかよー!」

アミティ

「救世主ー!」

ドクター

「ホントか・・・!? あいつ、今回ばかりは逃げ切れると思ってたのに・・・!」

祈里

「あんなに必死になってミッションとかも頑張ってたのに・・・!」

スネーク

「これは展開が読めなくなってきたぞ・・・!」

これで残る逃走者は、ネス・ヴィータ・スバル・シグナムの4人となった。

エリアでは3体のハンターと18体のインラインスケート通報部隊

が逃走者を搜索している。

> i 3 4 0 2 2 — 2 0 9 6 <

長く険しい戦いも、残り10分となった。

最後まで逃げ切れれば72万円。捕まれば0円・・・

シグナム

「暫くはここにいた方がいいかもしれないな・・・」

入り組んだ通路に隠れているシグナム。

> i 3 4 0 2 3 — 2 0 9 6 <

その近くにインラインスケート通報部隊・・・

シグナム

「万が一見つかったても、曲がり角を利用すれば撒ける可能性は幾分あるしな・・・」

彼女は、通報部隊の接近に気付いていない。

ピーーーーッ ピーーーーッ ピーーーーッ

そして、見つかった・・・

シグナム

「なっ！」

近くにいたハンターが、シグナムの確保へと向かう。

狙われたヴォルケンリッターの将・・・迫る来るハンターから逃げ切れるのか！？

謎の集団始動（後書き）

通報部隊に見つけたシグナム

彼女を待ち受ける運命とは！？

メイズの呪い　またしても・・・（前書き）

通報部隊に見つかったシグナム

果たして彼女は、追跡を逃れられるのか！？

そして、ゲーム終盤にとんでもない出来事が！？

メイズの呪い またしても・・・

通報部隊の吹く笛の音に、近くにいたハンターがシグナムの確保へと向かう。

シグナム

「こいつ等・・・何処までも追って来る・・・！しかも速い・・・！」

瞬発力は、インラインスケート通報部隊の方が幾分高い。彼等を振り切るのは容易ではない。

シグナム

「くっ・・・！このままではハンターが来てしまう・・・！」

彼女は曲がり角を利用し、通報部隊から一目散に逃げる。

どうやら通報部隊は、シグナムを見失った様だ。

> i 3 4 7 4 5 — 2 0 9 6 <

更に、近くまで来ていたハンターも彼女の姿を確認出来ず、足を止めた。

通報部隊の追跡を免れ、ハンターにも間一髪のところで見つからずに済んだ。

シグナム

「どうやら撒いた様だな・・・しかし、あのインラインスケート通

報部隊は厄介だな・・・いつまでも後を付けて笛を鳴らしてくる・・・通報部隊にも見つかつてはいけないという訳か・・・」

ネス

「でもさ、通報部隊って本家では残り10分を切った時に投入される筈だよ？だから、普通だったら今が投入のいい頃なんだよ。なのに・・・残り15分での投入って・・・絶対おかしいよね？」

スバル

「残り9分か・・・確か前は、この時6人ぐらい残ってたんだよ。でも今回は、たったの4人・・・しかも、18体も通報部隊がいるんだから、余計にきつく感じられるよ」

ヴィータ

「通報部隊もあたしを見過ごしてるみてえだな・・・！もう72万円を軽く握ってるって感じたな・・・！あとちよつとだ・・・！悪いなハンター・・・賞金はあたしが頂いていくぜ・・・！」

3人が意気消沈し掛けている一方で、1人余裕を見せるヴィータ。しかし、ハンターに捕まれば失格。握り掛けた72万円は遙か彼方へと飛んでいってしまう。

牢獄

ルイージ

「はあ・・・こんな結果になっちゃったら、兄さん諸共任天堂から追放されちゃうよ・・・」

がつくりと肩を落とし、入獄するルイージ。

祈里

「でも、いっぱい見せ所はあったじゃん」

咲

「そうだよ。これまでの活躍からすれば、頑張った方だって」

ルイージ

「そうなのかな？・・・？たださ・・・スネーク！」

先程までとは一変、ルイージはスネークに怒鳴り付ける。

スネーク

「・・・っ!？」

ルイージ

「酷いじゃないか！折角復活させてあげたのに、結局何にもしない
で捕まるなんてさ！」

スネーク

「お・・・俺だって、まさかこんな早く逆戻りするなんて思っても
みなかったさ！」

ヤング

「それにしたって、俺達の夢を呆気無く潰すなんて最悪だろ！」

アルル

「ボク達の間では、スネークが最後まで残りそうだって話してたの
に！」

レッド

「何であんなに早く捕まりやがったんだよ!？」

スネーク

「な・・・何でって言われてもな・・・ハンターに近くまで来られたとしか言い様が無いだろ・・・」

ロイ

「だが俺は、スネークが早い段階で確保された時点で、今回の逃走中は何かがおかしい事は勘付いてたけどな・・・」

アミティ

「あたしも何となくだけど、変な方向に向かっている様な気はしてた・・・」

リュカ

「ゲームマスター・・・」

キャロ

「えっ・・・? い、今何て言いました・・・?」

リュカ

「本家でも出ている逃走中のゲームマスターが、今回のゲームと何か関係してるんじゃないかな・・・?」

シヤマル

「それは考え過ぎじゃない? だって、本家のゲームマスターの月村サトシは、逃走中を『誰もが楽しめるエンターテイメント』として扱ってるじゃない。だから・・・」

ドクター

「いや、必ずしもそうとは言えないぞ・・・実はこのゲームに参加するに当たって、過去3回の逃走中を調べてみたんだが、そこに現れるゲームマスターの動向をあらゆる角度から見ていって、ある1つの仮説を立ててみたんだ・・・」

キャラ

「か・・・仮説・・・ですか・・・？」

アルル

「ど・・・どんな仮説なの・・・？」

ドクター

「うん・・・信憑性^{しんぴようせい}はほぼ無いと言ってもいいかもしれないが、恐らく今回を含めた4回の逃走中を開催したゲームマスターは、『ハンターを利用して、逃走中に参戦してきた者を殲滅^{せんめつ}させようとしている』のではないかと自分は見ているんだ・・・」

ドクターマリオの、予想を遥かに超える仮説に周囲は驚きを隠せない。

ルイージ

「ちょ・・・ちょっと待ってよ・・・！殲滅^{せんめつ}って・・・！」

スネーク

「それはつまり・・・逃走中を利用して、俺達をこの世から消し去るうって魂胆だと言っのか・・・！？」

ドクター

「まあ、飽くまでも仮説だ・・・心配する事は無いだろう・・・」

レッド

「で、でもさ・・・もしそれが本当だったらどうすんだよ・・・！
」

アミティ

「私達・・・まさか、近々ゲームマスターに殺されちゃうの・・・
！？」

ロイ

「ドクター・・・！いくらなんでも冗談が過ぎるぜ・・・！」

ドクター

「だから何度も言わすな・・・！今話したのは、説得力の欠片も無い仮説だと・・・！」

ヤング

「まあ、俺達に未来を完全に予知する事なんて出来ねえから・・・
仮説なんていくらでも立てられるさ・・・」

シャマル

「それに、人は良い情報より悪い情報を選び、信じる傾向があるって言うしね・・・」

ワルイージ

「だが、そんなに煽られるとやっぱり心配にはなるよな・・・」

リュカ

「若しかしたら、今も何処かで見てるのかもしれないね・・・」

祈里

「リュ……リュカ君……縁起でもない事言わないでよ……」

咲

「そうだよ……ドクターだって、あんまり気にするなって言うてるんだからさ……」

ゲームマスター

「……」

牢獄での会話を終始モニター越しに聞いていたゲームマスター……
ドクターマリオの仮説に、少し驚いた様にピクリと微かに動いた……

しかし、ヘルメットとフードを被っている為、その顔色は鮮明には分からない……

ネス

「やっぱりね……男として……そして、復活した身として……何としても逃げ切りたいね……！こんな所で、男は全滅なんてしてられないよ……！」

唯一の男性逃走者であるネス。男の意地を見せられるのか。

彼と同じく、復活した身であるシグナム。

シグナム

「21体の敵がエリアを埋め尽くしてとなると・・・あたし達は圧倒的不利だという事になるな・・・少しでも有利になる状況が作ればいいのだが・・・」

ゲーム開始から、殆ど動いていないヴィータ。

ヴィータ

「絶対に近寄って来んなよ、ハンターも通報部隊も・・・！近寄るんだったら、他の残ってる奴等の所に近寄れ・・・！今回はあたしだけが生き残ってやるんだからな・・・！」

スバル

「ここまで来たら、やっぱり逃げ切りたいよ・・・！もう前回みたいな、悔やむに悔やめない結果は絶対に残したくないな・・・！結構厳しいけど、そんな状況だからこそあたしは絶対に逃走成功したい・・・！」

これまで全てのミッションに貢献しているスバル。このまま逃げ切れるのか。

一方、拘置所に再び投獄された、メイズの元幹部であり伊東和葉の誘拐犯であるアルファは・・・

アルファ

「おのれ愚民どもめ・・・！この私の計画を、またしても邪魔して

くれたな・・・！絶対に許さん・・・！いくら神に祈ったとしても、私は絶対に許さんぞ・・・！貴様等には再び、相応の天罰を与えてやらなければ分からね様だな・・・！良かろう・・・決して脱する事の出来ぬ地獄と絶望を味わうがいい・・・！」

前回と同等・・・否、それ以上に逃走者に対しての憎しみを増大させる・・・

すると、何と言う事か・・・

エリアの各フロアに、邪悪な念が宿った魔方陣が現れ・・・そして・・・

> i 3 4 7 4 6	—	2 0 9 6 <
> i 3 4 7 4 7	—	2 0 9 6 <
> i 3 4 7 4 8	—	2 0 9 6 <

・ ゲーム時間を示すタイマーに呪縛が張られ、時間が停止しまった・・・

牢獄

プルルルル プルル♪

レッド

「おっ？メールが来たぞ・・・！」

デイジー

「誰か捕まったの？」

ロイ

「確保情報はきついで……！」

ルイージ

「ただでさえ人数少ないからね……」

レッド

「違うみたいだぞ……ミッション7だってよ……！」

咲

「ミッション？まだミッションなんてあるの？」

キヤロ

「今回もすごいスケールですよ、7つもミッションあるなんて……」

「

アルル

「……で、内容は？」

レッド

「ちょっと待てよ……えつと……『誘拐犯の強い怨念により、ゲーム時間が停止してしまった』……」

ヤング

「えつ……？時間が止まった……！？」

リュカ

「嘘でしょ……！？」

ドクター

「モニターを見る限り嘘じゃなさそうだな・・・残り5分を指したまま動かなくなってる・・・」

ワルイージ

「マジか・・・!?!」

アミティ

「こんな事が起こっていいの・・・!?!」

レッド

「『このままではゲームは永遠に終わらず、自首をするかハンターに捕まるのを待つしかない』・・・」

祈里

「ハンターや通報部隊は、関係無く動いてるんでしょう？」

シヤマル

「状況的にも厳し過ぎるわよ、このミッション・・・!」

スネーク

「最悪な展開だな・・・捕まれって言ってる様なもんだろ・・・!」

ネス

「考えられないよ・・・!ここまで来させておいてのタイマー停止って・・・」

ヴィータ

「『タイマーを再び動かす為には、エリアの各フロアに現れた魔方阵の上に、魔方阵が消えるまで乗り続け』・・・」

スバル

「『タイマーに張られた呪縛を解かなければならない』・・・」

シグナム

「『急ぎたまえ！』・・・魔方阵・・・？何処にあるんだ・・・？」

MISSION？ ゲーム時間を動かせ！

逃走者に対するアルファの強烈な憎しみの怨念が、タイマーに異常を起こし、ゲーム時間が止まってしまった。このまま時間が動かなければ、逃走者達は自首をするかハンターに捕まり全滅するのを待つしかない。タイマーを再び作動させる為には、エリアの各フロアに1つずつ現れた魔方阵の上に消えるまで暫く乗り続け、呪縛を解かなければならない。

スバル

「魔方阵を全部消さないと、タイマーはずっと動かないんだね？」

ヴィータ

「と言う事は、クリア出来なきゃ逃走成功も無いって事が・・・しかも、残り5分っていうのがムカつくな・・・！」

ネス

「1つの魔方阵に1人でも乗れば、何秒か経ったら消えるのか・・・」

シグナム

「これはとんでもない展開になってしまったな・・・4人で6つを消す・・・かなりハードルが高いな・・・」

逃走者に課せられた驚愕の新ミッション。クリア出来なければ、ゲームは終わらず賞金も上がらない。

しかし、エリアには3体のハンターと18体のインラインスケート通報部隊。動けば見つかる危険が高まる。

ゲーム時間を再び動かせるのか!?

メイズの呪い　またしても・・・（後書き）

ゲーム終了5分前に訪れた最大のピンチ

果たして4人は、ここから脱せられるのか！？

呪縛を解け！（前書き）

前代未聞のタイマー停止・・・

この事態に、逃走者達は一体どうなってしまっのか！？

呪縛を解け！

エリア内に出現した6つの魔方陣の上に乗ってタイマーに掛けられた呪縛を解かなければ、時間は停止したままとなり、逃走者達は自首をするか全滅するのを待つしかない。

なお、魔方陣の位置は逃走者各自が持っている地図に表記されている。

シグナム

「2階の魔方陣は・・・ファーストフード店が立ち並ぶ所か・・・ミッションやっている間にハンターに見つかったら、逃げ場が無いな・・・」

スバル

「1階から行こう・・・！西口近くのエスカレータの脇だね・・・！」

ネス

「下の階は多分他の人がやってくれると思うから、ボクは屋上の方から攻めていこう・・・！ただ駐車場は、全部見通しが良過ぎるかな・・・どうやって見つからずに近付くか・・・」

時間を再び動かす為、魔方陣の場所へと移動する逃走者達。

しかし、エリアには3体のハンターと18体のインラインスケート通報部隊。ミッションに動けば、それだけ遭遇する危険も高まる。

1階の螺旋階段近くのベンチの下に隠れ続けているヴィータ。

ヴィータ

「西口の近くにあるのか・・・結構近いが、あたしは絶対行かねえぞ・・・！行ったら確実にハンターや通報部隊に見つかっちゃうもんな・・・！これも見つかってもいいと思ってる奴が勝手にやりやいいんだよ・・・！」

ミッションには全く興味が無い様だ・・・

そんな彼女の近くを、スバルが通り掛かる。

スバル

「確かこの先だね、西口は・・・」

ヴィータ

「おっ・・・？スバルか・・・あいつ、後輩の癖に生意気だよ・・・！おまけに、何で全部のミッションに参加してんだよ・・・！とつとと捕まっちゃえばいいのにな、マジで・・・！」

先輩に妬まれている事に気付かないスバル。

スバル

「この近くだよね・・・えっ・・・？ヤバッ、通報部隊じゃん・・・！」

彼女が向かう先にインラインスケート通報部隊・・・

スバル

「うわぁ、これじゃ近付けないよ・・・早く向こう行け・・・！」

西口の出入口付近を右往左往する通報部隊。しかし彼等は、そのま
ま外へと出ていくではないか。

スバル

「あれ・・・？何でだ・・・？あつ、そうか・・・！外に駐車場と
かタクシーのりばとかあるからか・・・！よしつ、今がチャンスだ・
・・・！」

通報部隊の姿が見えなくなったのを確認し、魔方陣へと近付いてい
く。

> i 3 5 3 0 2 — 2 0 9 6 <

しかし・・・近くにハンター・・・

スバル

「早めにクリアしとかなないと、それだけ捕まる確率が高くなるから・
・・・これが魔方陣つて・・・解除しよう・・・ってハンターいるじ
ゃんか・・・！」

ハンターの姿を目撃し、一目散に逃げるスバル。

> i 3 5 3 0 3 — 2 0 9 6 <

ハンターは気付いていない様だ。

スバルはハンターの背後へと回り込み、ハンターがいなくなるのを
待つ。

スバル

「ハンター行つたかな・・・？行つたね・・・」

再び魔方陣へと近付き、周りにハンターや通報部隊がいな事を確認し、魔方陣の上に乗る。

スバル

「このまま消えるまで待たなきゃいけないんでしょう？この間に来られたらヤダな・・・」

2階に出現した魔方陣を探すシグナム。

シグナム

「ここは写真館の近くか・・・と言う事はこっちだな・・・」

地図を頼りに目的の魔方陣へと向かう。

> i 3 5 3 0 4 — 2 0 9 6 <

シグナム

「その十字路の所か・・・ん・・・？これか・・・！これを解除するんだな・・・？」

シグナムは魔方陣の上に乗る。

シグナム

「タイマーが動いていないから、どの程度乗っていればいいのか全く予想出来ん・・・」

魔方陣は、その上に乗り続けなければ消える事はない。ハンターに追われる等の理由でその場を離れてしまえば、全てが水の泡・・・

最初からやり直しとなってしまう。

呪縛の解除は大きな危険と常に隣り合わせだ・・・

ネス

「まだ5階か・・・」

ミッションクリアの為に屋上を目指すネス。

ネス

「屋上駐車場はかなり目を付けられやすいけど、だからこそ男のボクがやらなきゃ・・・！こんな所で捕まってなんかいられないからね・・・！」

スバル

「まだかな・・・？早く消えてくれないかな・・・？」

なかなか魔方阵が消えず、周りを気にし始めるスバル。

その時・・・

シューーン・・・

スバル

「ん・・・？何の音・・・？あつ、魔方阵が消えてる・・・！」

魔方阵が1つ消え、残る魔方阵はあと5つ・・・

スバル

「よしっ・・・！この調子で残りの魔方阵も・・・あれ・・・？こ

れ何・・・？」

何かを見つけた・・・

スバル

「このタンクみたいなもの・・・インラインスケートのマークが描かれてるけど・・・何かの吹き出し口というか、銃みたいなものが付いてる・・・まさかとは思うけど、これって若しかして・・・冷凍銃・・・！？」

そう・・・実は魔方阵を1つ消すことに、その近くに冷凍銃が出現する様になっているのだ。

この冷凍銃は、インラインスケート通報部隊専用の冷凍銃。これを使えば、エリア内を搜索している通報部隊を凍らせ動きを止める事が出来る。但し、冷凍銃1丁につき凍らせられる通報部隊は1部隊のみ。

スバル

「なるほど・・・これを使えば、あの厄介な部隊を止められるのか・・・これを使わない手は無い・・・！」

スバルは、これはチャンスと言わんばかりに、早々と冷凍銃を装備する。

通報部隊を減らせば、それだけ逃走成功の確率が上がる。

スバル

「さあ、何処からでも出て来い通報部隊・・・！このあたしが氷付けにしてやるよ・・・！」

シグナム

「意外と長く感じられるものだな、時間というのは・・・」

シューーン・・・

シグナム

「おっ・・・どうやら魔方陣が消えた様だな・・・ん・・・？何だ、これは・・・？」

シグナムも冷凍銃の存在に気付いた。

シグナム

「冷凍銃か・・・本家でもあったな、これは・・・インラインスケートのマークがあるという事は、あの通報部隊にやればいいという訳か・・・」

シグナムも冷凍銃のタンクを背負う。

シグナム

「通報部隊を減らせるのはいいが、その前にハンターに追われたら逃げる術は無いな・・・」

冷凍銃はハンターに対しては無効である。故にハンターに追われれば、重い冷凍銃は捨てて逃げるしかない。

シグナム

「しかも、逆に探すとなると案外見つけれないのも事実だし・・・探すのに時間を要していたら・・・あっ・・・！来たぞ通報部隊・・・！」

通報部隊の姿を捉えた・・・彼等は徐々にシグナムの方へと近付いていく・・・

そして・・・

ピーーーーーッ ピー・・・

プシューーーーーー！

シグナムによって、通報部隊は笛を鳴らし続ける間もなく凍ってしまった。

シグナム

「これが冷凍銃の威力か・・・ならば、早めに魔方陣を消滅させれば幾分勝機はある・・・！」

冷凍銃を下ろし、別のフロアの魔方陣を目指す。

シグナム

「あとは駐車場の辺りに行くとするか・・・ってこんな時にハンターか・・・！？」

しかし、先程の短い笛の音を聞き付けたハンターに見つかった・・・

シグナム

「くそっ・・・！こんな所で捕まってなどたまるか・・・！」

曲がり角を利用し、一目散に逃げるシグナム。

そして、逃げた先にあつた階段で3階へと上がっていく。

どうやら上手く撒いた様だ。

シグナム

「通報部隊を減らしたからと言って、ハンターの脅威が消えた訳ではないのは分かっていたが・・・やはり浮かれるのは危険だな・・・まだミッションはクリア出来てないのだからな・・・」

ネス

「やつと着いた・・・！」

漸く^{おそ}屋上駐車場に辿り着いたネス。

ネス

「魔方阵は・・・出て少し真っ直ぐ行った所か・・・うわっ・・・！通報部隊いるじゃん・・・！」

彼の視線の先にインラインスケート通報部隊・・・

ネス

「見つかってないよね・・・？」

止まっている車の陰に隠れて様子を窺^{うかが}う。

ネス

「行ったね・・・よしっ・・・！今行こう・・・！」

> i 3 5 3 0 5 — 2 0 9 6 <

通報部隊が通り過ぎたのを確認し、魔方阵に近付く。

ネス

「これに乗ればいいんだね、消えるまで・・・」

ネスは魔方阵の上に足を乗せた。

その瞬間・・・

シューーン・・・

ネス

「早っ・・・！魔方阵消えるの早っ・・・！」

あっという間に消えてしまった・・・そして、その場に冷凍銃が出現した。

ネス

「あっ・・・これ冷凍銃じゃない・・・？このマークからして、あの通報部隊をやっつければいいのか・・・やってやろうじゃん・・・！」

通報部隊を減らす為に奮起するネス。すぐさま冷凍銃を身に付ける。

ヴィータ

「あいつ等ちゃんとミッションやってんだろぅな・・・」

これまでずっとミッションを人任せにしているヴィータ。

ヴィータ

「これをクリアしねえと、残り5分からゲームが全く動かねえんだからさ・・・さっさと終わらせてくれよ、こんなミッションぐらいよ・・・！」

かなり苛^{いら}立っている・・・

スバル

「何処だ・・・？」

通報部隊を冷凍させる為に探し回るスバル。

スバル

「南口探してもいなかったって事は、東口の方に行っちゃったのかな・・・？全然見掛けないんだけど・・・」

なかなか見つけれない。

ネス

「よいしょと・・・さあ来い・・・！ボクが相手になってやる・・・！」

近くにいる通報部隊を挑発するかの様に強気になるネス。

そして・・・

ピーーーーーッ　　ピーーーーーッ　　ピーーーーーッ

見つかった・・・

ネス

「来た、来た、来た、来た・・・！」

笛を鳴らしながら、ネスの方へ近付いていく通報部隊。

ネス

「これでも食らえ！」

プシューーーーーー！

ネスが吹き付ける冷氣によって、通報部隊は凍り笛の音も止んだ。

ネス

「よし・・・！凍ったぞ・・・！」

通報部隊の凍結により、笛の音を聞き付け近くまで来ていたハンターも追跡を止めた。

ネス

「この調子ならクリア出来るぞ・・・！どうしよう、すごい興奮してきた・・・！」

スバル

「通報部隊出て来い・・・！でもハンターは出て来るな・・・！」

通報部隊を搜索し続けているスバル。ハンターへの配慮は大丈夫なのだろうか。

スバル

「あっ・・・！あれじゃない、通報部隊・・・？そうだね・・・よしっ・・・！！発決めてやる・・・！」

通報部隊の許へと駆け寄っていく。そして・・・

スバル

「おらー！」

プシューーーーーー！

通報部隊に笛を吹かせる間も与えず、彼女は冷気を浴びせる。その結果、3体の通報部隊の動きが止まった。

スバル

「へへっ・・・！呪縛を解いて通報部隊を減らす・・・いいね、こういうの・・・！」

これにより、残る魔方陣は3階・4階・5階の3ヶ所となり、通報部隊も半分の9体に減少した。

このまま、1人の犠牲者も出さずにミッションをクリア出来るのか！？

呪縛を解け！（後書き）

逃走成功の確率が格段に上がった逃走者達

残る3つの魔方陣も消滅させ、タイマーを動かせるのか！？

呪縛が解かれる時（前書き）

時間が停止している中、半分の魔方陣を消滅させた逃走者達

このまま残りの魔方陣も消し、時を動かせるのか！？

呪縛が解かれる時

屋上駐車場の魔方陣を消したネス。5階へと下りて魔方陣を探す。

ネス

「地図を見る限りこの近くなんだけどな〜・・・あった・・・！これだね・・・」

彼は魔方陣の上に乗る。

その直後・・・

シューーン・・・

ネス

「だから魔方陣消えるの早いつてば・・・！何これ・・・！？」

あっという間に消えてしまった・・・そして、その場に冷凍銃が出現した。

ネス

「また冷凍銃の登場か・・・よしっ・・・！このフロアの通報部隊も凍らせてやる・・・！」

冷凍銃を背負い、この階にいる通報部隊を探す。

3階に上がってきたシグナム。

シグナム

「この辺りだな、魔方阵は・・・しかし車が多いな・・・車の陰から来られたら厳しくなりそうだな・・・」

周囲を警戒しながら魔方阵を探す。

シグナム

「これだな・・・!」

彼女は魔方阵を見つけると、すぐさまその上に乗る。

シグナム

「早めに消えてくれ・・・!頼むぞ・・・!」

ネス

「何処だろうな・・・いざ探すとなると、なかなか見つけれないもんなんだね・・・」

通報部隊を探しているネス。

> i 3 5 8 1 0 — 2 0 9 6 <

そんな彼の背後から、ターゲットとなる通報部隊が迫る・・・

ネス

「なるべく笛を鳴らされる時間を短くして凍らせたいね・・・ずっと吹かれたら、それだけ逃げ辛くなるし・・・」

自論を展開するPSI少年。

その時・・・

ピーーーーーッ ピーーーーッ ピーーーーッ

見つかった・・・

ネス

「うわっ・・・！後ろにいた・・・！」

笛を鳴らしながら、ネスの方へ近付いていく通報部隊。

ネス

「来たな！これを浴びて凍れ！」

プシューーーーーー！

ネスが吹き付ける冷氣によって、通報部隊は凍り笛の音も止んだ。

ネス

「OK・・・！凍ったぞ・・・！あっ・・・あれハンターじゃない・・・？早くこの場を離れよう・・・！」

笛の音を聞き付け現れたハンターの姿を遠くから捉え、その場から離れる。

どうやら見つからずに済んだ様だ・・・

ネス

「もうさ・・・今回の逃走中は脅威となる事が多過ぎだね・・・まあ、それは兎も角・・・次行こう・・・！」

ここまで1階螺旋階段近くのベンチの下に隠れたまま、全く動いていないヴィータ。

ヴィータ

「遅過ぎる・・・！何でいつまで経ってもタイマーが動かねえんだよ・・・！」

ミッションがクリアするその時を待っている。

ヴィータ

「ふっ、まあいいさ・・・ミッション遂行なんていう邪道を犯してる奴等は、全員捕まる宿命なんだし・・・！今回のゲームでは、あたしだけが賞金を獲る運命なんだよ・・・！」

ここまで1度もハンターに追われていない為か、上手いゲーム運びによるほくそ笑みとも、ハンターや通報部隊に対するせせら笑いとも取れる笑みを浮かべる。

シグナム

「これも早めに消えてはくれないみたいだな・・・」

なかなか魔方阵が消えず、焦り出すシグナム。

その時・・・

シューーン・・・

シグナム

「おっ、消えたみたいだな・・・」

魔方阵が消滅し、冷凍銃が現れた。

彼女はそれを背負おうとするが・・・

シグナム

「ん・・・？この冷凍銃、いつものと違うぞ・・・最初のミッションの時に運んだ大袋に描かれていたハンターマークと同じマークが描かれている・・・という事は、これはハンターに対して使う物という事か・・・？」

そう・・・この冷凍銃のみ、ハンター専用の冷凍銃となっている。これを使えば、エリア内を搜索しているハンターを凍らせ動きを止める事が出来る。但し、凍らせられるハンターは1体のみ。

シグナム

「従来とは異なる冷凍銃か・・・だが、これなら逃げ切れる確率は更に上がるな・・・！」

理解した彼女は、冷凍銃のタンクを背負う。

・・・と、その時・・・

ピーーーーーッ　　ピーーーーーッ　　ピーーーーーッ

通報部隊に見つかった・・・

シグナム

「くっ・・・！こんな時に通報部隊・・・！」

近くにいたハンターが、シグナムの確保へと向かう。

シグナム

「くそっ……！重過ぎて上手く走れん……！ハンターが2体も来たら終わりだぞ……！」

通報部隊の笛の音が、絶え間なく鳴り響く。

> i 3 5 8 1 1 — 2 0 9 6 <

そこへ、ハンターが接近……

シグナム

「小癪こじゃくな……！むっ、ハンター……！来い！」

プシューーーーーー！

彼女は迫ってきたハンターに冷気を浴びせる。

シグナム

「動かなくなつたぞ……」

ハンター FREEZE……

これで、ハンターの数はいくつになった。

シグナム

「よしっ……！脅威がまた減つたな……しかし、笛の音がうるさい……！場所を変えるか……！」

通報部隊から逃れる為、近くの西口の階段で4階へと移動する。

シグナム

「ハンターは減らせたが、やはりあの通報部隊は厄介だ……!と
りあえず音は止んだみたいだな……4階の魔方陣はまだ消えてな
いかもしれないな……行くか……!」

危険を顧みず、4階に出現している魔方陣を^{かえり}目指す。

> i 3 5 8 1 2 — 2 0 9 6 <

しかし、別のハンターに見つかった……

……が、シグナムは気付かない……

ハンターとの距離は徐々に縮まる。最早、逃走不可能……

シグナム

「……なあっ!？」 ポンッ

> i 3 5 8 1 3 — 2 0 9 6 <

シグナム

「嘘だろ……? 情けない……まさかこんな事になるつとは……
ルイージに申し訳ない……」

牢獄

レッド

「あつ・・・！『4階駐車場にてシグナム確保』・・・！」

レッド以外

「ええゝ！？」

ヤング

「また復活組確保かよ！？」

アミティ

「復活組で残ってるの誰！？」

ドクター

「あとは・・・ネスだけみたいだな」

祈里

「ネス君逃げてー！」

ロイ

「もうお前だけだ、俺達の希望は！」

リュカ

「復活させてくれたルイージの為にも！」

ルイージ

「逃げ切ってくれゝ！」

ヴィータ

「『シグナム確保』って、リーダー復活しておいて何やってんだよ・

「・・・！逃げ切るんじゃないかったのかよ・・・！？」

スバル

「『残り3人』だって・・・！まだ時間も動いてないし・・・これはヤバ過ぎるって・・・！」

ネス

「復活組って、若しかしてボクだけ・・・？どうしよう・・・一気にプレッシャーが掛かってきた・・・！」

残る逃走者は、スバル・ヴィータ・ネスの3人だけとなった。

ブルルルル　ブルル

スバル

「えっ、何・・・？立て続けにメールって・・・」

ネス

「えっと・・・『ミッション途中経過　消されていない魔方阵は4階のみ』だって・・・4階・・・！」

スバル

「4階か・・・結構近いな・・・！早く行かなきゃ・・・！」

ヴィータ

「あと1つか・・・それさえ消せば、時間が動くんだな・・・？まあ、残ってる2人が何とかしてくれる筈さ・・・！あたしは自分の事で精一杯だ・・・！ミッション参加なんて愚の骨頂だよ・・・！」

スバル

「ここだ・・・！」

南口の階段を使って、4階へと上がってきたスバル。

それと粗^ほ同じ時に、ネスが中央口から現れた。

スバル

「あつ、ネス」

ネス

「スバルさん」

スバル

「魔方陣って何処らへんかな？」

ネス

「地図を見る限り・・・この反対側にあるみたいなんですよ」

スバル

「反対側か・・・でも結構近いところ・・・ん・・・？ヤバい！ハンター来た！」

ネス

「嘘！？こんな時に!？」

追って来るハンターを目撃し、一目散に逃げる2人。

> i 3 5 8 1 4 — 2 0 9 6 <

二手に分かれて、更に逃げる。

上手く撒いた様だ。

ネス

「危な過ぎ・・・！もう一寸気付くのが遅かったら、間違いなくどつちかは捕まってたよ・・・！怖い・・・」

スバル

「ヤバいつて、これは・・・！あれ・・・？あれ魔方阵じゃない・・・？」

偶然逃げた先に魔方阵を発見したスバル。

スバル

「よしっ・・・！これを消せばクリアだ・・・！」

彼女は魔方阵の上に乗る。

スバル

「頼むから、ハンターも通報部隊も来ないでよ・・・来たらあたしは一卷の終わりだからね・・・」

ハンターに追われ、魔方阵から遠ざかってしまったネス。

ネス

「急いで戻らないと・・・！あつ、ダメだ・・・ハンターと通報部隊がいる・・・これじゃ近付けない・・・！」

ハンターと通報部隊を目撃し、思う様に動けない。

ネス

「これじゃ、クリア出来ないよ・・・!」

スバル

「来そうだな・・・来そうで怖い・・・早く消えてよ、魔方阵・・・!」

ハンターと通報部隊に警戒しながら魔方阵の上に乗っ続けるスバル。

そして・・・

シューン・・・

スバル

「消えた!」

これで、全ての魔方阵が消え去った。

その瞬間・・・

> i 3 4 7 4 8	—	2 0 9 6 <
---------------	---	-----------

> i 3 5 8 1 5	—	2 0 9 6 <
---------------	---	-----------

> i 3 5 8 1 6	—	2 0 9 6 <
---------------	---	-----------

ゲーム時間が再び動き始めた。

> i 2 7 6 9 8	—	2 0 9 6 <
---------------	---	-----------

スバル

「ヨッシャー！ミッションクリアだ！動いてる、動いてる！良かった……！」

牢獄

プルルルル プルル♪

レッド

「メール来た！」

スネーク

「内容は何だ？」

デイジー

「早く読んで！早く！」

レッド

「ちよつと待てよ……おっ！『全ての魔方陣が消滅し、ミッションクリア』！」

レッド以外

「おおー！」

レッド

「『再びタイマーが動き出した』だつてよ！」

アルル

「ホントだ！モニターのタイマーも動いてる！」

シヤマル

「皆すごいわ！」

咲

「このまま動かなかつたらどうなるのかと思つたけど・・・」

ワルイージ

「素晴らしいな！あと5分切つたし・・・このまま逃げ切つてもらいたいな！」

キャロ

「そうですね！何としてでも！」

ヴィータ

「おっ・・・！時間が動いたぞ・・・！賞金も50円ずつ上がつてつてるな・・・！」

ネス

「はあ・・・長かつた・・・でも漸く悪夢やつの時間から解き放たれた・・・あとは逃げる事に専念すればいいんだね・・・ルイージ待つて・・・君の36万円は、ボクが必ず獲るからね・・・！」

スバル

「あれ・・・？さっきまでは冷凍銃が出てきてたのに、最後のは何も出て来ないよ・・・？やっぱり通報部隊は全部消せる訳じゃなかったんだ・・・」

現在逃走者達を追い詰めるのは、2体のハンターと6体の通報部隊だ。

スバル

「でも、これだけ減らせたなら大きいよ……！逃走成功までもうすぐだ……！ここまで来たら、絶対に72万円獲ってやる……！ここで決めなきゃ女が廃るもんね……！」

北条 響の口癖を真似て、自分を鼓舞するスバル。

ヴィータ

「今のところ、72万円を9割程度の力で握り締めてる感じだな……！これはどう考えたって、賞金もらったも同然だな……！ザマ見やがれ、ハンター……！あたしの作戦勝ちだ……！」

逃走成功を確実視したヴィータ。

ネス

「逃げ切ったら、ボクの取り分は36万円か……まあ、それでも野球セット一式は買えるからいいけどね……それよりも、助けてくれたルイージの面子は潰せないね……その為にも、絶対に耐え抜いてやる……！」

救世主の名を傷つけまいと奮い立つネス。

ゲーム終了まで、4分30秒を切った。

果たして3人は、逃げ切れるのか！？

呪縛が解かれる時（後書き）

ミッションをクリアし、ゲームも遂に大詰めを迎えた

残る3人は、逃走成功の名誉を受け取れるのか！？

大詰め（前書き）

逃走者3人vsハンター2体&通報部隊6体

ゲーム終了までの4分半・・・勝つのはどっちだ!?

大詰め

残る逃走者は、スバル・ヴィータ・ネスの3人。

彼等は、あと4分ほど逃げれば逃走成功の栄誉と賞金72万円を獲得出来る。

しかし、2体のハンターと6体のインラインスケート通報部隊がそれを阻む。

ハンターに捕まれば、ここまで積み上げてきた賞金も全て水の泡と化す。

スバル

「残り4分・・・今賞金は、70万8000円だって・・・！あと4分・・・逃げ切りまで4分・・・！もう絶対捕まりたくない・・・！機動六課の皆が、72万円を待っている・・・！あたしが逃げ切らなきゃ・・・！」

ここまで数々の活躍をしてきたスバル。目指すは逃げ切りだ。

ヴィータ

「ここまで来れば、72万円を99%の力で握り締めてると言っても過言じゃねえだろ・・・？やったぜ・・・！確実に賞金はあたしの物だ・・・！ザマ見やがれ、ハンター・・・！捕まえられるもんなら捕まえてみる・・・！」

逃走成功を確信しているヴィータ。このまま1度もハンターに追われる事無く逃げ切れるか。

ネス

「あと4分か．．．こういうゲームって、1分や1秒がものすごく長く感じられるよね．．．早く終わってほしいな．．．じゃないと、胃酸が逆流しそうで．．．あつ、ハンターだ．．．！」

唯一の復活組であるネスの視線の先にハンター．．．

> i 3 6 3 3 7 — 2 0 9 6 <

ネス

「こつち来るかな．．．？来そうだったら、移動しよう．．．」

車の陰から、ハンターの動きを窺^{うかが}う。

ネス

「ああ．．．完全に来るね、これは．．．」

ハンターが接近してきた為、移動を試みる。

> i 3 6 3 3 8 — 2 0 9 6 <

ハンターは気付いていない様だ。

車体を利用し、上手くかわす事が出来た。

ネス

「危ない、危ない．．．ハンターに見つかったら、只事じゃないからね．．．」

牢獄

ワルイージ

「これ、ひよっとしたら3人とも逃げ切れるかもしれないな」

咲

「だとしたら、最高記録だよ？」

ヤング

「ここまで来たら、是非とも樹立してほしいよな」

ロイ

「それにしてもよ、ヴィータとか言う奴全然見掛けねえな」

アルル

「そうだよな。メールにも1度も名前載ってないし」

祈里

「あのニッパを使うミッション以来、姿すら見てないよ？」

リユカ

「何処かに隠れてるんじゃないかな？」

ドクター

「それは有り得る。ベンチの下にでもいるんじゃないだろうか」

シャマル

「ああ……有り得そうね、確かに」

スネーク

「あいつの身体なら、すっぱり入りそうだからな」

レッド

「さて、残りも3分半だが・・・果たしてどうなるか」

デイジー

「1人でもいいから、誰かには逃げ切ってもらいたいわ」

アミティ

「そうだよ。2回連続全滅だけは避けてほしいな」

キャラ

「最後まで気を抜かずに、頑張ってもらいたいですね」

ルイージ

「皆逃げるゝ！」

ミッション3のクリア以後、ずっとミッションに参加せずに隠れ続けていたヴィータ。

ヴィータ

「ハンターも通報部隊も、他の2人に夢中になってる頃だろうな・・・あたしの事なんか見向きもしてねえ・・・！あたしが立てた作戦は完璧だったな・・・！賞金は頂いていくぜ・・・！」

ハンターと通報部隊を嘲笑する様な不敵な笑みを浮かべている。

> i 3 6 3 4 0 — 2 0 9 6 <

そんな彼女の近くにインラインスケート通報部隊・・・

ヴィータ

「ん・・・？何か変な音がするが・・・ゲツ・・・！通報部隊じゃねえか・・・！ヤベエ、隠れねえと・・・！」

接近してくる通報部隊に反応し、すぐさまベンチの下に身を隠す。

すると通報部隊は、ヴィータが隠れるベンチの近くで足を止めた。

そして・・・

ピーーーーーッ ピーーーーッ ピーーーーッ

見つかった・・・

ヴィータ

「嘘だろ・・・！？」

近くにいたハンターが、音の鳴る方へと走り出す。

ヴィータ

「くそっ・・・！うるせえ！笛鳴らすな！」

ベンチの下から抜け出し、その場から離れるヴィータ。螺旋階段を利用し、2階へと上がる。

しかし通報部隊は、階段の壁を舐めるように滑りながら執拗に彼女を追跡する。

ヴィータ

「なっ！？あんなのアリかよ！？」

> i 3 6 3 4 1 — 2 0 9 6 <

絶えず鳴り響く笛の音・・・

ヴィータ

「ちくしょう・・・！とりあえず、こいつ等を振り切らねえと・・・！」

彼女は近くの曲がり角を利用し、振り切りを試みる。

しかし、相手はインラインスケートを装備している。彼等を撒くのは容易ではない。

ヴィータ

「しつげえんだよ、マジでよ・・・！」

諦めずに何度も曲がり角を曲がるヴィータ。

すると、いつの間にか笛の音が鳴り止んでいるではないか。

どうやら、通報部隊を振り切れた様だ・・・

ヴィータ

「危ねえ・・・！だが、何とか切り抜けられた様だな・・・ザマ見

やがれ、笛吹き野郎め・・・！」

> i 3 6 3 4 2 — 2 0 9 6 <

しかし、彼女が向かう先にハンター・・・

ヴィータ

「さてと、あたしは元の場所に戻るとするか・・・」

彼女はハンターの接近に気付いていない。

ピーーーーーービビビッ

LOCK ON VITA

そして、見つかった・・・

ヴィータ

「ん・・・？うおあゝ！何でハンターがあんな所にいんだよう！」

螺旋階段を下り、一目散に逃げるヴィータ。

彼女が逃げる先にいるのは・・・

スバル

「このフロア、人の気配が全然無いな・・・」

スバル・ナカジマだ・・・

スバル

「この静寂が余計に怖さを増している様にも・・・えっ、何？ヴィータさん？ハンターに追われてるし・・・！」

ハンターに追われるヴィータの姿を見て、釣られて逃げる。

しかし、その時・・・

スバル

「ちょ、ちょっと待って・・・！ヴィータさん、何でこっち来るの・・・！？何でこっちにハンター呼び込んで来るの・・・！？こっち来ないで、マジで・・・！」

> i 3 6 3 4 3 — 2 0 9 6 <

彼女も巻き添え・・・

しかし、ハンターが視界に捉えているのは後ろにいるヴィータだ・・・

ピーーーーーー

LOCK ON VITA

ヴィータ

「くそっ・・・！何でこのあたしが追われなきゃなんねんだよ・・・！？つか、ハンター速過ぎんだろ・・・！？」

尚も逃げ続けるヴィータ。しかし、彼女がハンターに太刀打ち出来る訳が無い。最早、逃走不可能・・・

ヴィータ

「ぐわあゝ！」 ポンッ

> i 3 6 3 4 4 — 2 0 9 6 <

ヴィータ

「チクシヨ・・・！ふざけんじゃねえよ、コノヤロー！」

怒り狂う彼女は、身に付けていたヘッドギアをハンターに向けて投げ付ける。

しかしハンターは、それが当たっても見向きもしない・・・彼等は、逃走者を確保する事以外の思考は持ち合わせていないからだ。

ヴィータ

「ふざけんなよ、マジで・・・！どう考えたって有り得ねえだろ、くそつたれが・・・！」

その間に、スバルは逃げ延びた様だ。

スバル

「超怖い、超怖い・・・！マジで怖いって・・・！」

ネス

「あつ・・・！『1階食品館付近にてヴィータ確保』だって・・・！」

牢獄

レッド

「『残るはネスとスバル・ナカジマ』!」

シグナム

「とうとう2人にまで減ったか」

ドクター

「1分に1人確保だと全滅になり兼ねないな、これは」

ロイ

「でも、あいつ等なら絶対やり遂げてくれるさ」

祈里

「そうですね。そう信じましょう!」

アルル

「2人とも行け行け!」

ワルイージ

「どっちも絶対に逃げ切れよ!」

ルイージ

「ネスー!お願いだから逃げ切つて!」

リュカ

「ボクに分まで逃げて!」

キャロ

「スバルさん!もうすぐですよ!」

シャル

「ここまで来たんだから捕まったらダメよ！」

> i 3 6 3 4 5 — 2 0 9 6 <

ゲーム終了まで、2分を切った。

残る逃走者は、スバル・ナカジマとネスの2人だけ。

果たして、逃げ切れるのか！？

大詰め（後書き）

次回、150分の過酷な逃走劇に終止符が打たれる！

残された2人の運命は！？

そして遂に、ゲームマスターの正体が明かされる！？

ゲーム終了！　そして・・・（前書き）

残り2分の攻防・・・残る2人は逃げ切りか・・・それとも・・・

ゲーム終了！　そして・・・

ゲーム終了まで、既に残り2分を切っている。

残る逃走者は、スバル・ナカジマとネスの2人。

対するは、2体のハンターと6体のインラインスケート通報部隊。

逃げ切れば72万円・・・捕まれば0円・・・

牢獄

レッド

「あと1分40秒だ！」

ワルイージ

「あの2人なら絶対行けるぜ！」

咲

「大丈夫、大丈夫！」

ヤング

「絶対捕まるんじゃないぞ！」

リユカ

「もうホントにすぐそこだよ！」

スバル

「時間が来るまでは、一瞬でも気が緩んだら絶対捕まる．．．！捕まったら、なのはさん達の顔に泥を塗る事になる．．．！絶対に捕まってたまるか．．．！」

ネス

「残り１分半．．．こういう時こそ集中しなきゃ．．．！ハンターや通報部隊が何処から来るか分からないからね．．．しっかりと周りを見とこう．．．！」

賞金は既に７１万７０００円を超えた。悲願の逃走成功はもう目と鼻の先だ。

ネス

「あっちから来るかもしれない．．．離れとこう．．．危なそう．．．」

スバル

「ヤバイ．．．追い込み掛けてきそうで怖い．．．」

彼等の頼みは、己の脚力のみ．．．

> i 3 6 9 2 9 — 2 0 9 6 <

ゲーム終了まで、遂に残り１分．．．

スバル

「あと１分．．．！」

ネス

「1分・・・この1分で全てが決まる・・・！」

牢獄

レッド

「あと1分切ったぞ！」

ロイ

「よしっ！このまま逃げ切れ！お前等なら出来る筈だ！」

シグナム

「だが、最後まで油断だけはするんじゃないぞ！」

アルル

「何だろう、この牢獄にいながらの手に汗握る感じ・・・！」

祈里

「もう逃げている身でも無いのに、プレッシャーがすごい・・・！」

ルイージ

「2人とも行け！」

2体のハンターと6体の通報部隊は、一気に追い込みを掛ける。

果たして、勝つのはどっちなのか。

> i 3 6 9 3 0 — 2 0 9 6 <

スバル

「あと30秒だ・・・!」

周囲を警戒するスバル。

しかし・・・

ピーーーーーッ ピーーーーーッ ピーーーーーッ

通報部隊に見つかった・・・

スバル

「ヤバッ!」

近くのハンターが音の鳴る方へと走り出す。

スバル、逃げ切れるのか。

ネス

「あと20秒・・・!」

スバル

「よしっ、諦めた・・・!でも、近くにハンターいそつだな・・・」

牢獄

レッド

「15秒前!」

全員

「・・・14!・・・13!・・・12!・・・11!」

>i36931
——
2096<

ネス

「10秒前!」

牢獄者

「・・・9!・・・8!」

スバル

「・・・7!・・・6!」

>i36932
——
2096<

ネス

「・・・5!」

>i36933
——
2096<

スバル

「・・・4!」

>i36934
——
2096<

ネス
「・・・3！」

> i 3 6 9 3 5
— 2 0 9 6
<

スバル
「・・・2！」

> i 3 6 9 3 6
— 2 0 9 6
<

牢獄者
「・・・1！」

> i 3 6 9 3 7
— 2 0 9 6
<

スバル
「ヨッシャー！」

> i 3 6 9 3 8
— 2 0 9 6
<

スバル
「逃げ切ったぞー！目標達成だー！」

> i 3 6 9 3 9
— 2 0 9 6
<

ネス
「やったー！復活した身だけど、やっぱり嬉しいー！」

牢獄

レッド

「『スバル・ナカジマ、ネス逃走成功！』！」

レッド以外

「おおー！」

レッドからの報告で、牢獄の中も大喝采。

その後、暫くしてスバルとネスが牢獄に到着。

祈里

「2人ともおめでとう！」

ロイ

「すげえな・・・お前等やっぱり最高だよ！」

アルル

「スバル150分以上も逃げたんだよね。すごいよ、ホントに！」

スバル

「最後の10分ぐらいは、かなりしんどかったけどね」

アミティ

「ネスも初の復活しての逃げ切りだね！」

ネス

「それもこれも、ルイージのお陰だよ」

ルイージ

「そんな・・・ボクはただ復活させてあげただけなんだから・・・」

ヤング

「にしても、2人逃げ切るなんてすごい事だぜ？」

ドクター

「うむ・・・本家では、1人逃げ切るのが精一杯だっという事が増えてきているからな」

スネーク

「2人の勝利は素直に称えてやりたい・・・」

ヴィータ

「ぐぐぐっ・・・マジで動けねえ・・・」

スバル

「あれ・・・？何でヴィータさんは普通の体勢になってないの・・・？」

ネス

「というか・・・その体勢のまま石みたいに固まっちゃってるみたいだし・・・」

デイジー

「それが・・・何故か分からないけど、牢獄に入ってきた途端に身体が動かなくなったみたいなの・・・」

リュカ

「何かの呪いみたいな感じだよね、これ・・・」

シグナム

「恐らく、風当たりか何かの副作用かもしれないな」

シャマル

「でも、ここまでなるっていう事は相当なものよ？」

咲

「怖いよね、他人の怨みって・・・」

キャラ

「ホントですね・・・私も気を付けないと・・・」

そして、いろいろな作者の方々からの差し入れを全員で食べる事に。

アルル

「このフレーバー美味しい」

咲

「いくらでも食べられそうだね！」

キャラ

「このキャンディもなかなかいけますよ！」

アミティ

「いろんな味が楽しめるしね」

ヤング

「このシュークリームも結構美味いぞ！」

祈里

「疲れた時には、甘いものが1番だもんね！」

レッド

「ケーキも最高だ！1人で1ホール全部食っちゃいたいぜ！」

シグナム

「それはいくらなんでも欲張り過ぎだぞ、レッド」

デイジー

「私にも1切れちょうだいよ！」

ドクター

「うん・・・この炭酸飲料はスカツとするな」

リユカ

「そうだね」

ルイージ

「36万円手に入れての差し入れ・・・ホントに嬉しい〜！」

> i 3 6 9 4 0 — 2 0 9 6 <

ネス

「もう・・・ルイージ感極まり過ぎだよ・・・」

ルイージ

「だって・・・今までボク、こんな待遇受けた事無いんだもん・・・
！多分、今までで1番幸せかも・・・！」

スバル

「ルイージ頑張ってたもんね」

スネーク

「まさか、俺にはアイス無しだとは・・・だが、それ以外の物やブルーハワイ味の飴が食えるだけでも幸せだと思わんとな」

えりか

「スネークさんはいいよ。あたしなんか、アイス抜きの上にハバネロ味のキャンディだよ！？おまけにシュークリームも山葵^{わさび}入りだし・・・滅茶苦茶辛過ぎる！しかも、口直しのケーキもスポンジがカボン状態だよ！こんなの食べられないってば！唯一の救いは、炭酸飲料だけだなんて・・・そんなに自首する事が悪いのか！？」

ヴィータ

「あたしに関しては、炭酸飲料もハバネロ味だぞ！？何であたしはこんな目に遭わなくちゃいけないんだよ！？ルールに則^{のっと}って行動する事の何が悪いんだ！？」

・ 不遇な2人の逃走者の叫びは、エリア内に虚^{むな}しく響き渡っていた・

しかし、牢獄の傍らに何やら異臭の漂う白と茶色の液体が容器から零れている・・・

ロイ

「あのシチューとカレー、見た目も具材も匂いも最悪で誰も近付こうとしなかったから、俺が鍋ごと蹴飛ばしたんだよ。『こんなもん食えるかー！』って・・・」

ワルイージ

「あんな鼻が曲がる程の異臭は初めてだ……もうあんな臭い2度と嗅ぎたくねえよ、マジで」

そんな裏事情もあつたみたいで……

そして束の間の談話も終わり、逃走成功したスバルとネスは牢獄前の箱の南京錠を解き、中の72万円の札束を手についた。横から自首したえりかも割り込んで……

スバル

「賞金72万円!」

ネス

「賞金36万円!」

えりか

「賞金54万6800円!」

スバル・ネス・えりか

「獲ったぞー!」

牢獄者

「おめでとー!」

ゲームマスター

「……」

逃走成功を果たし札束を持って喜ぶ2人と自首をして喜ぶ1人を、
牢獄者が祝福する様子をモニター越しに見ているゲームマスター・

突然画面が切り替わり、『データを整理しますか?』の文字が浮か
び上がった・・・

ゲームマスターは、何の躊躇^{ためらい}も無く『YES』を選択した・・・
すると、過去の逃走者達に関するデータが事細かに次々と表示され
ていく・・・

その時、ゲームマスターの前に3つのモニターが現れた・・・

???

「今回も実に素晴らしい実験結果だったぞ・・・」

ゲームマスター

「有難う御座います・・・」

???

「これに必要なデータは、間違いなく全て出揃ったな・・・」

???

「しかし、まさかあのドクターマリオに我々の目的をほぼ当てられ
てしまうとはな・・・」

ゲームマスター

「私も初めは驚きました・・・しかし、本人達は信憑性^{しんぴょうせい}の無い仮説

として片付けていますので、問題は無いでしょう・・・」

「??？」

「まあ、確かにな・・・」

「??？」

「これは次回も楽しみにして良さそうだな・・・期待しているぞ・・・」

「??？」

「過去の逃走者達を全員地獄へ葬る為に・・・そして初代ゲームマスター『月村サトシ』、目下もっかのゲームマスター『睦月イオリ』むつきの思いを打ち砕く為に・・・更には肉体を失った我々の復讐と完全復活の為に・・・頼んだぞ、『月川チヒロ』・・・」

ゲームマスター

「畏かしこまりました・・・『タブー』様、『ブラックホール』様、『ヨグス』様、『ヨグス』様・・・」

会話が終わると、『タブー』『ブラックホール』『ヨグス』と呼ばれた3つのモニターは姿を消した・・・

その直後、手元のモニターに過去の逃走者全員の顔写真が映ると、『月川チヒロ』と呼ばれた偽者のゲームマスターは立ち上がり、フードを脱ぎヘルメットを外した・・・

そこには、茶髪のセミショートヘアの女性の顔があり、不敵な笑みを浮かべている・・・

月川チヒロ

「フフフフ．．．逃走者達．．．次回のゲームがあなた達の最期
よ．．．」

ゲーム終了！　そして・・・（後書き）

逃走中を操っていた人物・月川チヒロは、真のゲームマスターではなかった・・・

これは一体どういう事なのか！？

次回、その理由が明らかとなる！

ゲームマスターの真実（前書き）

逃走中を操っている偽ゲームマスター・月川チヒロ

彼女は何故逃走者達を殲滅せんめつさせようとしているのか！？

そして、彼女の動向を見守る肉体を持たない幹部達との関係は！？

その全てが、今明らかとなる！

ゲームマスターの真実

時は西暦2500年・・・

地球は人類が生存出来ない環境へと変貌し、人々は宇宙移民船に乗り月へと脱出・・・

月面にコロニーを建設し、新たな生活を始めた・・・

そして時は流れ、西暦2900年。

巨大企業クロノス社の若き天才科学者・月村サトシが、研究を重ねハンターの開発に成功。

逃走中を開催し、この世界は疎か別世界の人々をも熱狂させるエンターテイメントとして大成功を収めた。

しかし、西暦2930年・・・

月村サトシは重病に冒され、その生涯を閉じてしまった・・・

彼の死を誰よりも悲しんだのは、彼の助手を務めていた睦月イオリだった。

彼女は彼の意味を継ぎ、2代目ゲームマスターとして逃走中を開催。今では月村サトシに勝るとも劣らない実績を残す、偉大なゲームマスターとして成長していた。

ところが、彼女もまた病に倒れる事態に見舞われた・・・

・ 幸い命に別条は無かったが、長期入院を余儀なくされてしまった・・・

彼女が入院している間、彼女の助手を務めている月川チヒロが臨時のゲームマスターとして逃走中を開催する事となり、睦月イオリもこれを承諾した。

しかし、それは彼女が仕組んだ罠だった・・・

ある日の事・・・月川は、過去の逃走中に参加した逃走者達の世界を巡り回っていた。

その目的は・・・逃走者達によって滅ぼされた邪悪な存在を復活させる為の要素を探す事であった。

表の顔は睦月イオリの助手であり臨時のゲームマスターでもあるが、裏の顔は全ての世界に蔓延^{はびこ}り続ける邪悪な存在の総帥・・・それが月川チヒロなのである。

そして彼女は、「スマブラの世界」で『タブー』・・・「プリキュアの世界」で『ブラックホール』・・・「魔導物語とぷよぷよの世界」で『ヨグス』・・・3体の大きな悪の存在の魂を発見した。

その時、彼女は思い付いたのだ。逃走中のゲームとハンターを利用すれば、この3体を復活させられると・・・

彼女は持ち帰った魂をクロノス社のモニターと融合させ、3体の命を辛うじて取り留めた。

そして、彼等の復活を固く約束したのだった・・・

所変わって、クロノス社内・逃走中の司令室・・・

彼女は1人、ゲームマスターが座る椅子に凭れ掛かり、不敵な笑みを浮かべていた・・・

月川

「これまで逃走中で賞金を獲得した人達・・・今頃それで楽しんでいるのかしら・・・？フッフッフ・・・死に時が近付いている事も知らずに・・・欲望に溺れた人間ほど愚かな生き物はいないわね・・・」

・・・と、その時・・・

ピピピピピピ

月川

「・・・！？」

突如、司令室内に鳴り響く電子音・・・彼女はすぐさま手元のモニターを確認する。

AI

「逃走者データの中に、未確認人物が検出されました」

月川

「未確認人物・・・？そんな筈は・・・！」

ＡＩの言葉に驚きを隠せない月川。確認の為に、彼女はモニターの左右に別のモニターを表示させる。

月川

「何これ・・・」

そこに映っていたのは、２０１１年度のプリキュアである『スイートプリキュア』の４人と２０１２年度のプリキュアである『スマイルプリキュア』の５人の姿だった。

月川

「有り得ない・・・データでは、プリキュアは全部で”２１人”となっていたのに・・・他にもまだ７人もいたなんて・・・これじゃあ、御三方の復活がますます困難なものになってしまう・・・！」

新たなプリキュアもとい逃走者の存在を知った月川は肩を落とし、気が抜けた様に椅子に座り込んだ。

月川

「くっ・・・！やっぱりあの時、全員まとめて消しておくべきだったのよ・・・！」

彼女が言う『あの時』とは、過去最多の３１人が参加し全員確保に終わったミッドナイトランドでのゲームの事である。

月川

「あの時殲滅^{せんめつ}しておけば、こんな事態にもすぐ対処出来ていた筈・
・！でもデータがあまりにも少な過ぎた・・・だから敢^あえて見送っ
た・・・まさか、その付けがこんな時に回^まって来るなんて・・・」

月川は自分で蒔^まいた種に強い憤りを感じていた・・・

月川

「本来なら・・・過去の逃走者を全員集めて、逃走中でハンターに
全員確保してもらって、ゲーム終了時に全員を抹殺する・・・そう
すれば御三方は復活し、全ての世界を悪に染め上げる事が出来る・
・でも、ゲームの参加人数には限界がある・・・もし定員を超えて
ゲームを行えば、メインサーバに非常に大きな負荷を掛ける事にな
り、下手をすればメインサーバが破壊されてゲーム続行が不可能に
なり、私の計画は何もかもダメになってしまう・・・！それだけは
絶対に避けないと・・・！」

自ら立てた計画が狂い出した事に焦り出す月川。しかし・・・

月川

「ん・・・？ちょっと待って・・・」

何か閃^{ひらめ}いた様に目を見開き、顔を上げた。

月川

「そうだわ・・・この方法を利用すれば・・・！」

すると彼女は、手元にいくつものモニターを表示させ、何やら作業
を始めた。

月川

「やっぱりね・・・これなら逃走者達を全員あの世へ葬り去れる・・・！そして何よりも、誰もが口に使っていた『逃走者同士の絆』とかいう下らないものを崩壊させる事も容易く出来る・・・！」

不敵な笑みを浮かべ、彼女はモニターを消す。そして窓際に歩み寄り、逃走者達に言い放つ様に口を開く・・・

月川

「逃走者達！あなたは御三方の復活の為に犠牲になる運命なのよ！次のゲームで、あなた達を地獄へ葬ってあげる！」

月川の自信に満ち溢れた不気味な高笑い、月面のコロニー中に響き渡っていた・・・

ゲームマスターの真実（後書き）

遂に明らかとなった偽ゲームマスター・月川チヒロの思惑

そして、彼女に狙われた過去の逃走者達

一体この先、どんな波乱が待ち受けているのだろうか！？

次回からは、皆さんお待ちかねの未公開シーンです！

どうぞお見逃しなく！

B e h i n d T h e S c e n e ? 準備中（前書き）

それぞれの思いを胸に、戦いを控える逃走者達・・・

Behind The Scene? 準備中

リュカ

Q・今回で3回目になるが？

リュカ

「もう3回も出てるんですね、ボクって・・・あの、さつきレッドとも話したんですけど・・・逃走中って経験が物を言う面もあるんで・・・今回のメンバーの中で1番出ている者同士としては、これ以上早めに・・・早めに以前に捕まる事は許されないと思っているんで・・・」

Q・今回逃げ切れば90万円だが、目標金額と使い道は？

リュカ

「一応、今回ばかりは自首するつもりはないんで・・・目標は最後まで・・・90万円を目指して・・・それで、使い道としては・・・ボク、ペット飼ってるんですよ・・・ボニーって名前の愛犬を・・・その遊び相手になる犬を買いだいたいと思います・・・そろそろボニーも、いい加減そいう相手が欲しい時だと思っんで・・・」

ワルイージ

Q・今回が初参戦だが、逃げ切る自信はある？

ワルイージ

「勿論あるとも・・・！何せ俺様は、今までずっとスポーツやってきたからな・・・最近は二ユースポーツっていうのにも力を入れてるし・・・」

Q・100mはどのぐらいで走れる？

ワルイージ

「100mは・・・確か11秒台は出してた筈・・・この速さに、地形を利用した逃げ方の要素が加われば、150分間逃げ切れると俺様は信じてる・・・！」

Q・ライバルのルイージに勝つ自信はある？

ワルイージ

「当然だろ・・・！俺様があいつより劣っている物なんて、何一つ無いんだぜ・・・？負ける要素が無い以上、あいつよりは絶対長く生き延びてやるよ・・・！」

デイジー

Q・逃走中には自首というものがあるが、自首する気はある？

デイジー

「正直に言いますと・・・自首する気は満々です・・・目標としては・・・最低でも50万円は持ち帰りたいなと思ってます・・・そこに行くまでに、少しでもミッションとかに貢献出来れば、姫に対する世間の悪いイメージを取り払う事が出来ると思います・・・」

Q・ある程度の賞金と好感度を持ち帰るプランという事？

デイジー

「言い方がすぐくやしいですけど・・・そういう事になりますね・・・やっぱり自首って、イメージを悪くする印象がどうしても強いらしいんで・・・ミSSIONに貢献して、その後に体力とかハンターの数とか考慮して自首をすれば、それほど悪いイメージは持たれないんじゃないかなと自分はそう思っています・・・」

スバル・ナカジマ

Q・今回、新たな目標を掲げてきたと聞いたが？

スバル

「実はそうなんですよ・・・前回『夏木りん』って子を目標にゲームに挑んで・・・でも、最終的に捕まっちゃいましたけどね・・・それで、前回参加していた『北条 響』って子がいたじゃないですか・・・？あたしも、あの子みたいにミSSIONも全部参加して、何回もハンターを振り切る気持ちで挑みたいと思います・・・！」

Q・今回は夏木りんを目標としていない？

スバル

「そんな事はないですよ・・・！最初から2人を目標に・・・2人ともカッコいいですもんね・・・2人もあたしも、性格的には男なんでね・・・この男っぱさを出していければ、前回のリベンジを果たせるんじゃないかなと・・・」

Q・今回先輩のヴォルケンリッターが参加しているが、緊張している？

スバル

「まあ、そうですね・・・緊張しますね・・・前回もなのはさん達エース陣がいましたから・・・あの時もすごく緊張しました・・・向こうは多分、前回のあたしの活躍は知ってると思うんで・・・先輩としての負けん気を醸し出しているとは思いますが・・・それに屈する事無く、あたしはあたしなりに逃げたいと思います・・・！」

日向 咲

Q・逃げ切る自信はある？

咲

「やっぱりね、自信はありますよ・・・！言っても私、ソフトボール部ではエースだし、クラス対抗のリレーなんかでは常にアンカーを務めてますし・・・この脚力を存分に生かせれば、150分もそう長くは感じないまま逃げ切れそうな気がします・・・！」

Q・前回、僅か7分半程度で捕まっているが？

咲

「余計な事聞かないで下さいよ・・・！あの時は、景色がすごく神秘的でそれに見^み蕩れてただけですよ・・・！言い換えるなら、油断し過ぎたんですよ・・・今回はそんな過ちは絶対に犯しませんから・・・！第一、エリアになってるショッピングモールに見たいと思う物無いですから・・・大丈夫です・・・！」

Q・今回逃げ切れれば90万円だが、目標金額と使い道は？

咲

「目標は当然最後まで・・・！90万円です・・・！使い道としては、毎日自営業を頑張っている両親に、日頃の感謝を込めて親孝行をしたいなと・・・あと、妹のみに何かプレゼントをしたいなと思ってます・・・今年は何と言っても、家族との絆を大事にしなければならいんで・・・私もそれに則^{のっと}てという感じですわ・・・」

ー

ヴィータ

Q・今回が初参戦だが、何か作戦は考えている？

ヴィータ

「作戦はな・・・あたしは、今日来てる逃走者の中で結構身体が小さえ方なんだよ・・・だからこの体型を利用して、上手い事隠れながらハンターを凌げば、案外逃げ切れるんじゃないかなとは思ってるけどな・・・」

Q・今回の参加者の中にライバルはいる？

ヴィータ

「当たり前だろ・・・！最低でもスバルとキャロには絶対に負けたくねえ・・・！先輩が後輩に負けるとな、次の日から立場が逆転するっていうとんでもねえ事態になるからよ・・・機動六課の中で、そんな事は絶対に起こっちゃいけない事なんだよ・・・！その為に

は、あたし達ヴォルケンリッターがこのゲームで格の違いを見せねえと・・・！今回のゲームでは、それが使命だと言っても過言じゃねえと思う・・・」

アルル・ナジャ

Q・前回の反省点はある？

アルル

「反省点ですか・・・？そうですね・・・前回出させてもらって、逃走中って言うゲームは生半可では行かないっていうのを身を持って知りましたからね・・・残り1分とか30秒とかになっても、ハンターが何処から現れるか分からない事を考えると、最後まで気を緩めたらダメだなって言う点ですかね、強いて言えば・・・」

Q・今回逃げ切れれば90万円だが、目標金額と使い道は？

アルル

「前回も言っただんですけど、ボクは基本的に自首はしないつもりなので、目標は90万円です・・・！使い道としては、ボクの世界の人達と、パーツと食べたり飲んだりする事に使うと思います・・・ボクが90万円持って帰るのを皆が待っているんで・・・その期待は裏切れないですね・・・頑張りたいです・・・！」

B e h i n d T h e S c e n e ? 準備中（後書き）

次回は抽選中

オープニングゲームに賭ける逃走者達の運はいかに・・・？

B e h i n d T h e S c e n e ? 抽選中（前書き）

- ・ オープニングゲーム前のくじ引きに、己の運命を賭ける逃走者達・

Behind The Scene? 抽選中

順番決めの抽選会場に現れたネス。

ネス

「これか、抽選箱って・・・1回目の逃走中以来だな、こんな物見るの・・・ただ今回のオープニングゲームは、先の方が得とか後の方が得とか、そういうのが無いからね・・・まあ、とりあえず引こう・・・まだ他の人が残ってる訳だし・・・うゝん、どれがいいかな・・・?」

箱から出ている何本もの棒を見回すネス。

ネス

「こんなのは運しかないからね・・・迷っても切りが無いよ・・・これにする・・・!」

彼は1本の棒を掴む。

ネス

「引きまゝす・・・せーの・・・じゃん!・・・13番だ!」

引いたのは13番・・・

ネス

「うわぁ、微妙だな13番って・・・1巡目はまだいいかもしれないけど、2巡目辺りからヤバい気がする・・・2巡目入ったら、結構押されてるよね・・・?うわぁ、そうになったら真っ先にボクが捕まる気がする・・・でも、そんなに押されてなかったら大丈夫

かもしれないしね……やるまで分かんないって事で保留しとこう・
・」

それから暫くして抽選会場に現れたのは……

アミティ

「今回もくじ引きやるんだ……」

ドクター

「これが逃走中でお馴染みの抽選ボックスか……」

2回連続参戦となるアミティと初参戦のドクターマリオだ。

アミティ

「もうこの時点でゲームは始まってると言っても過言じゃないからね……」

ドクター

「確かに……何事も最初が肝心とは良く言ったものだからな・
・」

アミティ

「どれが順番的にいい数字が描かれてる棒かな……?」

ドクター

「こういうものは直感だ……自分はこれを引く……!」

ドクターマリオが1本棒を掴む。

アミティ

「ドクター決断力早いね．．．じゃあ、あたしも．．．これ．．．！」

アミティも棒を掴む。

アミティ

「2人で同時に引こう．．．！」

ドクター

「うむ．．．」

アミティ・ドクター

「せーの．．．！」

2人が引いた数字は．．．

アミティ

「げげげ！12番だって．．．！」

ドクター

「3番か．．．2巡目か3巡目が危ない感じだな．．．」

アミティ

「いいなあ、ドクターは．．．あたしなんか1巡目でも危なそうな臭いがするよ．．．？」

ドクター

「まあ、今回のオープニングゲームは『ニムゲーム』の『100を言ったら負け』という形に似ているから、100回近くまで押さないとハンターは出ないと自分は踏んでいる．．．」

アミティ

「でもそれまでに皆が3回ずつ押してったら、確実にあたしは危険じゃん・・・」

ドクター

「その時はその時だ・・・」

アミティ

「もう・・・！絶対逃げてやる・・・！」

その十数分後に抽選会場に現れたのは・・・

えりか

「来たよ、来たよ・・・オープニングゲームの抽選・・・！」

ヤング

「随分と陽気だな、えりかは・・・」

スバル

「それが彼女のいい所でもあるんだけどね・・・」

再参戦のえりか、初参戦のヤングリンク、連続参戦のスバルだ。

えりか

「あれ・・・？もう3本しか残ってないよ・・・？」

スバル

「という事は、あたし達が最後なんだ・・・」

ヤング

「マジでか・・・何番が残ってるんだろぅな・・・すげえ気になる・・・」

この3人で抽選は終わり、全員の順番が決定する。

ヤング

「これどうすんだよ・・・？変な番号しか残ってなかったら最悪だよな・・・？」

スバル

「出来れば、真ん中辺りの数字は引きたくないな・・・」

えりか

「あたしも引きたくない・・・中盤辺りが何かと危ないって知ってるからさ・・・」

ヤング

「でも、もしこの3本が9・10・11だったら、俺達相当くじ運無いぜ・・・？」

えりか

「呼ばれる順番も結構左右されてるしね、こういつのって・・・」

スバル

「まあ・・・この時に引く順番が回ってきたんだから、四の五の言ってもしょうがないよ・・・引こつ・・・！どれ引くの、2人は・・・先に決めて・・・あたしは残り物でいいからさ・・・」

えりか

「えっ・・・？いいんですか、そんなんで・・・」

スバル

「いいの、いいの・・・残り物には福があるって良く言っし・・・それに、あたしがこの中では年長だしね・・・」

えりか

「年長って・・・スバルさん、あたしとそんなに年変わらないじゃないですか・・・」

ヤング

「でもお前相当チビだし、俺よりも年下に見えるぞ・・・？」

えりか

「むうっ・・・！この期に及んでチビって言うなー！」

スバル

「こんな所で喧嘩しないでよ・・・！いいから早く引きなって・・・！」

えりか

「分かりましたよ・・・あたしはこれでいいや・・・」

えりかは1本棒を掴む。

ヤング

「じゃあ、俺はこれにするか・・・」

ヤングリンクも1本棒を掴む。

スバル

「あたしは、残っているこれね・・・？」

スバルは余った1本の棒を掴む。

スバル

「心の用意はいいね、2人とも・・・」

えりか・ヤング

「はい・・・！」

スバル

「それじゃ、一気に引き抜くよ・・・！」

スバル・えりか・ヤング

「せーの！」

3人が引いた数字は・・・

えりか

「嘘っ！最悪っ！11番って・・・完全に真ん中じゃっん！」

スバル

「は・・・8番って・・・これも考え様によつては真ん中近くだよ
ね・・・？マジで・・・！」

ヤング

「ヨッシャー！4番だ、4番！絶対大丈夫・・・！何巡しても絶対
大丈夫・・・！」

スバル

「うわゝ．．．今回は残り物に福は無かったかゝ．．．」

えりか

「あゝあ．．．そっちにすれば良かったよ．．．そうすれば、あたしが4番だったのに．．．もう1回やり直そうよ．．．」

ヤング

「ダメに決まってるだろ．．．！くじ引きは1回限りの勝負だぞ．．．！いやあ、でも良かったよ．．．」

スバル

「でも、そんな事ばかり言ったら出すかもしれないよ．．．？」

えりか

「そうそう．．．あんまり浮かれない方が身の為だよ．．．？」

ヤング

「どうだろうな．．．まあ、勝負の行方は神のみぞ知るだし．．．」

スバル

「絶対出さないぞ、あたしは．．．そして、何が何でも逃げ切つてやるんだ．．．！」

えりか

「あたしこそ、絶対出さないで自首してやるんだからね．．．！」

ヤング

「おい、誰か早々に自首宣言したぞ．．．？」

そして3人は会場を去り、オープニングゲームが行われる屋上駐車場へ向かって行った。

B e h i n d T h e S c e n e ? 抽 選 中 (後 書 き)

次回は反省中

ゲームに敗れた直後、逃走者達はどんなコメントを残していたのか・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0685u/>

第2弾ごちゃまぜ逃走中～アイドル誘拐監禁事件～

2011年12月25日14時46分発行